1　共同研究

［概　要］

「共同研究」は，大学共同利用機関としての歴博が国内外の研究者の参加を得て実施する研究プロジェクトであり，研究課題は日本の歴史と文化に関する今日的動向をふまえて設定されてきた。共同研究の特徴は，1981年に機関設置されて以来，歴史学，考古学，民俗学および関連諸科学の連携による学際的で実証的な研究に基本をおいてきた点にある。

「共同研究」は，「基幹研究」「基盤研究」「開発型共同研究」および「人間文化研究機構関連共同研究」の４つの柱から成り立っている。「基幹研究」は人間の営為と歴史に注目した大きな研究課題の下に学際的研究を目指すテーマを設定したものであり，「基盤研究」は館蔵資料の高度情報化や新しい歴史研究の方法論的基盤を作るための課題を設定したものである。この２つを「共同研究」の核とすれば，「開発型共同研究」は，任期付き助教への若手研究者育成を目的とする共同研究であり，今後に発展しうる萌芽的課題を設定することで，「共同研究」全体を実りあるものとする役割をも担っている。「人間文化研究機構関連共同研究」は人間文化研究機構が設定した課題に基づき歴博が主体となって取り組む共同研究である。

本年度の「共同研究」は，「基幹研究」７課題，「基盤研究」13課題，「開発型共同研究」２課題，「人間文化研究機構関連共同研究」８課題について進めてきた。以下，本年度新たにスタートした新規課題を中心に説明を行う。

【基幹研究】　本年度は「古代列島世界の歴史像の再構築」を全体課題として，「先史時代における社会複雑化・地域多様化の研究」，「東アジアにおける倭世界の実態」，「古代地域社会の実像」の３つのブランチから構成される基幹研究が開始された。また，「震災と博物館活動・歴史叙述に関する総合的研究」を全体課題として，「戦時/災害と生活世界の関わりに関する総合的研究」，「東日本大震災被災地域における生活文化研究の復興と博物館型研究統合」，「災害の記録と記憶をめぐる資料論的研究」の３つのブランチから構成される基幹研究も開始された。いずれも今後進められる総合展示のリニューアルや企画展示のための学術的基盤を高めるための共同研究であり，共に歴博がめざす博物館型研究統合の実践例として位置づけられる。

【基盤研究】　本年度は広領域歴史創成研究として「日韓における青銅原料の産地の変遷に関する研究」が，歴史資源開発研究として「東アジアの宗教をめぐる交流と変容」が開始された。前者は，韓国側の研究組織と連携をとりながら，日本産青銅原料の開始時期を明らかにしようとするものであり，後者は欧米や東アジアの研究組織と連携をとりながら，民衆文化としての東アジアの宗教の変容を明らかにしようとするものである。公募型共同研究として「元禄『堺大絵図』に示された堺の都市構造に関する総合的研究」，「高松宮家伝来書籍等を中心とする漢籍読書の歴史とその本文に関する研究」，「柳田國男収集考古資料の研究」の３本が継続して進められた。

【開発型共同研究】　「縄文時代の人と植物の関係史」「人の移動とその動態に関する民俗学的研究」の２本が継続して進められた。

【人間文化研究機構関連共同研究】　本年度は「大規模災害と広域博物館連携に関する総合的研究」，および「国際シンポジウム ICOM-CECA アジア太平洋地区研究集会　博物館教育の可能性」の２つが開始された。

前者は，災害時における他機関との連携の在り方をさぐる研究であり，後者はICOM（国際博物館会議）の国際委員会の一つであるCECA（教育と文化活動委員会）のアジア太平洋地区で初めて開催された研究集会をICOM-CECAなどと共に主催した。

なお経費の運用においては，選択と集中の観点から共同研究と連動した科研費の採択分を有効活用して，新たに基幹研究および公募型共同研究の重点化などに充当し，効率的運用に努めた。

共同研究担当　柴崎　茂光・樋口　雄彦

平成24年度　国立歴史民俗博物館共同研究計画一覧

研究種別	研究課題	年度					
		22	23	24	25	26	27
基幹研究	（1）民俗表象の形成に関する総合的研究（歴博・民俗研究系　教授　小池淳一　他）						
	A【広領域歴史創成研究】歴史表象の形成と消費文化（歴博・歴史研究系　准教授　岩淵令治　他18名）	■	■	■			
	（2）古代列島世界の歴史像の再構築（歴博・考古研究系　准教授　林部 均　他）						
	A【広領域歴史創成研究】先史時代における社会複雑化・地域多様化の研究（歴博・考古研究系　准教授　山田　康弘　他18名）			■	■	■	
	B【広領域歴史創成研究】東アジアにおける倭世界の実態（歴博・考古研究系　准教授　上野　祥史　他16名）			■	■	■	
	C【広領域歴史創成研究】古代地域社会の実像（歴博・考古研究系　准教授　林部　均　他19名）			■	■	■	
	（3）震災と博物館活動・歴史叙述に関する総合的研究（歴博・歴史研究系　教授　久留島　浩　他）						
	A【広領域歴史創成研究】戦時/災害と生活世界の関わりに関する総合的研究（歴博・歴史研究系　准教授　原山　浩介　他33名）			■	■	■	■
	B【多元的フィールド解析研究】東日本大震災被災地域における生活文化研究の復興と博物館型研究統合（歴博・民俗研究系　准教授　川村　清志　他15名）			■	■	■	■
	C【歴史資源開発研究】災害の記録と記憶をめぐる資料論的研究（歴博・歴史研究系　教授　樋口　雄彦　他９名）			■	■	■	
基盤研究	◇広領域歴史創成研究						
	（1）日韓における青銅原料の産地の変遷に関する研究（歴博・情報資料研究系　教授　齋藤　努　他４名）			■	■	■	
	◇多元的フィールド解析研究						
	（1）日本の中山間地域における人と自然の文化誌（千葉県立中央博物館　生態・環境研究部長　原　正利　他17名）（館内担当　西谷教授）		■	■	■		
	◇歴史資源開発研究						
	（1）江戸から明治初期にかけての絵画材料および製作・流通に関する調査研究（歴博・情報資料研究系　准教授　小瀬戸恵美　他12名）	■	■	■			
	（2）高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する研究―『死・葬送・墓制資料集成』の分析と追跡を中心に―（歴博・民俗研究系　教授　関沢　まゆみ　他11名）	■	■	■			
	（3）東アジアの宗教をめぐる交流と変容（歴博・民俗研究系　教授　松尾　恒一　他19名）			■	■	■	
	◇先端博物館構築研究						
	（1）デジタル化された歴史研究情報の高度利用に関する研究（歴博・情報資料研究系　准教授　鈴木　卓治　他11名）	■	■	■			
	（2）民俗研究映像の制作と研究資源化に関する研究（歴博・民俗研究系　准教授　内田順子　他15名）	■	■	■			
	（3）古代における文字文化形成過程の総合的研究（歴博・歴史研究系　准教授　小倉慈司　他22名）	■	■	■			

	（４）民俗儀礼の変容に関する資料論的研究（歴博・民俗研究系　准教授　山田慎也　他21名）							
	◇展示型共同研究							
	（１）中世の技術と職人に関する総合的研究（歴博・考古研究系　准教授　村木二郎　他17名）							
	◇公募型共同研究							
	（１）元禄『堺大絵図』に示された堺の都市構造に関する総合的研究（神戸大学大学院人文学研究科　教授　藤田　裕嗣　他９名）（館内担当　玉井教授）							
	（２）高松宮家伝来書籍等を中心とする漢籍読書の歴史とその本文に関する研究（九州大学大学院人文科学研究院　准教授　靜永　健　他11名）（館内担当　井原教授）							
	（３）柳田國男収集考古資料の研究（東京大学大学院人文社会系研究科　教授　設楽博己　他７名）（館内担当　工藤助教）							
共同研究　開発型	◇縄文時代の人と植物の関係史（本館・考古研究系　助教　工藤雄一郎　他16名）							
	◇人の移動とその動態に関する民俗学的研究（本館・民俗研究系　助教　松田睦彦　他15名）							
機構関連共同研究	（１）連携研究〈大型〉「人間文化資源」の総合的研究	Ａ　正倉院文書の高度情報化研究（歴博・歴史研究系　教授　仁藤敦史　他14名）						
		Ｂ　近現代の生活と産業変化に関する資料論的研究（歴博・民俗研究系　准教授　青木隆浩　他11名）						
		Ｃ　歴史研究資料としての映画の保存と活用に関する基盤的研究（歴博・民俗研究系　准教授　内田順子　他７名）						
	（２）連携研究〈小型〉活動提案	◇カテゴリーⅠ　中近世の都市を描く絵画と地誌に関する研究―京都と江戸―（歴博・歴史研究系　教授　小島道裕　他６名）						
		◇カテゴリーⅢ　大規模災害と広域博物館連携に関する総合的研究（歴博・民俗研究系　教授　小池淳一　他16名）						
		◇カテゴリーⅣ　ICOM-CECAアジア太平洋地区研究集会　博物館教育の可能性（歴博・歴史研究系　教授　小島道裕　他３名）						
	（３）日本関連在外資料調査研究	Ａ　シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究（代表：歴博・歴史研究系　教授　久留島浩）						
		Ｂ　近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究（代表：日文研・教授　鈴木貞美）（歴博・歴史研究系　准教授　原山浩介）						

［基幹研究］

（１）「民俗表象の形成に関する総合的研究」

（総括研究代表者　小池　淳一）

１．目　的

本共同研究は，新たな民俗展示の構築を目指して構想された。成果は，当館第４展示室（民俗展示）新構築とそれに関連したフォーラムに反映される。

近代以降，「歴史」や「文化」は，地域開発や農山漁村の生活，新商品の創出などの過程で，さまざまなネットワークを通して価値が再発見されてきた。本研究では，こうした価値の再発見と，それによって生み出されるものを「民俗表象」ととらえ，例えば国家や地域社会，企業，研究者，大衆，個人，国際社会などが，いかに関わり合いながらそれらを作り出しているのか明らかにすることを目的とする。

特に「流行の創出」の過程に，歴史学・民俗学・美術史学などがどのように関わってきたのか，また，近代社会のさまざまなネットワークから生み出された「流行」が，どのように地域社会に展開していくのか明らかにしていくことが主たる対象である。これまで行われてきた共同研究とともに博物館機能を生かした研

究成果の発信として，特に第４展示室（民俗）の展示の完成，維持さらには改善に，ここで得られた知見を活用していく。

Ａ「歴史表象の形成と消費文化」2010～2012年度
（研究代表者　岩淵　令治）

１．目　的

近代以降における大衆向け商品の開発には，流行の創出が不可欠であるが，その中で伝統的なものに新たな価値を見いだし，過去の素材を利用する手法がある。その過程では，しばしば歴史学や民俗学，美術史学などの研究成果が取り込まれてきた。

例えば，「江戸」の表象は，近代化論における積極的な江戸時代の評価（「江戸時代の遺産」），バブル期の江戸東京学ブームから，近年の「江戸しぐさ」，江戸検定や日本橋地域などの都心部再開発における資源として様々に利用されている。また，博覧会や物産展は各地の名産品を生み出す場となっているが，それは歴史や民俗の理想型を示すことにもつながっている。あるいは，入学式と節句を典型として，家族の必需品と考えられているものが，実は企業によるマーケティング活動から生み出された新しい「伝統」であることが少なくない。そこで，本共同研究では，近代以降の商品開発にかかる伝統の創出と礼賛を，とくに学問との関わりから分析する。

研究対象としては，まず江戸の表象をとりあげる。「発見」される「伝統」の多くは，「基層文化」としての原始・古代と，「都市文化」としての「江戸」であろう。とくに「江戸」は，明るい庶民とその文化の誕生（鎖国→いわば第二の「国風文化」）の表象として頻繁にとりあげられてきた。しかし，こうした研究は，近代化論における江戸時代賛美（『江戸時代と近代化』）への批判が若干みられるものの，本格的に取り組まれてはいない。したがって，その一つ一つを時代背景と合わせて丹念にみていくことが不可欠である。そこで，「江戸」表象の原点として，大正期の「江戸趣味」の誕生とその大衆化に着目し，三越百貨店における「流行」の発明の過程とその方法を検討する。三越は，日清・日露戦後に「元禄模様」の流行を生み出し，さらに「伝統」的な要素もとりいれながら子供の「玩具」を商品化する。これを支えたのが，三越が「学俗共同」とうたう研究者・文学者・ジャーナリスト等からなる「流行研究会」の活動であった。そこで，都市史・美術史・経済史・民俗学・人類学・音楽史等から，当時の学問状況にてらしながら流行研究会の活動を多角的に検討することにより，①三越の商品化の過程でどのような「江戸」が発見されたのか，②そこに学問がどのようにかかわったのか，という点を明らかにする。

さらに，このような伝統を模した大衆文化の受容と展開が地方にもたらした影響について，産業史や家族史との関わりから検討する。例えば，名産品の創出は消費文化を変化させ，そのために産地間の競争関係をも変えてきた。また，年中行事や人生儀礼は，ある特定の階層や地域に限られていたものが商品化によって全国に展開し，「伝統」として各家庭に浸透していった。その背景としては，全国的に画一化された理想的な家族像が創出されてきたことがある。これらのような消費文化や儀礼文化，家族生活と商品化との関わりについては，日常にあふれていることであるが，これまであまり研究の対象になってこなかった。そこで，大衆文化の受容と展開については，地方での現地調査をもとに，現代を含めた実態の解明に取り組む。

２．今年度の研究目的

①基礎資料の調査・共有化

地方資産家の三越の商品の受容について，前年度に引き続き須坂市田中本家博物館を調査対象とし，さらに関連する周辺地域（須坂市・長野市）についても調査，写真撮影による資料収集を行う。さらに，これらの目録データを研究員に配布し，共用化する。

②相互の問題関心の共有化

研究発表・質疑を通じ，共同研究者の問題意識を共有し，研究報告の原稿作成準備をすすめる。

③現時点での研究成果の公表

印刷物，口頭報告によって，現時点での研究成果を公表する。

３．今年度の研究経過

計４回の研究会，および３回の資料調査を行った。また，総合誌『歴博』173号の特集号「歴史表象の形成と消費文化」，および第85回歴博フォーラム「「江戸」の発見と商品化―大正期の三越の流行創出と受容」において現時点での成果報告を行った。このほか，百貨店のPR紙やパンフレット，および明治・大正期の百貨店関係や化粧品関係の資料を収集した。

【研究会】

以下の研究会を実施し，一般に現時点での成果を公開し，また研究報告原稿執筆に向けて，議論を行った。

第９回研究会　2012年６月24日（於国立歴史民俗博物館）

第85回歴博フォーラムの準備報告（岩淵令治・神野由紀・満薗勇・瀬崎圭二・玉蟲敏子）

谷川章雄「坪井正五郎と明治時代の考古学」

鈴木希帆（東京国立博物館アソシエイトフェロー　ゲストスピーカー）「集古会周辺における縄文受容」

第10回研究会　2012年８月29日～31日（於小布施・須坂・長野）

８月29日　小布施にて高井鴻山記念館等見学

８月30日　須坂の旧市街（ふれあい館まゆぐら＜明治期の製糸業関連の建物＞・大壁造りの町並・笠鉾会館・芝宮・旧越家住宅＜山丸一番館＞ほか）を見学後，午後より半公開で以下の研究会を実施した（於旧上髙井郡役所）。

岩淵令治「共同研究の主旨と調査の経緯」

岩淵令治「田中本家と江戸」

神野由紀「田中本家博物館の子ども用品に見る近代初期の消費文化」

満薗勇　「大正期における田中本家の消費生活と通信販売」

８月31日　長野市善光寺近辺の関連地域（田中本家の呉服等購入先）を見学

第11回研究会　2012年９月15日

第85回歴博フォーラムの最終打合せ，および終了後，意見交換。

第12回研究会　2013年３月21日・22日

３月21日　リニューアル・オープン後の第四展示室の見学

研究報告執筆原稿の概要報告１（参加者全員）

３月22日　研究報告執筆原稿の概要報告２（参加者全員）

以上の研究発表・質疑を通じ，共同研究者の問題意識を共有した。

【調査】

2012年６月２日・３日　田中本家博物館・須坂市史編さん室・須坂市立博物館・須坂市立図書館・長野県立図書館において文書調査

2013年１月26日　田中本家博物館で江戸時代と昭和の雛人形の調査

2013年３月25日　三越資料室で資料調査

このほか，10月～１月に各自が論文執筆のため，東京都内・種子島・愛媛・福岡等で調査を実施した。

【第85回歴博フォーラム】　2012年９月15日

「「江戸」の発見と商品化―大正期の三越の流行創出と受容」（於歴博）

神野由紀「消費社会黎明期における百貨店の役割―三越の商品開発と流行の近代化―」

満薗勇　「三越による通信販売と地方資産家の流行受容」

藤岡里圭「大正期における百貨店の量的および質的発展」（コメント１）

瀬崎圭二「三越の流行創出と近代文学」

玉蟲敏子「三越における光琳戦略の意味―美術史の文脈から―」

濱田琢司「百貨店における展覧活動と啓蒙活動―民芸運動を中心に―」（コメント２）

４．今年度の研究成果

①基礎資料の調査・共有化

地域有力者の三越の商品の受容について，前年度にひきつづき，長野県須坂市田中本家博物館を調査し，関係する文書史料，ほか継続中の雛人形の調査を実施した。また，関連して須坂市・長野市・三越の資料調査を実施した。そして，これらのデータを研究員に配布し，共有化した。

研究報告の原稿執筆にあたり，重要な素材を収集，共有することができた。

②相互の問題関心の共有化

第９回研究会では，三越の流行研究会に大きな役割を果たし，また学史上では評価の低い考古学者坪井正五郎について谷川章雄氏が再検討を行い，さらにゲストスピーカーの鈴木希帆氏が，坪井もかかわった集古会とその周辺におけるデザインとしての縄文の受容（縄文図案）について報告し，明治・大正期における考古学の展開と流行との関係を明らかにした。

第10回研究会では，三越の流行発信の受用先として調査を進めていた須坂とその周辺で実施し，関係地域を踏査してイメージを豊富化するとともに，現地の研究者とも議論を深め，明治・大正期の当該地域の経済構造や消費の状況について理解を深めた。

さらに，最終回の第12回研究会においては，リニューアル・オープン後の第四展示室を見学し，展示についての内容の確認と議論を行った。また，参加者全員で研究報告執筆原稿の概要報告を行い，相互の内容についての理解を深めた。

③成果の公表

上記の報告・議論に基づき，本年度は現段階での研究成果を以下の形で公表した。

第一に，総合誌『歴博』173号において，「歴史表象の形成と消費文化」の特集を組み，岩淵令治「歴史表象の形成と消費文化」で共同研究の概要を述べたのち，第四展示室リニューアルの成果還元の紹介として青

木隆浩「現代家族の変容と消費文化」と山田慎也「コラム 鏡餅の行方」，流行発信と地域の関係について満薗勇「三越の通信販売と社会」，伝統をまとった民芸という新たな生産が産地に与えた影響について濱田琢司「民芸運動と産地―佐久間藤太郎と益子―」，百貨店側の流行発信について藤岡里圭「コラム　百貨店の流行発信」を掲載し，研究成果の一端を広く一般に周知した。

第二に，第10回研究会を調査地の須坂市で実施し，研究成果を現地において公表し，調査地の史料所蔵者・研究者・文化財担当者等と交流した。

第三に，第９回研究会をへて，第85回歴博フォーラム「「江戸」の発見と商品化―大正期の三越の流行創出と受容」を実施した。成果の概要をひろく一般に公表することを果たすとともに，三越伊勢丹ホールディングスの所蔵資料への関心を喚起し，三越資料室との交流をあらためて深めるきっかけとなった。また，併せて第11回研究会においてはフォーラムの内容について意見交換を行うことができた。

第四に，2013年３月リニューアル・オープンの第四展示室において，「『民俗』へのまなざし」の小テーマ「行事食の変化」および中テーマ「現代の家族像」，「くらしと技」の中テーマ「近代化の中の職人」のコーナーに成果の一部を反映することができた。

５．全期間の研究成果

本研究では，近代以降における大衆向け商品の開発の中で，伝統的なものに新たな価値を見いだし，過去の素材を利用する手法に注目した。そして，研究対象として，①大正期の三越百貨店における「流行」創出に注目し，「伝統」をもとりこんだ子ども用品，「江戸趣味」について，その発明と大衆化の過程・方法を検討した。また，②こうした三越百貨店の「流行」の発信のみならず，その受容と展開について，地方資産家の消費構造や儀礼における展開を検討した。③さらに，大正期の三越百貨店の商品開発にとどまらず，こうした伝統を模して開発された商品が大衆文化として受容・展開していく様相を，生産地の変容，儀礼における展開など，産業史や家族史との関わりから現代も含めて検討した。

まず①については，独自のブランド化・セット販売・消費イベントの利用といった三越の販売戦略の検討のほか，個人や集団と三越の商品開発とのかかわりについて，旧幕臣（戸川残花），文学者（塚原渋柿園），黎明期の考古学者（坪井正五郎），こども用品の開発へかかわった江戸期の文人的なサークル（大供会），西欧人の評価および日本「美術」成立と三越の光琳戦略等について，その人物や集団の評価とあわせて検討した。また，その背景として，「趣味の欠如感」を抱く地方流入者による「伝統」や「よき趣味」の受容，旧町奉行与力・同心の幕臣の歴史の発見，縄文のデザイン化や，稀書複製会の活動による近世文学の発見，近代・現代家族像の創出（「家族団らん」）があったことが，共同研究員やゲストスピーカーの報告によって明らかとなった。さまざまな専門分野のメンバーによって，三越の商品開発と社会の関係をより詳細に明らかにすることができたといえよう。さらに，地域における伝統の商品化の展開については，金沢における友禅の展開についても検討した。また今後，三越の開発した商品として万年筆を，売場の演出として重要な音楽隊の結成・解散とパイプオルガンの導入なども検討する予定である。

②については，地方資産家である長野県須坂市の田中本家を検討し，地元の須坂市／長野市／東京（とくに三越）と，用途に応じて衣服の購入先を変えていたこと，主に通信販売による東京の百貨店からの購入では，百貨店側に購入品の選択をある程度任せる形態（代理選択）がとられ，また一方で商品の納品にともなってトラブルが発生していたことが明らかとなった。また，雛人形を素材に，百貨店からの購入状況や使わ

れ方の一端もうかがい知ることができた。地方における百貨店の商品の受容については，とくに従来未検討な点であり，地方資産家である長野県須坂市の田中本家に焦点をあてることによって，具体的な状況を明らかにすることができたといえよう。

③では，まず産業史とのかかわりから，生産地の変容について民陶をとりあげた。特定の作家や評論家が，工芸に対する民芸という新たなジャンルを創出して，手作りをもとに産地らしさ，伝統らしさを形成し，陶業の産地である益子においては職人の「個人化」と個人作家の流入という変容がもたらされたことを明らかにした。

また，家族史とのかかわりについては，ａ百貨店の子ども用品開発による儀礼の普及，ｂおせちの商品化と変容などを検討した。ａでは，百貨店が各地の郷土玩具を参考にしながら子どもらしさを創出して子ども用品をセット販売することで，一般には伝統的と思われる節句（雛人形）や七五三の普及に強く関わったことを明らかにした。ｂでは，近代の西洋料理の受容によって日本料理というジャンルが現れ，プロの技術が家庭料理だったおせちに導入されてメニューが豪華となったことで，家庭で作る負担を軽減するために新たな品目が既製品として販売されて重箱に詰められるようになり，さらに百貨店が重箱詰のおせちのセットを販売する，といった商品化の進展により，伝統的と思われているおせちが家庭の中で大きく変化してきたことを明らかにした。明治末期から大正期にかけて，デパートが提示したあらたな生活様式が，当時形成されつつあった新中間層の生活に取り入れられ，さらに戦後の家族の生活モデルとしても大衆化していったといえよう。

こうした成果をもとにして，2013年３月にリニューアル・オープンした第四展示室（民俗）の常設展示において，「壺屋焼」と「益子焼」にみる伝統を模した新たな商品（民芸）の出現による産地の変容（「近代化の中の職人」），正月のおせち料理や鏡餅の商品化に伴う変容（「行事食の変化」），商業主義や情報化の家族生活への浸透にともなって身体にかかわる商品が性別・年齢別・機能別に細分化をとげ，一方で人々の衛生観や美意識を大きく変えてきたこと（「現代の家族像」），を提示した。展示の作成にあたっては，現代展示における表象，とくに過去の賛美という問題について，団地展示や昭和ノスタルジー展示についての検討も行った。

以上の成果の一部は，最終年度に上記の研究展示のほか，総合誌『歴博』173号特集，第85回歴博フォーラムにおいて，広く一般に公表してきた。また，研究対象地である須坂市，金沢市，益子町において研究会を開催し，地域に成果を還元するとともに，地域の研究者と交流できたことも大きな財産である。最終的な研究成果については，本館研究報告の特集号において公表する予定である。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

青木　俊也　松戸市立博物館	神野　由紀　関東学院大学人間環境学部
瀬崎　圭二　広島大学大学院文学研究科	田中　和仁　田中本家博物館
玉蟲　敏子　武蔵野美術大学造形学部	谷川　章雄　早稲田大学人間科学学術院
長沢　利明　東京理科大学	濱田　琢司　南山大学人文学部
藤岡　里圭　関西大学商学部	丸山　伸彦　武蔵大学人文学部
満薗　　勇　日本学術振興会	
青木　隆浩　本館研究部・准教授	◎岩淵　令治　本館研究部・准教授
内田　順子　本館研究部・准教授	久留島　浩　本館研究部・教授

小池　淳一　本館研究部・教授　　常光　　徹　本館研究部・教授
原山　浩介　本館研究部・准教授　　○山田　慎也　本館研究部・准教授
〔リサーチ・アシスタント〕
横山考之輔　立正大学大学院生
〔ゲストスピーカー〕(2012年度)
鈴木　希帆　東京国立博物館・アソシエイトフェロー

（２）「古代列島世界の歴史像の再構築」2012～2014年度
（総括研究代表者　林部　均）

１．目　的

本研究では，近年の最新の研究成果をもとに，多角的な観点から古代列島世界像の構築をおこなうことを目的とする。

本研究は，大まかには時代枠にもとづく３ブランチで構成されるものの，「社会構造」「対外交渉」「地域社会」の三つの研究項目を各ブランチを貫く共通テーマとして設定する。本研究では上記テーマに関連する様々な事象について，広く列島世界を対象として，時代を越える観点を含めつつ体系化・総合化し，新しい古代史像を構築することを目指したい。

Ａ班は，縄文時代（先史時代）を中心に地域多様化と社会複雑化のプロセスに焦点をあて，社会構造と地域性に重点をおいた新たな歴史像の構築をめざす。

Ｂ班は古墳時代を中心として「東アジア諸地域」「王権」「地域社会」の相互関係を王権と地域社会という視点から整理し，対外交渉の視点も加味して「倭世界」の実態を明らかにする。

Ｃ班は飛鳥時代以降の古代を中心として，地域社会がもつ多様性と画一性を多角的・総合的に把握することにより，その実態を明らかにし，地域の視点からみた古代史像を創出したい。

本研究の３ブランチは，いずれも総合展示１室「原始・古代」のリニューアルに向けて，その学術的な根拠とすべく実施されるもので，その成果は総合展示に反映される。本館の理念である「博物館型研究統合」の実践例として位置づけられる。

２．研究成果

Ａ班は，先史時代の「集落」が時期ごとにどのような変遷し，生業形態（環境史・自然資源利用技術）との関わりの中で，その景観・空間利用のあり方がどのように変わっていくのかをトレースし，その展開が地域ごとにどのように多様化していったのか把握した。

Ｂ班は，王権の視点からの倭世界を検討することを中心に研究を進めた。王権が，いかに地域社会の包摂や序列化を進めたのかを整理し，倭王権の実態を評価した。次に，比較の視点から，倭王権の相対化を目指し，理念と実態が交錯した倭王権の本質を検討するとともに，倭王権と朝鮮半島の諸王権とを比較し，東アジアにおける倭王権の位置づけを検討した。

Ｃ班は，４回の研究会をおこない，古代列島の地域社会，とくに今年度は「九州」「東北地方太平洋側」「日本海北部」という地域を取りあげ，それぞれの地域のもつ特徴を把握するとともに，地域の中にある多様性

を抽出した。また，それぞれの地域間での比較をおこない，より地域のもつ特徴を鮮明に抽出した。

Ａ・Ｂ・Ｃ班で合同して共通のテーマを設定して研究会の開催を計画していたが，今年度は共同研究がはじまったばかりということで，開催を見送った。

Ａ「先史時代における社会複雑化・地域多様化の研究」2012～2014年度
（研究代表者　山田　康弘）

１．目　的

日本列島における昨今の先史時代研究を概観してみると，そこで語られる時代像（特に縄文時代像）は，研究者間で大きく異なっている。このような状況は，従来私たちが縄文時代・縄文文化と一括してきた枠組みとその内容に対して，時期性・多様性・地域性という観点から再検討を要請していると言ってよいだろう。

地域多様化および社会複雑化という視座は，現在の縄文時代研究，ひいては人類史的な先史時代研究には欠くことのできないものはずであるが，社会構造や地域性に関する既存の研究において，両者が列島規模（この領域設定方法に一国史的歴史観が内在されているとしても）で総合的に検討されたことはほとんどない。今回の共同研究においては，まずこのような大規模な議論の場を形成することを最初の目的とし，各研究分担者が多様な見解を出し合い議論を交えながら，意見の統合が可能かどうか，可能であればどのような形で意見を調整・統合し，時代像を再構築できるか見極め，その結果を展示に結びつけることを目的とする。

２．今年度の研究計画

今年度の本研究における第一の課題は，各地における先史時代の「集落」が時期ごとにどのような変遷をし，生業形態（環境史・自然資源利用技術）との関わりの中で，その景観・空間利用のあり方がどのように変わっていくのかをトレースし，その展開が地域ごとにどのように多様化していったのか把握することである。そのために，各地域において時期ごとの集落景観，利用範囲，種々の設備など各地における集落の実態を明らかにし，集落の地域性およびそこから推察される社会構造について検討を行う。

３．今年度の研究経過

第１回共同研究会

2012年５月19日（土）～５月20日（日）　国立歴史民俗博物館　第２研修室

山田康弘「趣旨説明」

山田康弘「話題提供：愛知県保美貝塚の発掘調査」

長田友也「東海地方における縄文晩期社会」

山田康弘「第１展示室リニューアルにむけての説明」

その後展示見学・討論会

第２回共同研究会

2012年10月27日（土）～10月28日（日）　国立歴史民俗博物館第２会議室

工藤雄一郎　「縄文時代はいつからか（仮題）」

福田正宏　　「縄文文化の境界―北海道・サハリン・沿海州の比較から（仮題）」

菅野智則　　「東北地方の縄文集落（仮題)」
山田康弘　　「中国地方の縄文集落」(机上発表)
山田康弘　　「第１展示室（縄文）の展示構想について)」

第３回共同研究会

2013年１月26日（土）～28日（月）　沖縄県立博物館・美術館　会議室
山田康弘「本共同研究の概要と意義」
山田康弘「本共同研究における研究方針の一部変更とその理由」
山崎真治「中琉球・南琉球の先土器―土器出現期について」
伊藤慎二「沖縄諸島における縄文土器の様相（仮)」
総合討議「縄文文化の枠組みについて」
その後　遺跡踏査・資料実見

４．今年度の研究成果

今年度は縄文時代・文化の範囲および各地における集落の様相を把握することを目的とした。

工藤の発表により，縄文時代の時間幅を，福田・伊藤の発表により縄文文化の範囲について有益な検討を行うことができた。また，各地の集落の様相についても，長田・菅野・山崎・山田の発表によって，ある程度明確にすることができた。

５．研究組織（氏名　所属　役割分担／◎は研究代表者，○は研究副代表者）

設楽　博己	東京大学大学院人文社会系研究科・教授	関東・中部地方の社会
高橋龍三郎	早稲田大学文学学術院・教授	社会階層化の研究
阿部　芳郎	明治大学大学院文学研究科・教授	関東地方の社会
瀬口　眞司	（財）滋賀県文化財保護協会・主任	近畿地方の社会
佐々木由香	（株）パレオ・ラボ・統括部長	植生・環境史からみた社会
高瀬　克範	北海道大学大学院文学研究科・准教授	北海道の社会
松村　博文	札幌医科大学医学部・准教授	縄文人の起源
近藤　　修	東京大学大学院理学系研究科・准教授	縄文人の形質差
米田　　穣	東京大学総合研究博物館・教授	縄文人の食性分析
舟橋　京子	九州大学総合研究博物館・助教	抜歯等からみた社会
長田　友也	南山大学人文学部・非常勤講師	東海地方の社会
冨井　　眞	京都大学文化財総合研究センター・助教	中国地方の社会
小畑　弘己	熊本大学文学部・教授	九州・韓半島の社会
福田　正宏	東京大学大学院創成科学研究科・准教授	北海道・沿海州の社会
菅野　智則	東北大学埋蔵文化財センター・専門職員	東北地方の社会
西本　豊弘	本館研究部・教授	動物遺存体からみた社会
○工藤雄一郎	本館研究部・助教	環境史的観点からみた社会
◎山田　康弘	本館研究部・准教授	全体統括・墓制からみた社会

B「東アジアにおける倭世界の実態」2012～2014年度
（研究代表者　上野　祥史）

１．目　的

倭という表現は，漢書地理志を初出として，宋書や隋書などの中国史書や，広開土王碑文などにみえており，日本列島に対する古代東アジア世界からの呼称である。東アジアが倭と呼ぶ日本列島の世界は，弥生時代中期後半から古墳時代終末期に相当する。それは，前方後円墳という存在が象徴するように，日本列島で広く共有した規範・価値観が確立した時代であり，国家形成の歩みを進める時代でもあった。

本課題では，倭世界を中央（王権）と地域（地域社会）の関係が規定する世界としてとらえ，日本列島的な視点と東アジア的な視点―内なる視点と外なる視点―を対照することによって，この倭世界の実態を評価することを目的とする。

求心性を志向した王権は，倭世界の周縁（九州等）や外部（朝鮮半島）との接触によって得た情報をもとに，絶えず新たな規範や価値観を創出し続けた。それは，王権が地域社会を序列化し包摂する動きに他ならない。本研究では，その規範や価値観を創出するプロセスや，如何にそれが序列化のシステムとして機能したのかに注目することによって，倭王権の実態を整理する。この実態と新羅や百済など朝鮮半島の諸王権との比較を通じて，東アジアの視点で倭王権の特質を相対化し，史書や金石文に記す王権の天下観との対照を通じて，理念と実態の交錯する倭王権の本質を相対化することが可能となる。

一方，地域社会にとっては，王権との関係は外部世界とのつながりの一つである。地域社会と朝鮮半島の各地や日本列島の他地域との関係を対照し比較することによって，王権の意図とは必ずしも重ならない地域社会の独自の動きがみえてくる。本研究では，渡来系集団を受け入れた地域等を対象として，東アジア諸地域や王権との関係に注目し，倭世界を構成する地域社会の動きを整理する。無意識に従属的な性格が強調されやすい王権との関係を，地域社会の対外交渉という視点から相対化することが可能である。それは，王権と地域社会との間に想定される「内なる境界」と，東アジア諸地域と王権・地域社会との間に想定される「外なる境界」を改めて問うことにもなる。

総じて言えば，「東アジア諸地域」「王権」「地域社会」という３つのカテゴリーの相互関係を，王権と地域社会という二つの視座で整理し，王権と地域社会の関係によって規定される倭世界の実態を明らかにするものである。倭世界を自明のものとしてとらえるのではなく，「対外交渉」という視点そのものを相対化することも目的である。本研究では，東アジア諸地域と王権・地域社会がもっとも密接に関係をもった5世紀を中心として検討を進めるものとする。

２．今年度の研究目的

本研究は，「王権」と「地域社会」という二つの視座から検討を進めるが，平成24年度は王権の視点からの倭世界を検討することを中心に研究を進める。

まず，規範・共通性を創出した王権が，如何に地域社会の包摂や序列化を進めたのかを整理する。国家形成論や威信財システム論や墳丘規格論などの視点から，求心性を志向した倭王権の実態を評価することを目指す。次に，比較の視点を通じて，倭王権を相対化することを目指す。比較の一つは，政治交渉や自己表象の場において明示する王権の天下観と倭王権の実態を対比することにより，理念と実態が交錯した倭王権の

本質を検討することである。もう一つは，求心性の志向や地域社会の包摂や序列化という視点で，倭王権と朝鮮半島の諸王権とを比較し，東アジアにおける倭王権の位置づけを検討することである。

３．今年度の研究経過

今年度は研究会を４回開催した。そのうちの１回は岡山県で開催し，吉備地域での遺跡・遺物検討を研究会とあわせて遂行した。

【第１回研究会】　　於歴博　　2012年５月12日・13日

・共同研究趣旨説明

・研究分担の確認と３年間の研究推進にかかる討議

・第１展示室の見学と今日的視点での検討

【第２回研究会】　　於歴博　　2012年９月22日・23日

広瀬和雄　　「倭王権の特質」

坂　靖　　「遺跡構造からみたヤマト王権―近畿地方の大型古墳群と築造基盤―」

橋本達也　　「古墳時代の南の境界領域」

【第３回研究会】　　於岡山大学　2012年10月27日・28日

西田和浩　　「千足古墳の築造と造山古墳群」

高田貫太　　「渡来系要素の受容と瀬戸内地域の展開」

高久健二　　「朝鮮半島における墳墓の構造と埋葬行為」

※吉備地域の古墳群及び出土資料の検討をあわせておこなった。

古墳群調査：造山古墳・小造山古墳・千足古墳・天狗山古墳・勝負砂古墳・箭田大塚・二万大塚作山古墳・楯築弥生墓

出土遺物検討：天狗山古墳出土資料等

【第４回研究会】　　於歴博　　2013年３月９日・10日

新納　泉　　「６世紀前半の地域社会を考える」

下垣仁志　　「古墳時代の国家形成―倭王権の構造と特質Ⅰ―」

井上直樹　　「東アジア世界と高句麗・百済の支配体制」

４．今年度の研究成果

第１回研究会では，共同研究の主旨を説明し，総合展示第１室リニューアル計画の説明を行った。そして，各自がこれまでに進めてきた研究を紹介し，「王権」「地域社会」「東アジア（領域・境界)」という検討視点とのかかわりや，分担課題について意見を交え，今後の計画について議論した。以後，３年間の研究推進にあたって，前半と後半に大きく二分し，2013年度前期までは，論点の整理と問題認識の共有をめざし，各研究会では「王権」「地域社会」「東アジア（領域・境界)」の各視点からの検討を交えた研究会をおこなうことにした。

第２回研究会では，広瀬和雄が王権という視点で，坂靖が地域社会という視点で，橋本達也が領域・境界という視点から報告をおこなった。広瀬報告では，古墳という葬制システムを共有する古墳時代社会の特質を，同質性と差異化という視点で整理し，新羅など朝鮮半島の東アジア諸地域との比較を試みた。坂報告で

は，古墳に論点が集約される古墳時代社会の研究を相対化すべく，集落と古墳を対置させ，古墳群の築造を地域社会経営の視点で捉えなおし，大和盆地に大古墳群が造営される背景，社会動態を推察した。橋本報告では，古墳築造地域の南限にあたる日向・大隅地域における古墳築造に注目し，土器様式や埋葬施設の視点を交えて，南九州各地及び南島世界との比較をおこない，前方後円墳を築造する世界の周縁域における各地域社会の動きを整理した。周縁領域において前方後円墳が出現する背景を，物資・情報の流通と重ねた整合的理解を提示した。

第３回研究会では，吉備地域での遺跡・遺物検討をあわせておこない，吉備あるいは瀬戸内海沿岸地域という個別事例（地域社会）を意識した議論を展開した。古墳群調査では，古墳中期を中心に地域社会動きに注目した。造山古墳を中心とする古墳群のあり方や，窯業や製鉄の生産遺跡や渡来系集落などを複合的にとらえ，地域社会の景観を立体視しようと努めた。

この視点や論議を深める方向で研究会を開催した。近年千足古墳を調査した西田和浩をゲストスピーカーに迎え，千足古墳の最新情報の提示やそれに基づく，埋葬施設の系譜や被葬者像などについて報告を受け，吉備地域を主導する集団の構成やその交流の実態について整理した。高田貫太は，こうした瀬戸内海地域の動きを，王権の視点や新羅・百済といった倭の外の視点を対照して評価し，地域社会の動きは王権の規範のみに律されないことをより鮮明に提示した。そして，高久健二は，墳墓の築造過程が儀礼の一環であることに注目し，新羅王陵を対象としてその実態について検討を試みた。この時期に東アジアの各地には厚葬墓が存在するが，形態論としての墳墓の比較ではなく，埋葬という儀礼＝行為を比較するという視座の有効性を主張した。

第４回研究会では，下垣仁志が王権という視点で，新納泉が地域社会という視点で，井上直樹が東アジアという視点から報告をおこなった。下垣は，倭王権の特質を探求する上で，国家あるいは王権そのものが学史の上において，如何に認識され，その議論が相互にいかなる関係にあるのかを丁寧に整理した。新納は，６世紀の地域社会の変動を注目しつつ，世界規模で生じた気候・環境変動を以て理解できる可能性を提示した。政治構造論の視点で王権と地域社会の関係とその変容を検討するだけでなく，気候・環境変動とそれに伴う人間社会の変質を世界的視点で比較することの重要性を提示したものといえよう。井上は，５世紀の東アジアの国際環境を，中国王朝による評価―官爵―の視点から比較研究を提示した。とくに，百済に対する中国王朝の官職や爵位の授与を取り上げ。近年の論点を整理するとともに，百済社会の変容と重ねてその変化を解釈しようと試みた。

共同研究推進第１年目にあたり，明確な形での研究成果は蓄積していない。しかし，4回の研究会を通じて議論を重ねることにより，新たな論点が整理され，新たな古墳時代社会像を創出する予兆を共同研究員の多くが実感している。来年度以降も，論点の深化をめざして，共同研究を進めたいと考えている。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

井上　直樹　京都府立大学文学部　　◎上野　祥史　本館研究部・准教授
岸本　直文　大阪市立大学大学院文学研究科
下垣　仁志　立命館大学文学部　　杉井　　健　熊本大学文学部
高久　健二　専修大学文学部　　○高田　貫太　本館研究部・准教授
新納　　泉　岡山大学大学院社会文化科学研究科

仁藤　敦史　本館研究部・教授　　橋本　達也　鹿児島大学総合研究博物館
坂　　靖　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
広瀬　和雄　本館研究部・教授　　藤沢　　敦　東北大学埋蔵文化財調査室
松木　武彦　岡山大学大学院社会文化科学研究科
山本　孝文　日本大学文理学部　　吉井　秀夫　京都大学大学院文学研究科
若狭　　徹　高崎市教育委員会文化財保護課　　（50音順）

［ゲストスピーカー］
西田　和浩　岡山市教育委員会

C「古代地域社会の実像」2012～2014年度
（研究代表者　林部　均）

１．目　的

本研究では，これまでの中央からの視点が中心であった古代史像に対して，列島の地域社会に視点をおいて，最新の考古学・古代史，そして関連分野から多角的・総合的に分析を加えることにより，新しい古代史像を構築することを目的とする。

奈良時代はじめに成立した古代国家は，中国から律令制を継受し，中央集権体制を推し進め，列島の地域社会を画一的に支配しようとした。本研究では，これまでのこのような古代史像に対し，全面的に再検討を加え，新しい古代史像を提示する。

ところで，列島の地域社会は，畿内にあった中央集権的な国家の支配のもと，ほんとうに画一的な社会であったのであろうか。もちろん，当時の国家が列島各地域を画一的に支配しようと意図していたことはまちがいない。しかし，王権の所在地である都からの距離も大きく異なり，地形や気候条件といった自然環境も異なり，さらに王権への服属の過程も異なる列島の各地域が，画一的な社会であったとは，とうてい考えられない。本研究では，このような列島地域社会がもつ多様性を，多角的な視点から分析を加え，その特徴を具体的に抽出するとともに，その多様性が，いかに国家とのかかわりの中，形成されたのかを検討することにより，地域社会のもつ特徴を明らかにしたい。

また，本研究では，こういった列島地域社会のもつ多様な側面だけに着目するのではなく，列島の各地域を貫いてみられる画一的な特徴（たとえば官衙のかたちや文書行政などの支配システム）にも着目する。そして，このような画一的な特徴についても，列島の各地域によって，顕著にみられる地域もあれば，顕著ではない地域もみられる。地域社会にみられる画一的な特徴には，古代国家による地域支配が端的に反映されているとみるのが自然であるので，それが顕著な地域では国家よる地域支配がより強く貫徹されていたことを意味し，国家がその地域の支配をいかに重視していたのかを示す。本研究では，地域社会がもつ画一的な特徴についても，このような視角から具体的に分析を加え，地域社会の実態について明らかにしたい。

そして，このような地域社会がもつ画一性と多様性の両面を多角的，かつ総合的に把握することにより，地域社会の実態を明らかにし，これまでの古代史像を再検討し，地域からみた新しい古代史像を描き出したいと考える。

２．今年度の研究目的

共同研究の初年度は，当初，王宮・王都とその周辺を取りあげて，その特質を抽出することを計画していた。しかし，１回目の研究会での共同研究員の討論のなかで，「古代地域社会の実像」というテーマで共同研究を実施するならば，まずは列島の地域社会をできるだけ具体的に把握することが必要であるということになり，地域社会に視点をおいた共同研究を実施することにした。地域社会に視点をおいた共同研究は平成25・26年度に実施する予定であったので，その順序が入れ替わったことになる。

研究計画に変更が発生したが，共同研究の方向性そのものは，変更していないので，３年間全体としては，標記の課題で総括できるものと考える。

今年度は「九州」「東北地方太平洋側」「日本海北部」という３つの地域の視点をおいて，その特徴などを抽出することを目的とした。

３．今年度の研究経過

今年度は４回の研究会を開催した。

第１回研究会　５月19日（土）・20日（日）

研究報告　林部　均「共同研究『古代地域社会の実像』のめざすもの」

仁藤敦史「新しい歴史像の提示と総合展示リニューアルとのあいだ」

総合展示１室「律令国家」の展示検討

第２回研究会　８月11日（土）・12日（日）

共通テーマ「九州」

研究報告　坂上康俊「古代西海道の行政上の区分と地域の実相」

永山修一「古代の南九州と南島」

井上信正「大宰府発掘調査の動向」

柴田博子「九州地域における古代出土文字資料の様相」

亀田修一「豊前の渡来人」

第３回研究会　12月23日（日）・24日（月）

共通テーマ「東北地方太平洋側」

研究報告　吉野　武「近年の多賀城跡の調査」

八木光則「蝦夷社会の内的発展と国家の論理の相克」

今泉隆雄「古代南奥の地域的性格」

藤木　海「考古学からみた宇多郡・行方郡の地域社会」

第４回研究会　３月９日（土）・10日（日）

共通テーマ「日本海北部」

研究報告　坂井秀弥「古代越後・出羽の環境と地域社会の展開」

春日真実「考古資料からみた古代の越後」

相澤　央「古代越後国の鮭」

伊藤武士「近年の調査成果からみた古代城柵秋田城跡の史的位置づけ」

高橋　学「古代出羽北半の地域社会の様相―米代川流域を中心に―」

４．今年度の研究成果

共同研究の１年目ではあったが，列島地域社会の実像をできるだけ具体的に事例に即して分析を加えることができた。

今年度は，３つの地域しか取りあげることができなかったが，それぞれの特徴，その地域の中での多様な様相について，抽出する作業をおこなった。また律令国家がいかにその地域を支配しようとしていたのかも，あわせて検討した。また，総合展示１室のリニューアルを睨んで，具体的な資料の抽出作業などもおこなった。

「九州」は，古代においては西海道としてひとつのまとまった行政区分であるが，三前三後と呼ばれる北部九州と日向・薩摩・大隅と呼ばれる地域では，自然環境も含めて，かなり様相が異なることが明らかとなった。北部九州は，従来は外交の窓口として博多湾沿岸地域が重視されてきたが，有明海をとおした交流の存在も重視しなくてはならないことなどが検討すべき課題として提示された。また，南九州では，どうして律令国家が華夷思想のなかで，「南蛮」という呼称ではなく，「隼人」という特別な呼称が使われたのか，あらためて南九州が，南島への最前線として，律令国家が，きわめて重視していたことを確認した。最新の大宰府の発掘調査の調査が整理でき，政庁の変遷と周辺の条坊の施工などの問題が検討できた。さらに古墳時代から奈良時代にかけて豊前地域の渡来人の実態を遺構・遺物のうえから把握し，豊前地域の中での分布の違いなどを検討し，豊前という地域がもつ特徴を抽出することができた。

「東北地方太平洋側」では，主に古代の陸奥国，現在の福島県，宮城県，岩手県地域の古代における様相を検討した。東北地方の支配拠点である多賀城跡については，とくに平成24年に実施された政庁正殿の発掘調査を中心として，近年の多賀城跡の発掘調査を整理し，政庁や外郭線の変遷などについて分析した。多賀城政庁については，すでに1982年に『多賀城跡』が刊行され，その他の調査についても毎年刊行される『年報』があるが，その後の発掘調査での修正点をはじめとした様々な問題点を具体的に抽出した。この成果は，本館の総合展示１室「律令国家」の多賀城の復原模型に反映させる予定である。また，現在の福島県域，陸奥国の南半地域がどのような性格をもった地域であったのかを検討した。そして，南の板東諸国との連続性が強く，まさに律令国家が東北地方を支配していくための基盤となる地域であり，陸奥国の「内なる板東」であることを文献史学，考古学の両面から具体的に明らかにした。さらに，陸奥国の北辺部，岩手県の城柵官衙と集落などを取りあげることにより，蝦夷社会の成立，そして，それが律令国家の蝦夷支配をどのように受け入れたのかを志波城，徳丹城，胆沢城といった城柵官衙遺跡，そして，その周辺に展開する集落を分析することにより検討を加えた。そして，これまで，国家による支配の論理ばかりが強調されてきたが，蝦夷社会の中での自立的な発展，とくに北方交易などを中心とした内なる発展を重視する必要があることが明らかとなった。

「日本海北部」では，東北地方の太平洋側の特徴を検討した関係で，それとの比較という視点から，日本海北部地域，現在の秋田県，山形県，新潟県の様相を検討した。古代の越後，出羽地域の自然環境などを整理し，新潟を境にして，同じ日本海側でも北陸とは，かなり様相が異なることが指摘された。そして，出羽国が建国時は越後国から分国されるにもかかわらず，北陸道ではなく東山道に編入される意味を検討した。これは，もともと越後では人口が希薄で，関東地方から移民が大量におこなわれたことと深くかかわる。また，出羽国と陸奥国との相違，とくに集落などは陸奥国では７世紀から確認されるにもかかわらず，出羽国は８世紀，それも後半以降にならないと集落が確認できないことなどが明らかとなった。さらに，近年の秋

田城跡の発掘調査の成果を整理して，最北の城柵として，行政と軍事，外交・交流の重要な拠点であることを確認した。そして，対蝦夷・対北方交流と交易の拠点として，律令国家の「北の窓口」として位置づけた。

おおむね，地域の設定も妥当におこなうことができ，それぞれの地域の具体的な様相，少なくとも，今後，分析しなくてはならないポイントは抽出できたのではないかと考えるので，わずか３つの地域を取りあげただけであるが，事例に即した充実した報告と活発な議論がおこなわれ，今後への発展が期待できる成果をあげたと考える。

また，それぞれの地域の最新の発掘調査の成果などをまとめたので，どこまで研究が進んでいて，どこまで明らかとなっているのかが把握できた。

ただ，２年で，列島の各地域の様相をひととおり分析しようとしているので，網羅的な分析はとうていできず，かつ，問題点を深く掘り下げるという研究が，いまひとつ十分に進められないのではないかと危惧している。地域設定やテーマ設定にあたって，ポイントを絞ることの難しさを痛感した。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

今泉隆雄	東北歴史博物館館長
佐藤　信	東京大学大学院人文社会系研究科
吉川真司	京都大学大学院文学研究科
渡辺晃宏	独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所
亀田修一	岡山理科大学総合情報学部
坂井秀弥	奈良大学文学部
森　公章	東洋大学文学部
今津勝紀	岡山大学大学院社会文化科学研究科
川尻秋生	早稲田大学文学学術院
坂上康俊	九州大学大学院文学研究科
田中俊明	滋賀県立大学人間文化学部
高橋一樹	武蔵大学人文学部
平川　南	本館・館長
小倉慈司	本館研究部・准教授
高田貫太	本館研究部・准教授
村木二郎	本館研究部・准教授
○仁藤敦史	本館研究部・教授
◎林部　均	本館研究部・准教授

（３）「震災と博物館活動・歴史叙述に関する総合的研究」
（総括研究代表者　久留島　浩）

2011年３月11日の東日本大震災は，震災や戦争といった非常時に対するわたしたちの歴史理解にどのような変容を迫っているのか，歴史展示を含めた歴史叙述はそれに呼応していかにあるべきか，など歴史民俗系

博物館としてのありかた自体が問われている。文献の記録にとどまらない記憶や考古資料などの震災関係資料についての検討や，人びとの「生活」が被災・復興のなかでどのように「連続」するのかについての検討なども含め，総合的に研究する。

A「戦時／災害と生活世界の関わりに関する総合的研究」2012～2015年度
（研究代表者　原山　浩介）

１．目　的

本共同研究は，近現代史における歴史叙述のなかでも，とりわけ震災や戦争といった「異常時」が人びとにどのように経験されたのかをめぐり，歴史叙述を再構築することを目的としている。

歴史叙述は，展示であれ文字であれ，その受け手の有するバックボーンとの関わりのなかで考えられる必要がある。例えば戦争をめぐっては，戦争の時代を生きた者，あるいは戦争の歴史と関わって生起する社会問題と深く関わりながら生きている者が生存しているなかで，戦争の記憶や残像が生々しく残っていることを前提として歴史叙述が成立してきた。本共同研究に先立つ基盤研究「近現代展示における歴史叙述の検証と再構築」においては，そうしたひとつの前提が解体していくなかで，戦争をめぐる歴史叙述をどのように再構築するのかが眼目のひとつとなっていた。

他方で，同じく先行する上記の基盤研究においては，関東大震災時における「朝鮮人虐殺」をめぐり，日朝関係史や在日朝鮮人史が十分に議論されないなかで，虐殺という突出した出来事に収斂させる形で差別を描き出そうとする歴史叙述の手法の妥当性を問おうとしていた。そこでは，差別や虐殺をめぐって，植民地主義や朝鮮史など新たな歴史的なコンテクストを挿入することで問題をよりクリアに叙述することを目指していた。

しかしながら，2011年３月11日に発生した東北地方太平洋沖地震と，それによって引き起こされた震災ならびに原子力災害の長期化の下で，むしろ次のことが新たな課題として浮上している。

この一連の災害においては，長期化する「異常時」が経験され続けており，そのなかで過去の震災や戦争において起こった諸現象のパラフレーズとなる事柄に連続的に直面させられることとなった。つまり，例えば，「大本営発表」を含む諸情報の受容，異常時における日常感覚の喪失／根強さの両義性，渦中における異常事態の忘却，非理性的な状況への判断と解釈，状況に固有の用語の流通といった，一面で社会学的な分析を要する現象に，今日的状況との連動性を見出すことができる。また震災そのものについていえば，これまでは今日の社会との関連を一般に見出し難かった災害史をめぐって，感受性が高まったこと，また，震災に伴って起こる社会の変化を経験しつつあるという今日的なリアリティ，ならびに今後の風化の可能性を踏まえつつ，分析視角と叙述のあり方を見直してみる必要がある。

以上のことから，過去の震災や戦争をめぐっては，こうした極めて今日的な事態や経験を前提としつつ，「異常時」であることにより内在的な叙述のあり方を模索する必要が生じてきていると考えられる。その際に留意しなければならないのは，個別の状況のなかでの人びとの判断や行動をめぐり，主体性や自発性と，さまざまな権力作用の下での強制性という，二つのベクトルの狭間に置かれたものとして理解しようとする視角である。つまり状況の全体像を十分に把握できないなかでの人びとの行動をめぐり，具体的にどのような理解が可能かを，今次の震災に関わって見られる諸現象を踏まえつつ，検討していく必要がある。さらに，震災がどのような社会変化に結びついていくのかという論点をめぐっては，それぞれの時代状況の相違を踏

まえつつも，より広範な視野から検討していく必要がある。

これらを踏まえ，本研究では，「災害史」「朝鮮史」「モダニズムと震災・戦争」を分担課題としつつ，博物館における歴史表象を念頭に置きながら研究を進める。その際，当座は以下の点を切り口にとする。

①戦争をめぐる今日的な理解と，戦後歴史学における戦争叙述の断層を意識しながら，戦争そのものの効果的な提示の仕方を検討する。その際，アジア太平洋戦争後に，日本社会が構造的に組み込まれてきた冷戦体制下の戦争に目配りし，断層が生じた要因に対する考察も行う。（先行する共同研究からの継承）【主にモダニズムと震災・戦争】

②日朝関係史・在日朝鮮人史というコンテクストを挿入し，関東大震災における朝鮮人虐殺，恒常的な差別，戦時における朝鮮人・朝鮮半島をめぐる意識形成を再評価する。（先行する共同研究からの継承）【朝鮮史】

③大正デモクラシー期の諸運動が，関東大震災を契機とする社会の再編や東京圏からの人の流動を経て，東京と地方の近代にどう作用したかを，山梨等の地域モダニズムを視野に入れながら検討する。【モダニズムと震災・戦争】

④「異常時」において，強制性と主体性の狭間で人びとの判断や行動がどのように作られたのか，そしてそれらが，「異常時」であることによってどのようなドライブがかけられるのか，といった事柄を，日記や証言のなかから読み取るとともに，その要因を為すプロパガンダや報道のなかに見出す。その際，東日本大震災等，今日的な「異常」への考察と突き合わせながら議論を深めることで，日常感覚との連動性を析出することに留意する。【全グループ】

⑤主として近代以降の震災に着目しつつ，現代における前近代の震災に対する認識とその変容を視野に入れ，多角的に災害史を検討し，今日的な状況において求められる叙述のあり方を検討する。【主に災害史】

⑥上記の点を考慮しつつ，展示表現としてどのような形で厚みを作ることができるのか，またどのような手法が望ましいのかを検討し，今後の第５・第６展示室の改善等の土台を作る。【全グループ】

２．今年度の計画

2013年度に控えている震災関係の企画展示を視野に入れ，朝鮮史に関わる議論，ならびに震災史に関わる議論を中心に研究会を実施する。また，東日本大震災をめぐって起こった様々な現象をめぐる議論と，近現代の震災・戦争に関わる議論のすりあわせを，「震災史に関する総合的研究」ブランチと合同で実施し，課題を明確化する。その際，ゲストコメンテーターを招聘し，体験の今日性と歴史学的な議論との間の断層を明らかにする。

このうちとりわけ戦争をめぐって，国内外の博物館展示をめぐって検討を行う。なお，このなかには具体的に巡検を行う部分と，ゲストコメンテーターによる内容紹介の双方を織り交ぜる。さらに，地域モダニズムとの関わりのなかで，関東大震災と戦時の双方を視野に収めつつ，具体的な事例に即して民衆史に関わる検討を行う。

３．今年度の経過

第１回研究　2012年６月23日　国立歴史民俗博物館

共同研究構想原案についての説明

記録映画視聴（2003年企画展「ドキュメント災害史」）

災害展示に関する報告・討論

第２回研究会　2012年７月29日　国立歴史民俗博物館

対馬巡見予備調査報告（大串潤児・愼蒼宇）

福井の戦争・震災に関わる報告（高野宏康）

山梨の戦争写真帖に関わる報告書の検討

第３回研究会　2012年８月19日・20日　仙台市博物館

資料調査

慶長津波に関わる報告（蝦名裕一）

福井地震災に関わる報告（高野宏康）

仙台市内巡見・がれき処理施設の見学。

第４回研究会　2012年10月27日・28日　関西大学高槻ミューズキャンパスほか

国立民族学博物館展示見学

岩手県大槌町の昭和三陸津波ならびに今回の復興住宅構想に関わる報告（東京大学大学院生・岡村健太郎）

戦時下・戦後の災害に関わる報告（林能成・土田宏成）

阪神大震災と福島原発の避難者問題（田並尚恵）

和歌山県広川町における昭和南海地震津波に関わる巡見

第５回研究会　2012年11月16日　仙台市博物館

災害展示（企画展）の計画と進行状況（原山浩介）

明治・昭和三陸津波の部落移転と現在（東京大学大学院・岡村健太郎）

大船渡市赤崎の津波被害（北原糸子）

明治三陸津波の写真について（共同通信社・沼田清）

第６回研究会　2012年12月１日・２日　福井県

丸岡城および周辺施設の巡見

平和史料館ゆきのしたにおける資料調査（説明：同史料館　田島伸浩・加藤忠夫）

福井城周辺の震災史跡巡見

美浜原子力PRセンター見学

第７回研究会　2013年２月20日　国立歴史民俗博物館

関東大震災時の朝鮮人虐殺について（専修大学・田中正敬）

裁判記録にみる関東大震災時の朝鮮人虐殺の論理（早稲田大学・藤野裕子）

第８回研究会　2013年３月27日～３月31日

対馬市の古文書調査

対馬の戦争遺跡の巡見

４．今年度の成果

大所帯の共同研究であるため，戦時を中心とする近現代史と，災害史の，二つのコアを設定し，研究会を計画・実施した。

戦時に関わる歴史をめぐっては，朝鮮との関わりを視野に入れ，ひとつは関東大震災における朝鮮人虐殺

をめぐる今日の研究状況を，ゲストスピーカーを招聘して検討した。この論点は，災害史とも関わるものであり，近現代史一般の歴史叙述と，災害史との間の議論の組み立て方の相違の確認や，相互のすりあわせを含んだ議論となった。また，地政学的な境界域にある「対馬」に着目しつつ，近代から戦時，そして朝鮮戦争期における日本と朝鮮半島の関係を捉え直すことを，本共同研究の目標設定のひとつとし，今年度は戦争遺跡の巡見と文書調査を中心に取り組んだ。

災害史をめぐっては，2013年度に実施する企画展示を視野に入れ，東北地方の地震，ならびに近代の地震という二つの方向から，災害史をまとめ直すとともに，それぞれについて資料調査を行った。この試みは，新たな資料の発掘や，災害をめぐる歴史叙述のあり方の創造を伴う充実したものとなったが，他方で，東日本大震災を，災害史のなかでどのように捉え直すのかについては議論が十分に行えなかった。後者の課題は，この震災が未だに終わっていないという現状とも関わっており，今後，慎重に議論を進める必要がある。

このほか，戦時に関わる歴史と，災害史の，ふたつの関心からのアプローチとして，福井における巡見と資料調査を行った。占領期の福井地震は，戦災からの復興が十分に進まないなかで発生し，占領軍による支配の下で復興が進められたという特異性がある。この戦災・震災については，歴史叙述としてこれまで十分に検討が重ねられてきたとは言い難く，また，歴史を多角的に捉える視野の広さが問われるものでもあり，今後，さらなる検討が必要である。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

荒川　章二　　静岡大学情報学部・教授
板垣　竜太　　同志社大学社会学部・准教授
植村　善博　　佛教大学歴史学部・教授
内田　青蔵　　神奈川大学工学部・教授
卯花　政孝　　学識経験者
蝦名　裕一　　東北大学災害科学国際研究所・助教
大岡　　聡　　日本大学法学部・准教授
大串　潤児　　信州大学人文学部・准教授
小川原宏幸　　同志社大学言語文化教育研究センター・助教
菅野　正道　　仙台市博物館市史編纂室・室長
北原　糸子　　立命館大学グローバルイノベーション研究機構・教授
崎山　政毅　　立命館大学文学部・教授
宍倉　正展　　産業技術総合研究所活断層・地震研究センター・研究チーム長
愼　　蒼宇　　法政大学社会学部・准教授
杉本めぐみ　　独立行政法人土木研究所水災害・リスクマネジメント国際センター・専門研究員
宋　　連玉　　青山学院大学経営学部・教授
高岡　裕之　　関西学院大学文学部・教授
高村　竜平　　秋田大学教育文化学部・准教授
田並　尚恵　　川崎医療福祉大学医療福祉学科・准教授
谷口　仁士　　立命館大学グローバルイノベーション研究機構・教授

趙　　景達　　千葉大学文学部・教授
津久井　進　　関西学院大学災害復興制度研究所・研究員
土田　宏成　　神田外国語大学外国語学部・准教授
冨山　一郎　　同志社大学グローバルスタディーズ研究科・教授
鳥山　　淳　　沖縄国際大学総合文化学部・准教授
中野　　聡　　一橋大学大学院社会学研究科・教授
林　　能成　　関西大学社会安全学部・准教授
原田　敬一　　佛教大学歴史学部・教授
平川　　新　　東北大学東北アジア研究センター・教授
水野　直樹　　京都大学人文科学研究所・教授
宮本　正明　　立教学院史資料センター・学術調査員
諸井　孝文　　株式会社小堀鐸二研究所・所次長
矢口　祐人　　東京大学大学院総合文化研究科・准教授
安田　常雄　　神奈川大学法学部・特任教授
山本　和重　　東海大学文学部・教授
吉田　　裕　　一橋大学大学院社会学研究科・教授
○久留島　浩　　本館研究部・教授
高野　宏康　　本館研究部・機関研究員
仁藤　敦史　　本館研究部・教授
林部　　均　　本館研究部・教授
◎原山　浩介　　本館研究部・准教授

B「東日本大震災被災地域における生活文化研究の復興と博物館型研究統合」
2012～2015年度
（研究代表者　川村　清志）

１．本研究会の研究目的

東日本大震災（以下，震災）は，日本社会全体に大きな被害を与えたが，特に歴史・文化研究の中核である地域社会がこうむった被害は甚大である。歴博では2011年４月以降，気仙沼市をはじめとする三陸地域で被災文化財のレスキューを中心とする救援事業を展開してきた。本研究はそうした事業と並行して，被災地域の調査研究システムの復興と地域における被災文化財を素材とした研究発信の可能性を探ることを目的とする。

本研究は大きく，以下の３つの目的を達成するために構想された。

まず，第１には，震災で大きな被害を受けた三陸沿岸域における文化財を救出と再資源化に関するシステムを実地で検証，整理し，今後起こりうる大規模災害に対する文化財保護の側面からの備えを構築することである。これまで地域における文化財の調査研究は地域の博物館，資料館が主要な役割を果たしてきた。しかし，震災によって施設はもちろん，人材，情報システム，ネットワークが大きく損なわれたことは周知の

事実である。本研究はそうした状況を克服し，地域における生活文化研究を再起動するための方策を構築する。具体的には三陸沿岸域における文化財の保全活動を地域間，学問間，制度間の連携によって効果的に進行させるための組織構想と研究課題の検討とを行いたい。

第２に，被災地域における無形文化財の保護に関する方法論の構築である。震災以降，有形文化財に関する調査，保全，復興などの救援活動は大きな成果を挙げてきたが，無形の文化財に関する救援については，必要性こそ意識されてはいるものの，着手に至るには多くの克服すべき課題があり，極めて手薄な状態である。本研究は地域の調査研究に長年従事してきた研究者の参加によって，地域における無形文化財の復興と継承に関する具体的な対象を設定し，そこから無形文化財の担い手や支援をめぐる問題を分析，検討することを通して，被災地域における有形・無形両面にわたる文化財の研究を構築し，発信したい。

第３に，こうした被災地における多様な文化財の復興，継承に関する問題を多角的に検討することで，生活文化のレベルからの地域社会の再検討が可能になる。今回の被災地域は津波による被害が深刻であったが，長い眼でみれば，豊かな漁業資源をはじめとする海の恵みを利用してきた地域でもある。三陸沿岸という海の正負の両面と向き合ってきた地域文化について，行政区分を超えた枠組みで再検討し，広域にまたがる生活文化の形成と展開に関する研究の可能性を地域における博物館，資料館と連携しながら提示していく。

２．今年度の研究目的

初年度となる今年度は，共同研究員における問題意識の共有化をはかる。個別のテーマ発表とともにブレーンストーミングを中心としたディスカッションを通じて，各々の立場と震災時の意識，対応のあり方，これまでの活動などについての議論を行い，今後の研究会の運営方針を定めていく。中心的な話題としては，震災後，約１年を経た時点で，文化財レスキューの成果と課題を振り返り，整理する。併せて今後の課題についても検討を加える。各共同研究員からは岩手県・宮城県・福島県などにおける震災直後からの博物館・資料館とそのネットワークおよび他地域からの救援活動が果たした役割を検証してもらい，その成果と具体的な技法や資料保全に関する議論を行う。またその際にどういった問題が生じたかも検討する。

そのうえで，被災地域における文化財救援・復興システムの検討と第４室（民俗）特集展示の構想と準備を行う。併せて第４室（民俗）展示の新構築にあたって第１回の特集展示を中心に震災と復興に関する展示を通した情報発信の準備も行う。

３．今年度の研究経過

第一回研究会　　５月27（土），28日（日）　本館

葉山　茂（国立歴史民俗博物館）「宮城県気仙沼・尾形家住宅における津波被災生活用具の救出活動とその課題」

川村清志（国立歴史民俗博物館）「震災から復興への物語――神戸，新潟，奥尻」

第二回研究会　　９月30日（土），10月１日（日）　本館

葉山 茂（国立歴史民俗博物館）「副室特集展示「東日本大震災と復興［仮］展示構成案」について」

加藤秀雄（国立歴史民俗博物館）「被災資料と語りから生活文化を考える―気仙沼市本吉におけるレスキュー活動から―」

川村清志（国立歴史民俗博物館）「報告：気仙沼シンポジウムについて」

第三回研究会　　１月13（土），14日（日）　国立民族学博物館，大阪
※「機構連携研究『大規模災害と広域博物館連携に関する総合的研究』」との合同研究会
　　調査地域　　：神戸港震災メモリアル調査　メリケン波止場，神戸国際会館，三宮センター街他
日高真吾氏（国立民族学博物館）「東日本大震災における文化財レスキューと連携展示「記憶をつなぐ―津波災害と文化遺産」」
前川さおり氏（遠野文化研究センター調査研究課）「文化財レスキューと被災を伝える展示」
巡検　　「人と防災記念館特別展示」解説，前川さおり氏，於：兵庫県神戸市，人と防災未来センター
災害被災地調査　１月21～23日（月）～（水）
　　調査地域　　：長崎県雲仙普賢岳震災関連施設調査，雲仙普賢岳，雲仙岳災害記念館，平成新山ネイチャーセンター，島原城観光復興記念館他

４．今年度の研究成果

第１回研究会では，機関研究員の葉山が，先年，国立歴史民俗博物館が従事した宮城県気仙沼でのレスキューについて，「宮城県気仙沼・尾形家住宅における津波被災生活用具の救出活動とその課題」と題して発表を行った。この発表では，震災の約１ヶ月後にはじまった気仙沼地域における文化財レスキューの中間報告が行われた。次に代表の川村が，この研究会の趣旨と大規模災害地域の被災以後の復興への取り組みの諸相と当該地域におけるモニュメントの特徴についての発表を行った。具体的には，兵庫県神戸市と新潟県長岡市近郊，そして北海道奥尻島において震災後に建立されたモニュメントや博物館施設を紹介した。

第２回の研究会では，葉山と加藤から，2013（平成25）年の３月19日からはじまる特集展示に関する発表が行われた。まず，葉山からは，「副室特殊展示『東日本大震災と復興』」というタイトルで，文化財レスキューの展示の計画とそのねらいについての発表が行われた。

次に加藤からは「被災資料と語りから生活文化を考える―気仙沼市本吉におけるレスキュー活動から―」と題した発表がなされた。主に気仙沼でのレスキューで得られた民俗資料と聞き取り調査によって得られた生活史についての報告が行われた。

第３回の研究会は，人間文化機構の連携研究「大規模災害と広域博物館連携に関する総合的研究」との合同研究会として，大阪の国立民族学博物館で開催された。研究会の午前中には，都市部での大規模な地震被害を受けた阪神・淡路地域のなかで神戸市中央区三宮周辺の震災モニュメントの巡検を行った。震災が起きた１月17日の直前の日曜日であったため，いくつかのモニュメントのある場所では震災に関わる行事が行われており，併せて参与観察を行った。そして，午後からは民博にて共同研究員の前川さおり氏と日高真吾氏の二人から報告してもらった。

まず，日高氏から，「東日本大震災における文化財レスキューと連携展示「記憶をつなぐ―津波災害と文化遺産」」と題して，自身が中心となって活動した民博による文化財レスキューの過程とそこで生じた諸問題について発表がなされた。国立民族学博物館でのレスキューは，東北各地にわたっており，レスキューされた文化財も，多様な素材が扱われていたため，保存方法や脱塩処理などをめぐって，活発な議論が交わされた。

次に前川氏からは，「文化財レスキューと被災を伝える展示」と題して，自身の文化財レスキューの経験に即して，活動の経緯や課題についての説明をしていただいた。また，この報告では，前川氏がこれまで行っ

てきた災害に関わる展示活動の報告がなされた。震災以降，氏は多くの災害の企画展示に関わっており，それらの展示が開催されることになった経緯から，展示の効果，課題など，具体的な事例を通した報告がなされた。たとえば，展示の際の課題として，震災展示における映像の取り扱いに関して，音声をなくすことで視聴者が受けるインパクトを軽減できることなど，経験者として工夫の方法を提示してくださった。

また，長崎県雲仙普賢岳震災関連施設について調査を行い，博物館施設における震災展示のあり方や被災した家屋や学校などの保存と公開における問題点について検証を行った。

さらに今年度は，大震災直後から行われた気仙沼を中心とした被災地域のインテンシブな文化財レスキューとその後の保存，整理作業，そして，資料調査を研究会として継続して行ってきた。とりわけ2011年に文化財レスキューで救出された尾形家と三浦家の生活文化資料の整理と分析に勢力を注いだ。これらの生活文化資料と文化財レスキューの実践の成果については，2013年度３月19日に開室された特集展示『東日本大震災と気仙沼の生活文化』として公開している。

また，特集展示に併せて，『東日本大震災と気仙沼の生活文化（図録と活動報告)』という図録・報告書を作成し，出版した。この書籍は，これまでの活動記録を一般に紹介するために作成したものであり，特集展示では扱えなかった資料も組み入れつつ解説を行っている。また，この書籍において共同研究員である川村，小池，葉山，加藤は各々の調査課題にもとづいて中間報告を行っている。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎川村　清志（本館研究部・准教授）
○小池　淳一（本館研究部・教授）
青木　隆浩（本館研究部・准教授）
内田　順子（本館研究部・准教授）
久留島　浩（本館研究部・教授）
柴崎　茂光（本館研究部・准教授）
松田　睦彦（本館研究部・助教）
山田　慎也（本館研究部・准教授）
山田　康弘（本館研究部・准教授）
加藤　秀雄（機関研究員）
葉山　　茂（機関研究員）
小山　　由（リサーチ・アシスタント）
会田　理人（北海道開拓記念館・学芸員）
榎　　陽介（福島県立博物館・専門学芸員）
川島　秀一（神奈川大学大学院・特任教授）
日髙　真吾（国立民族学博物館・准教授）
前川さおり（遠野文化研究センター・調査研究課主査）
山内　宏泰（リアス・アーク美術館・主任学芸員）
計：18名

C「災害の記録と記憶をめぐる資料論的研究」2012～2014年度
（研究代表者　樋口雄彦）

１．目　的

2011年３月11日の東日本大震災を受け，少なからぬ研究者が反省をこめて学会誌上で指摘したように，戦後日本の歴史学は，わずかな例外を除き，災害史研究に真正面から取り組んだことがなかったといってよい。また，現在，歴史研究者に何ができるのか，何をしなければならないのかについて，現代的課題が鋭くつきつけられてもいる（『歴史学研究』第884号，2011など）。そのような認識を前提としつつ，本研究では，限られた範囲ではあるが軸足を定めて一定の課題に取り組みたい。

まず本研究の目的の第一は，災害に関する歴史資料について，考古学・民俗学・文献史学の立場から通史的におさえることである。あらゆる歴史研究が資料にもとづくものであるように，災害研究も特定の資料に依拠して実現される。何を資料とするか，何が資料となるのか，またその資料にはどのような特徴があるのかについて，時代や地域，分野を横断して学際的な視点で考える。

目的の第二は，災害に関する記録と記憶との関係について，文献，遺物，伝承などを素材としながら考えることである。

〔文献資料〕　とくに古代以降に起きた災害は，まず公的文書に記録されたあと，多様な素材に様々な目的で遺されていく。その際，素材によって記録される内容が少しずつずれていったり，故意に改竄されたりすることもある。本研究ではそうした媒体によって異なる記録内容を資料の属性と規定し，その歴史的背景をさぐることにある。

〔遺物資料〕　先史時代においては人為的に記録が残される場合は希有で，古代以降と同じレベルの資料論は難しい。そのため，むしろこれまで知られていなかった先史時代の災害を，考古学，分析化学，地層学などをもとに掘り起こすことを目的とする。併せて歴史時代の災害に関する遺物資料情報の収集と分析にもつとめる。

〔民俗資料〕　災害の事実は記録や遺物とともに語りや儀礼などの民俗伝承としても共有される。それらについての日本各地の具体的な事例情報の収集と比較分析を行なうことを目的とする。

目的の第三は，災害と復興の関係性を，社会的，経済的な側面からとらえ直すことである。とくに歴史的なその反復の関係に注目して，被災と復興のメカニズムについての分析を試みる。

以上，三点の目的を設定して災害史研究の基礎をなす資料についての学際的な総合的研究を試みることとする。

２．今年度の研究計画

災害史に関して，典拠となった資料に着目した形での文献目録を作成する。また，各自が分担するテーマ毎に研究動向をおさえ，報告会を通じてそれらを共有化する。考古・分析班では，特定の地域（たとえば琵琶湖および淀川水系）を選び，すでにボーリングされた琵琶湖の堆積物や酸素同位体比から，洪水の履歴などを，植生との関係も含め，解明する一方で，近江，山城，摂津の弥生遺跡，文献や絵図類などの史資料から，植生との関係で淀川水系の洪水の歴史について考える（藤尾・若林・小椋・中塚）。

３．今年度の研究経過

〔研究会〕

第１回　日時：2012年５月12日（土）　場所：国立歴史民俗博物館

藤尾慎一郎「震災に向きあう考古学」

上記発表のほか，趣旨説明，自己紹介と抱負，研究内容・スケジュールの検討など

第２回　日時：2012年９月８日（土）　場所：東京ガーデンパレス

宮瀧交二「管見に入った過去2000年間の気候変動研究の成果について」

中塚武「樹木年輪酸素同位体比を用いた本州中部における過去2000年の夏季降水量の年々変動の復元」

小椋純一「調査の中間報告」

上記発表のほか，災害史関連データベースについての情報持ち寄りなど

第３回　日時：2012年12月９日（日）　場所：広島ガーデンパレス，厳島神社

三浦正幸「厳島神社の自然災害の歴史と被災を避けた社殿の構成」

上記発表のほか，厳島神社でのフィールドワーク

第４回　日時：2013年３月３日（日）　場所：葛飾区郷土と天文の博物館

ゲストスピーカー　橋本直子（葛飾区郷土と天文の博物館学芸員）「関東の歴史災害　現地からみた東日本大震災の教訓」

〔個別調査〕

考古分析班：滋賀県立琵琶湖博物館（６月１日），草津市役所・草津川跡地整備課（７月２日），藤尾：韓国・高麗大学校博物館／世宗特別市・大平洞遺跡（３月13～15日）

大久保：館蔵資料のうち災害関連錦絵の所在確認を実施

関沢：熊本県大津町にて白川の水害関連の予備的調査（８月２日）

樋口：静岡県立中央図書館（６月９日，７月９日，12月２日），静岡県文化財団主催「金原明善と災害から郷土を守った先人たち」展（８月４日），富士市立中央図書館（８月４日），磐田市歴史文書館（８月27日），浜松市立博物館（９月29日），浜松市立中央図書館（10月20日），富士市立博物館（11月16日），藤枝市郷土博物館（２月９日），沼津市明治史料館，沼津市教育委員会市史編さん係などに赴き，明治初年の治水関係文書および文献の調査を実施

４．今年度の研究成果

考古・分析班では，琵琶湖および淀川水系を選び，すでにボーリングされた琵琶湖の堆積物や酸素同位体比から，洪水の履歴などを，植生との関係も含め解明する一方で，近江，山城，摂津の弥生遺跡，文献や絵図類などの史資料から，植生との関係で淀川水系の洪水の歴史について考えることをめざした。より具体的には，天井川として知られる滋賀県の草津川について，ボーリング調査の際のサンプルから有機炭化物を見つけ，AMS炭素14年代測定を行い，かさ上げ工事の時期を特定しようと考えたが，良好な状態の資料は残されておらず，分析を行えないことが判明した。

古代・中世史担当は，研究会の場を通じて地球化学の専門家による最先端の研究状況（樹木年輪酸素同位体比を用いた古気候復元）を知らされることで，従来から行ってきた自身の環境史・災害史研究が見直しを要するものであることを自覚することができた。

近代史担当は，設定したフィールドで資料の所在調査を積み重ね，明治初年の治水行政に関する基礎的な情報の把握につとめるとともに，資料収集を継続することの必要性とそれを研究につなげていく方向性を確認することができた。

民俗担当は，調査地の選定を試みている段階であるが，今年７月12日の熊本県の記録的豪雨による白川流域の水害被害について予備的調査を行ない，これと昭和28年の白川の大水害の経験と記憶との関係について聞き取り及び資料調査を継続することとした。

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

中塚　　武　名古屋大学大学院環境学研究科	若林　邦彦　同志社大学歴史資料館
宮瀧　交二　大東文化大学文学部	小椋　純一　京都精華大学人文学部
三浦　正幸　広島大学大学院文学研究科	藤尾慎一郎　本館研究部・教授
大久保純一　本館研究部・教授	○関沢まゆみ　本館研究部・教授
◎樋口　雄彦　本館研究部・教授	

［基盤研究］

◇広領域研究歴史創成研究

（１）「【科研型】日韓における青銅原料の産地の変遷に関する研究」
2012～2014年度
（研究代表者　齋藤　努）

１．目　的

2004～2006年度に行った科研費基盤研究「東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究」において，青銅器時代～三国時代を中心に韓国慶尚道地域（旧加耶諸国および新羅の一部）と日本列島出土の青銅製品の鉛同位体比分析を行った結果，４世紀頃を境として，中国北方産から朝鮮半島産の可能性がある青銅原料へと大きな変化のあったことが明らかになった。

その後，同時代の旧百済地域における状況を調査するために，2007年度にリーダーシップ経費，また平成2008～2010年度には科研型の共同研究として，韓国国立中央博物館が所蔵する青銅製品と日本国内出土資料について調査を行っていたが，2009年度に先方より共同研究を中止したい旨の連絡があったため，韓国出土資料の調査は不十分なままとなってしまった。そこでやむを得ず，2010年度は，韓国の考古調査財団などと連絡をとって，調査の継続をはかってきた。

本研究では，あらためてそれらの考古調査財団を研究協力者として，旧百済地域において，朝鮮半島産原料の使用開始時期について，青銅製品の鉛同位体比分析を実施することによって，その可能性を調べていくこととする。韓国では製錬遺跡や鉱山遺跡の発掘調査があまり進んでおらず，朝鮮半島産原料の開始時期がよくわかっていない状況にあるため，自然科学的な視点からそれを探り，考古学的な裏付けの有無について

もあらためて検討することが本研究の目的の一つである。

これまでの研究により，日本産原料の開始時期について，考古学と自然科学の両面からほぼ確実と考えられているのが７世紀中葉頃，自然科学的な分析から可能性の指摘されているのが６世紀後半～７世紀初とされている。また，国産原料開始以前の輸入原料の産地について，従来の鉛同位体比研究では中国との関係を中心に論じられてきたが，上述の一連の共同研究によって，朝鮮半島産と判断されるものが少なからず検出されている。そこで，古墳時代～古代の資料の調査を重点的に行うことによって，国産原料の開始時期をより明確化するとともに，その前後の産地の変遷について，地域による差異などを含めて検討していくことが，本研究のもう一つの目的である。

２．今年度の研究計画

韓国側の研究協力機関として，韓国文化遺産研究院，漢江文化財研究院，京畿文化財研究院などの考古調査財団と連携をとって研究を進める。古代における鉱山開発や技術との関連性について考察を深めるために，今後，研究組織の中に古代史（文献史学）を専門とする研究者を加える予定である。

韓国出土資料として，京畿道などを中心とする旧百済および新羅北部のものを，日本出土資料としては，百済系古墳を中心に中国地方，畿内周辺，関東地方の遺跡出土資料を広く検討し，順次調査とサンプリングを進める。

３．今年度の研究経過

研究代表者が体調不良となったため，４月から秋までは十分な活動を行うことができず，計画に若干の変更が生じた。取得している科学研究費補助金（基盤研究（B)「日韓における青銅器原料の国産開始時期と産地の変遷に関する研究」）とあわせて，韓国内出土資料を中心に，下記の調査と試料採取を行った。

11月

大成洞古墳博物館と同古墳出土青銅資料を保存処理している国立金海博物館，および釜山市立博物館において，鉛同位体比分析用試料のサンプリング。

１月

嶺南文化財研究院より朴升圭院長と禹炳喆調査課長を歴博へ招聘し，林堂洞古墳群の調査状況と出土遺物について研究会を実施。

２月

嶺南大学校博物館において青銅器の調査と鉛同位体比分析用試料のサンプリング。蔚山文化財研究院において達川遺跡出土鉄鉱石の調査。

３月

漢江文化財研究院，中部考古学研究所，国防文化財研究院において青銅器の調査と鉛同位体比分析用試料のサンプリング。

４．今年度の研究成果

韓国の各財団が所蔵する青銅資料について鉛同位体比測定用試料のサンプリングを行った。また，歴博において，研究会を実施した。それらの際に，本研究の成果を受けて，青銅資料の分析の他に炭素14法による

年代測定や人骨の調査結果を併せ，青銅器時代～三国時代における朝鮮半島の状況を総合的に把握する研究を継続的に実施していくことが合意され，今後の研究計画について打ち合わせを行った。

５．研究組織

亀田　修一　岡山理科大学総合情報学部　　土生田純之　専修大学文学部
◎齋藤　　努　本館研究部・教授　　○藤尾慎一郎　本館研究部・教授
高田　貫太　本館研究部・准教授

◇多元的フィールド解析研究

（１）「日本の中山間地域における人と自然の文化誌」2011～2013年度
（研究代表者　原　正利）

１．目　的

本共同研究は自然資源利用の歴史を，専門分野が異なる研究者が歴史的な相互作用と関連させつつ分析することで，人と自然との関係がどのような要因によって変容してきたかを総合的に研究し，明らかにすることを目的とする。

今日，近代の自然保護の根幹が大きく変容しようとしている。なかでも人びとの生活によって維持されてきた二次的植生（いわゆる「里山」）がもつ，生物・文化多様性への関心が高まっている。しかし現在語られる「里山」は理想化されたものであり，現実の里山を歴史的にみると，人が自然と共生してきたとはとても言い難い。「里山」は歴史的なさまざまな要因や，人間側の一方的な思惑によって，過度に伐採された時期もあれば放置された時もあり，その姿をたびたび変えてきた。現在，最も必要な研究は「日本人は自然を大切にしてきた」といった，あたかも所与のもとして存在したかのような自然観にとらわれずに，日本人は自然をどのように利用してきたのかをフィールド研究に根ざし，その歴史的な変遷の具体的な様相を，実証的に検証することだと考えられる。

さらに本共同研究は，「学問分野が異なる研究者が同一のフィールドを研究対象とする」「フィールド調査におけるエンド・ポイントを明確化する」「展示による成果の公開をおこなう」という特色をもつ。多分野の研究者が参画する共同研究では学問分野ごとの，研究対象・方法論・時代による資料レベルの差異などの要因によって，最終的には参加メンバーによる個々人の研究成果の集成になる傾向が強い。その問題点を改善し，共同研究のあり方の新たな模索と，共同研究による調査成果の総合化の実現も目的としている。

２．今年度の研究経過

今年度のフィール調査は以下の通りである。

2012年の蔵玉・折木沢，天津（東大演習林を中心として）

１月６～７日，１月８～９日，１月12日，１月21～22日，１月30～31日，２月４～５日，２月９～11日，２月12～13日，２月15～16日，２月18～20日，２月24日，３月１～２日，３月８～11日，３月13日，３月14日，３月15～16日，３月18～20日，３月22～25日，３月28，３月29～30日，４月７～９日，４月17～18日，４月

21～23日，４月25～26日，５月３～６日，５月11～12日，５月25～26日，５月27日，７月29～30日，８月３～５日，８月８日，８月９～10日，８月21～23日，８月25～26日，８月29～30日，９月１～７日（岐阜県関ヶ原マンボ灌漑用水路調査），９月10～11日，９月13～14日，10月３～５日（三重県いなべ市マンボ灌漑用水路調査），11月５～６日，11月４日（河口湖新倉堀抜調査），12月８日（河口湖新倉堀抜調査），12月５～７日（千葉県立中央博物館上野館長，国立歴史民俗博物館平川館長へのフィールド現場説明会），12月11日，12月19日，12月20日，12月22～23日，12月24～28日，12月29～30日

2013年

１月16日，１月17～18日，１月29日，２月２日，２月６～７日，２月10日，２月13日，２月18日，２月20日，２月21日，２月25～27日（宮崎県都城横市川灌漑用水路の調査），３月２日，３月３日，３月11日，３月13日

〈研究会〉

５月20日　国立歴史民俗博物館

発表内容

西谷　大「二五穴の構造について」

島立理子「文献からみた二五穴」

大久保悟「二五穴のGIS化」

加藤久佳「地質からみた二五穴」

〈トピックス展〉

「房総特有の灌漑用水「二五穴」。二五穴を通して，地域で暮らす人々の歴史と知恵を紹介」という内容のトピックス展示を二箇所でおこなった。

①トピックス展「二五穴―山をブチヌク用水路―」

　会期　１月26日（土）～２月３日（日）

　会場　君津市亀山コミュニティセンター

　主催　千葉県立中央博物館，国立歴史民俗博物館

　共催　君津市久留里城址資料館

②トピックス展「二五穴―山をブチヌク用水路―」

　会期　２月16日（土）～３月３日（日）

　会場　千葉県立中央博物館　本館第２企画展示室

　主催　千葉県立中央博物館，国立歴史民俗博物館

　共催　君津市久留里城址資料館

３．今年度の成果

「蔵玉区有文書」・「門生区有文書」に加えて，蔵玉・折木沢土地改良組合で土地台帳関連資料が，君津市図書館で灌漑用水の普請（経費を含む）に関する「君津市利根本吉よし子文書」がみつかった。これらの文書から江戸時代・明治・大正・昭和にかけての蔵玉・折木沢地区の土地利用（水田，畑，山林）変遷過程が復元可能である。

フィールド調査では，黄和田畑，蔵玉，折木沢，坂畑の山を貫くトンネル状の蔵玉・折木沢用水（現地では二五穴と呼ばれる。1853年開削）に加えて，平山用水（1836年開削），大戸台用水（1855年）の灌漑用水に

ついての位置，構造，灌漑域などの調査をおこなった。あわせて文献資料を参照にしながら明治からの水田域の変容過程を調査した。

黄和田畑，蔵玉だけでなく，下流の折木沢，坂畑まで同じ水源による灌漑がおこなわれており，黄和田畑，蔵玉，折木沢，坂畑は一つの生活世界を構成してきたと考えられる。当初，蔵玉・折木沢用水と用水で灌漑される水田は，開削当初からそれほど変化が無いと考えていた。しかし，フィールド調査と文献調査を重ね併せていくと，トンネル状灌漑用水路も毎年のように修理や付け替え工事をおこなうし，新田開発も行うだけでなく，既存の水田の形も常に変化していることがわかった。それに投下される資金も記録をみる限り相当な額にのぼる。

一体その原資は誰がどのように支払ったかが問題なのだが，その一つに東大演習林の存在があると考えている。演習林は，毎年薪炭林として山を払いさげするだけでなく，炭焼きの技術指導もおこなっている。この演習林が，周辺と比較して有利な金額で払い下げしていたことが蔵玉・折木沢・黄和田畑地区の貴重な収入源になっていたのではないかと考えている。

このように蔵玉・折木沢・黄和田畑の水田・畑などが集中する里（小櫃川流域の地域）と炭焼などを行う山（東大演習林内）とは，歴史的にみて複雑な関係性の上になりたっているがわかってきた。里を理解するには山のことが，山を理解するには里を知ることが重要だといえる。

４．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

尾崎　煙雄　千葉県立中央博物館・上席研究員
島立　理子　千葉県立中央博物館・上席研究員
江口　誠一　千葉県立中央博物館・上席研究員
加藤　久佳　千葉県立中央博物館・上席研究員
大木　淳一　千葉県立中央博物館・上席研究員
清水　克志　農業食品産業技術総合研究機構　農村工学研究所　農村総合研究部・契約研究員
梅崎　昌裕　東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻人類生態学教室・准教授
大久保　悟　東京大学農学生命科学研究科・助教
後藤　雅知　千葉大学教育学部・准教授
富田　瑞樹　東京情報大学　総合情報学部 環境情報学科・講師
管根　幸裕　千葉経済大学経済学部・教授
森田　彩子　東京大学大学院医学系研究科・特任助教
岩淵　令治　本館研究部・准教授
青木　隆浩　本館研究部・准教授
村木　二郎　本館研究部・准教授
柴崎　茂光　本館研究部・准教授
工藤雄一郎　本館研究部・助教
松田　睦彦　本館研究部・助教
久留島　浩　本館研究部・教授
○西谷　　大　本館研究部・教授

◎原　　正利　千葉県立中央博物館・生態・環境研究部長

◇歴史資源開発研究

（１）「江戸から明治初期にかけての絵画材料および製作・流通に関する調査研究」2010～2012年度

（研究代表者　小瀬戸　恵美）

１．目　的

歴史資料において，その構成材料を明らかにすることは保存や修復のみならず，資料の歴史的・美術史的位置づけをおこなううえでも非常に重要である。本研究では自然科学的手法をもちいて材質同定をおこなうとともに自然科学・美術史学双方の観点から製作技法や流通経路の解明もこころみる。また，画像分析による製作時の色彩復元や技術解明の手法開発とその有効性の検討もおこなうことにより，年代や製作地における技術変遷の解明をめざす。化学分析については，組成分析，ラマンや赤外などの分光分析，抗体を利用したウェスタンブロット法によるたんぱく質抽出，鉛同位体比法による材料産地推定，構造の材質調査，年代測定などを中心とする。画像分析については，歴史資料計測に適した光源や資料の表面状態を観察するのに適した解析法の検討などをおこなう。

１．江戸後期から明治初期の美術資料の材質と製作，流通

当館が平成20年度に購入した「歌川派錦絵版木」368枚とその版木をもちいて摺られた錦絵を中心として，使用された顔料・染料・膠着材の同定をおこなうとともに，版木の残された彫り目や記された墨書などを精査して技法の解明を試みる。加えて，これら美術資料の表面状態計測などの画像分析手法について検討する。

２．顔料，染料や膠着材の流通

１．と関連して，日本と東洋，西洋間での顔料・染料・膠着材など材料の双交流の解明を目的として，調査をおこなう。特に江戸後期は西洋の人工顔料の日本への輸入やアジア経由での材料の流入が文献の記述として残っているので，化学分析と文献の双方から流通の解明をめざす。

３．天然顔料の原料となる金属鉱物の産地推定と技術解明

伝統的な天然顔料は金属鉱物をその原材料として製作された。これらに鉛同位体比分析や組成分析を適用し産地推定をおこなうことにより，顔料や原材料の流通経路の解明をめざす。また，同時期の金属の製錬・精錬技術を自然科学的に調査することにより，その時代の加工技術を明らかにする。

２．今年度の研究計画

１．美術資料について化学分析を先行し，材質成分の同定やデータ蓄積をおこなう。また材質の状態や混合による変化を再現画像化するに適した画像分析の手法や条件を検討する。

２．西洋，東西アジアの顔料・染料・膠着材の収集・採取，および，文献や美術史関係資料などをもとに情報収集をおこない，記述の調査，精査をおこなう。

３．天然顔料の原材料を採取していた鉱山など産出地の調査を中心におこなう。

３．今年度の研究経過

第１回研究会　３月27日　国立歴史民俗博物館

発表：「近世資料の年代測定」（坂本稔）

「版木計測による錦絵のデジタル再現」（田屋沙世子　眞鍋佳嗣（千葉大学））

「近赤外線画像による錦絵の天然藍とベロ藍の判別」（鈴木卓治）

「錦絵の赤色分析」（鈴木卓治）

３次元計測錦絵版木撮影　11月14日，３月18日，３月25日　国立歴史民俗博物館

４．今年度の研究成果

平成24年度は「１．江戸後期から明治初期の絵画資料の材質と製作，流通」においては分析方法の確立とデータ蓄積をおこない，「２．顔料，染料や膠着材の流通」「３．天然顔料の原料となる金属鉱物の産地推定と技術解明」については主として文献による情報収集を行なった。特に，１．においては分析機器による顔料，染料の自然科学的分析だけでなく，錦絵版木測定用治具を用いて歌川派錦絵版木の３次元計測による表面調査を本格的に行ない，彫りの技術の解明にむけて前進している。また，紫外線―可視光―近赤外線領域における分光反射率測定を江戸後期資料を対象として行なったところ，天然藍とプルシアンブルーの判別を可能とするとともに,近赤外線画像の撮影によってプルシアンブルーとその他青色顔料の判別を可能とした。分光反射測定では，赤色顔料については1869年頃に色相が変化することを確認し，同時期にアニリン赤が普及したとされる美術史における時代背景との一致をみた。また，前年度より継続している３次元画像分析による表面状態調査では前年の成果をもとに最適条件の決定を行ない,撮影時間の短縮を可能とすると同時に,描画の自動化のなどのシステム改善を行ない錦絵の詞書きを判別可能なレベルにまで精度を向上させており，錦絵のデジタル再現を可能とした。

５．３年間の研究成果

「１．江戸後期から明治初期の美術資料の材質と製作，流通」ではラマンイメージング装置により当館所蔵の「歌川派錦絵版木」および，その版木を使用して摺られた錦絵の色材析によるデータ蓄積をおこうとともに，分光反射率測定，蛍光Ｘ線分析等による補完・確認をおこなった。また従来の装置では同定できなかった藍の同定を紙媒体，布媒体の双方において非破壊・非接触で同定可能とした。この藍およびプルシアンブルーの同定が可能となったことにより，江戸中後期による天然顔料 ～人工顔料への変遷がよりあきらかになるとともに,かねがね考えられていたように藍とプルシアンブルーが個別に使用されていたわけではなく,過渡期には画題により一枚の錦絵のなかにおいても両方の顔料を使い分けていた可能性が明らかとなった。また，分光反射測定では，赤色顔料については1869年頃に色相が変化することを確認し，同時期にアニリン赤が普及したとされる美術史における時代背景との一致をみた。上記のような色材分析と同時に表面技法の調査を目的とした３次元計測による画像分析においては，この３年間に治具の設計からはじまり，条件最適化，描画の自動化などのシステム改善を経て，錦絵の詞書きの判別可能レベルまで精度を向上させることに成功し，PC上での錦絵のデジタル再現を可能とした。

上記「１」と関連して行っていた「２．顔料，染料や膠着材の流通」では江戸後期の西洋の人工顔料の日本への輸入やアジア経由での材料の流入の文献の記述を精査するとともに日本と東洋，西洋間での顔料・染

料・膠着材の実物資料を入手して分析をすすめてきた。しかし，地域による成分の違いを明らかにするためには顔料の主成分や微量元素の定量同定の必要が生じており,最終年度に導入したICPなどの機器による測定を継続しておこなっている。

「３．天然顔料の原料となる金属鉱物の産地推定と技術解明」では江戸末期顔料材料産出鉱山のひとつとみなされる秋田県尾去沢鉱山の抗内調査，製錬所跡調査等，産出地による原料鉱物および採鉱状態の調査を行った。これらの現地調査ともに，原料供給源の候補と考えられる鉱山の鉱山採取資料の分析も進めてきたが現時点では個別調査にとどまり，総合的な原料産地推定の概略図を描くには至っていない。

上述のように，この３年間の研究期間をふりかえると，絵画材料の色材についてはラマンイメージング特定による結晶構造をもととした顔料同定，分光反射率測定による顔料判別や３次元画像分析による錦絵のデジタル再現を可能にするなど一定の成果を得た。しかし，当初目的の一つとしていた膠着材の同定については，最適手法・最適条件の確定にいたらなかった。また，流通・産地推定と技術解明についても，文献による調査や入手した採取資料の自然科学的分析をすすめているものの，具体的な成果をだすまでは至らず，未だ道半ばである。しかし，この共同研究を礎とし，今後，より一層の調査研究およびデータ蓄積をすすめていくことにより，絵画材料の変遷や製作・流通経路の解明が可能となるのではないかと考えている。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

岩切友里子　学識経験者，国際浮世絵学会編集委員
谷口　陽子　筑波大学大学院人文社会科学研究科・助教
高嶋　美穂　国立西洋美術館・保存科学研究員
高塚　秀治　学識経験者
眞鍋　佳嗣　千葉大学大学院融合科学研究科・教授
古田嶋智子　東京文化財研究所
杉崎佐保恵　福島県立博物館・学芸員
永嶋　正春　本館研究部・准教授
坂本　　稔　本館研究部・准教授
鈴木　卓治　本館研究部・准教授
大久保純一　本館研究部・教授
○齋藤　　努　本館研究部・教授
◎小瀬戸恵美　本館研究部・准教授

（２）「高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する研究―『死・葬送・墓制資料集成』の分析と追跡を中心に―」2010～2012年度

（研究代表者　関沢　まゆみ）

１．目　的

1997年度・98年度に本館が行なった博物館資料調査「死・葬送・墓制の変容についての資料調査」から，10年以上が経過した現在，その後の日本各地の葬送墓制の伝承はまたさらに大きく変化している。とくに，2000年を境に，農村部においても葬祭場の建設が相次ぎ，葬儀の場所が自宅から葬祭場へと移り，それにともなって葬送儀礼の省略や死穢忌避観念の稀薄化などが指摘されるようになってきている。本共同研究では，第一に，この博物館資料調査報告書『死・葬送・墓制資料集成』１～４（1999年・2000年刊行）をもとに，その追跡調査を行ない，葬送・墓制の変化の実態を調査分析することを目的とする。これには，Ａ：各地の葬送・墓制の変化の実態を調査分析（地域単位），Ｂ：テーマごと（広く面で）（例：洗骨・改葬習俗の変化，

サンマイ利用の変化，土葬から火葬へ，自宅葬から葬祭場へなど過渡期のケースの情報蓄積など）の２つを考えている。そして，第二に，各地に伝承されている葬送・墓制に関する民俗とその分布についての情報整理を行ない，日本列島の民俗の地域差の問題を葬送・墓制の側面から考察する。(例：お盆の墓参習俗〈近畿と東北との違い〉，巳正月の習俗〈四国〉，盆に迎える霊と盆棚，その類型差，血縁的関係者と地縁的関係者との役割分担を示唆する例〈棺担ぎ，穴掘り，最初に土を入れる喪主，野焼き等〉など)。第三に，1960年代から70年代の高度経済成長期における生活変化と2000年以降におきている生活変化，とくに葬送・墓制の大きな変化と，両者の時差・タイムラグに注目することによって，民俗の伝承の変化と世代交代という問題などについての分析を行なう。本共同研究は，本館の資料調査報告書『死・葬送・墓制資料集成』１～４に得られている情報資料をもとにそれを活用して，民俗学の基本的研究課題である時間差と地域差という両者を視野に入れた研究展開を試みるものである。

２．今年度の研究目的

東北，関東，東海，中部，北陸，近畿，四国，中国，九州の各地方における2000年以降の葬送・墓制の変化に関する追跡調査を行なうことに重点をおき，研究会において共同研究員各位による中間報告を随時行なう。

３．今年度の研究経過

〔研究会〕今年度は４回の研究会を開催することができた。

第１回研究会　日時：平成24年６月９日（土）　場所：跡見学園女子大学

研究発表

小田嶋恭二（北上市教育委員会文化財課）

「北上市和賀町内における葬送儀礼について」

西村　　明「葬送儀礼への第三者の関与」

新谷　尚紀「民俗調査にとって40年の変化とは

―志摩地方の葬送墓制（1972年・2012年）：民俗学研究と世代責任」

その他　各位の調査報告等情報交換

第２回研究会　日時：平成24年9月15日（土）　場所：東京ガーデンパレス

研究発表

田井　静明（瀬戸内海歴史民俗資料館）「香川県西部地域の葬送墓制習俗の変化」

梅野　光興（高知県立歴史民俗資料館）「高知県日高村本郷の葬儀とその変化」

関沢まゆみ「盆行事の地域差―但馬沿岸地方の盆棚―」

小田島建巳（東北大学大学院専門研究員）「山形県における「両墓制」の現在」

その他　各位の調査報告等情報交換

第３回研究会　日時：平成24年11月10日（土）　場所：東京ガーデンパレス

研究発表

鈴木　通大（実践女子大学非常勤講師）

「神奈川県の葬送墓制の習俗の変化について―大和市域を中心に―」

金田　久璋（敦賀大学元非常勤講師）

「十三年後の今起きていること―福井県三方郡美浜町菅浜の葬送墓制の変化―」

福澤　昭司（松本市立田川小学校校長）

「松本市における最近の葬儀の変化について」

その他　各位の調査報告等情報交換

第４回研究会　日時：平成24年12月21日（金）　場所：東京ガーデンパレス

『研究報告』（特集号）編集打ち合わせ

〔調査〕

共同研究員各位によるフィールドワークにより，各地の葬送・墓制の変化についての資料情報が蓄積されている。

４．今年度の研究成果

2012年度は共同研究の第３年目であり，共同研究員各位が葬送墓制の変化に関する民俗調査を継続して行ない，研究会においては各地の葬送墓制の変化の実態に関する情報共有と意見交換を行なった。

葬儀社の関与と葬儀の場の変化（自宅から葬祭場の利用へ）によって，葬送儀礼の省略化が進んだことはこれまでも指摘されてきたことであったが，岩手県北上市，三重県志摩地方，香川県，高知県，神奈川県大和市，福井県，長野県松本市の各報告者からも葬送儀礼の簡略化，消滅の実態と墓制の変化について具体的な報告がなされた。なかでも比較的近年まで土葬が行なわれてきた地域における火葬への変化とそれに伴う葬送墓制の習俗の変化が注目された。

たとえばその一部を記せば以下のとおりである。香川県旧詫間町（現三豊市詫間）では昭和55年（1980）に年金積立金還元融資によって香田火葬場が建設され，また，平成11年（1999）に葬祭場が建設されるとその頃から郡部にも急速に葬祭場を利用するケースが増加していった。このような葬儀の変化が確認された一方，ヤママイリ（イヤダニマイリ）と呼ばれる伝統的な魂送りの習俗は「濃厚に実施」されていることが注目される。詫間町は両墓制の地域であり，遺骸の埋葬地点には海の自然石を置いて目印にし，石塔墓地は檀家寺に設けられていたが，埋葬墓地においても昭和50～60年代（1975～1985）にハカジルシと呼ばれる小型の石塔（俗名を記す）建立が一気に広まった。火葬になった当初は土葬のころと同じくイガキをめぐらすなど墓上装置がみられたものの，火葬に慣れてきた現在では墓上装置はみられない。

高知県日高村本郷では近年まで土葬が行なわれ，また自宅で葬儀が行なわれてきたが，平成21年（2009）以降火葬のケースが，また平成23年の葬儀では葬儀社の会館が利用された。土葬から火葬へ，自宅葬から葬儀社利用への葬儀の変化により，明らかにトーマ組（近隣）の手伝いが必要なくなり，葬送儀礼も省略されていく，墓地も山の上から自宅近くに移して納骨堂式の石塔を建立する，など大きな変化が指摘された。四十九日に一升餅を49個に切り分けて「山」（墓地）から帰ってきた人に包丁の先に刺して配られていたが，平成21年の火葬になってからはサイコロのように切った餅をお返しに渡すようになり，包丁で刺すようなことはしなくなった。死者の霊との食い別れの儀礼は継承されているものの，わざわざ魔除けの刃物を用いるというその所作の意味は継承されていないことが注目される。

また，福井県三方郡美浜町では，平成11年（1999）に敦賀市に葬祭場が開業するとほとんどの家が葬儀社で通夜と葬儀と告別式を行なうようになった（耳川上流の山峡にある集落以外ほとんどすべてが葬儀社に依

存)。極端な変化がおこったその背景に，婚姻圏の拡大，家の改築に伴い広い座敷がなくなったこと，女性の発言力の増大によりダイドコロマカナイが敬遠されたことなどが指摘され,「お金次第で一切を代行してくれる葬儀社に一任する」ことになったとの指摘がなされた。

以上のように，比較的遅くまで土葬と自宅葬が行なわれていた各地でも，火葬と葬儀社での葬儀によって，前回の本館の資料調査以降一気に葬儀の簡略化が進んだことが確認される。

このほか昨年度に続き，但馬地方の盆行事を中心に盆棚の地域差をめぐる問題の提起など，日本列島全体を俯瞰して民俗の地域差とその傾向性をとらえる試みが紹介された。

５．全期間の研究成果

今回，1997年度・98年度の「死・葬送・墓制の変容についての資料調査」から，10年余りを経ての追跡調査の結果について，北海道・東北地方，関東・甲信越地方，中部・東海地方，近畿地方，中国・四国地方，九州・沖縄地方より，共同研究員および研究協力者による調査報告が積み重ねられ，情報の共有がはかられた。1997・98年の調査者へ広く追跡調査を打診したが，調査地の当時の話者の高齢化や死亡によりすでに協力が得られなくなっているケースや調査者自身の高齢化や状況の変化によって調査遂行が困難なケースもあった。このことは民俗の追跡調査における10年の年月の長さを痛感させるものでもあった。そのような調査地については次世代の研究者が調査を行なうこととした。そして，各地の調査報告から具体的にいくつかの注目点が確認された。

第一に，これまでの葬送・墓制の変化に関する研究でも指摘されてきていることではあるが，土葬習俗の消滅から公営火葬場の利用へ，自宅葬から葬祭場の利用へという葬儀の場所の変化と葬送儀礼の省略・消滅，そしてとくに抵抗感のないままの骨葬の一般化，また従来石塔を建てることのなかった地域での新たな石塔墓地の設営など，葬送習俗をめぐる大変化が起こってきていることが各地の事例からあらためて確認することができた。

第二に，このような葬送儀礼の省略化のなかでも固い伝承を維持しているものが注目された。それは，湯灌へのこだわり（北海道帯広市，愛知県春日井市の報告）や真宗門徒の葬儀への協力が希薄になるなかでその講中によるオトキ（お斎）の継続（広島県旧千代田町の報告），寺送りや魂送りの習俗の継続（栃木県芳賀郡，秋田県山本郡，香川県などの報告）などである。

第三に,「土葬から火葬へ」の変化の起こり方の地域差への注目である。たとえば，以下の点などが注目された。

近年まで土葬が行なわれていた地域の例　1997・98年の調査では平成２年（1990）になっても土葬が行なわれていた地区が６事例（58事例のうち）あった。そのうち，高知県日高村本郷の追跡調査では平成21年（2009）に初めて火葬が行なわれ，それに伴い，山を登ったところに立地していた墓地から自宅のすぐ近くに石塔を建立し墓地の設営がなされたことがわかった。また，滋賀県甲賀郡の追跡調査では平成13年（2001）４月１日から郡内の全町村が一斉に甲賀斎苑（広域斎場で同年４月１日より始動）を利用することになり，それまで行なわれていた土葬を中止し，全戸が火葬へと変わった。前者は各家の判断で火葬が選択された例で他の地域においても広くみられるものであるが，後者は村としていっせいに土葬を禁止して火葬へと変化した例であり，その決定の仕方に地域差が見出され，その背景調査の必要性が浮上している。そして，この両事例ともまだ基本的には自宅での葬儀が行なわれており，葬送儀礼も野辺送りの習俗は省略されているもののそ

の他の儀礼は比較的継続されている。土葬から火葬への変化と葬儀の場所の変化は必ずしも直接は連動しておらず過渡期のケースと位置づけられる。

「骨葬」の２つの意味　土葬から火葬へという変化は，公営火葬場の新設や改築のほか，家族形態の変化（高齢者夫婦や一人暮らし，跡取り世代がいない），新たな石塔建立への動き（納骨），などが関連している。その変化のなかで，過渡期のケースでは，死亡から通夜，葬儀（告別式），火葬，納骨までの順番が多様で混乱している現状が報告され（これについては静岡県裾野市，栃木県市貝町ほか），やがて「火葬に慣れてくる」と葬送儀礼の省略・消滅がおこってきているという動向が注目される。このような近年の変化とは別に，もう一つ古い時代，昭和30年代中ごろまでに土葬から火葬へ変化した地域の例において注目されるのは，葬儀より先に遺体を火葬してしまうことによって，葬式，野辺送り，墓地への埋葬，魂送りまで一連の葬送の儀礼を従来の土葬時代と同じく行なっている東北地方の秋田県や青森県の事例である。現在では葬儀より先に遺体を火葬にして,」その焼骨で葬儀を行なういわゆる「骨葬」が各地の都市部を中心に盛んに行なわれるようになってきているが，それらと秋田県や青森県などいわば「骨葬」の先進地域との違いは，先進地域では野辺送りと魂送りを含めた一連の葬送儀礼を維持するために骨葬が選択されたのに対し，近年の各地の都市部の例は公営火葬場の予約が優先されるという現実，霊魂の処遇よりもまずは遺骸の処理を最優先にするという考え方に合致する方法として広まっているものといえる。

第四に，民俗学がその主要な調査研究対象としてきた両墓制の変化，消滅への動きである。土葬から火葬へと変化した現在，遺骸を埋葬するサンマイ利用が大きく変わってきた。サンマイに焼骨を埋葬し，寺院境内などにある石塔墓地はそのまま維持しているケース，サンマイに石塔を建立して墓地（霊園）として利用するケース，寺境内などにある石塔墓地をカロート式のものに建立し直すケース，などがみられる。滋賀県竜王町の事例では，公営火葬場の建設による，伝統的なサンマイへの土葬から新たな公営火葬場での火葬へという遺体処理の変化にともなって，村ごとに遺骨納骨のための新たな石塔墓地の造成が行なわれた（平成17年から19年)。そこでは，近代以降，浸透してきていた死穢忌避観念の希薄化が一気に加速していることが注目された。

第五に，各地に伝承されている葬送・墓制に関する民俗とその分布をめぐる問題である。たとえば，四国地方の巳正月，盆棚の地域差をめぐる問題，など，日本列島全体を俯瞰して，民俗の地域差とその傾向性をとらえる試みがなされた。比較研究法の活用についてはその実践方法が未熟な段階にあるため，さらに地域差の解読の仕方について生産的に議論していく必要があることが確認された。

第六に，共同研究に関連して刊行された主な論文，資料集等は以下の通りである。

『基幹研究「高度経済成長とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する調査研究」2010年度研究会記録』国立歴史民俗博物館（簡易製本)，2011年，95ページ（2010年度に行なわれた研究発表の要旨と質疑応答を編集)。

基幹研究「高度経済成長とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する調査研究」『葬墓制関係写真資料集１』国立歴史民俗博物館（簡易製本)，2012年，190ページ（両墓制に関する現場情報を写真データを中心として，昭和40年代から50年代にかけて，近畿地方から始めて東西日本各地で収集された伝承情報を整理し，写真データに解題（新谷尚紀）をつけて編集)。

関沢まゆみ「土葬から火葬へ―火葬の普及とサンマイ利用の変化：滋賀県下の事例より―」『民俗学論叢』26 2011年，p23-44

大本敬久「正月と死者祭祀―民俗と歴史―」『民具マンスリー』10月号　2011年，p9-24
倉石あつ子「葬儀の拡大化と縮小化―長野県松本市郊外の農家の『音信帳』から―」『跡見学園女子大学人文学フォーラム』10　2012年，p67-88
鈴木岩弓「東日本大震災時の土葬選択にみる死者観念」座小田豊・尾崎彰宏編『今を生きる―東日本大震災から明日へ！復興と再生への提言―』１人間として　東北大学出版会　2012年，p103-121
武井基晃「民俗の変容の中で続くものの意味―岩手県北上市の葬送の手伝いと儀礼―」『東北民俗』46　2012年，p45-52
関沢まゆみ「「戦後民俗学の認識論批判」と比較研究法の可能性―盆行事の地域差とその意味の解読への試み―」『国立歴史民俗博物館研究報告』178　2013年，p203-236，など。
なお，本共同研究の成果については，『研究報告』（特集号）にまとめ，2014年度に刊行する予定である。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

大本　敬久　愛媛県歴史文化博物館・専門学芸員
菊池　健策　文化庁文化財部伝統文化課・主任文化財調査官
倉石あつ子　跡見学園女子大学文学部・教授
新谷　尚紀　國學院大學大学院・教授
鈴木　岩弓　東北大学大学院・教授
武井　基晃　筑波大学大学院人文社会科学研究科・助教
西村　　明　鹿児島大学法文学部・准教授
米田　　実　甲賀市教育委員会歴史文化財課・市史編さん室係長
小池　淳一　本館研究部・教授　　常光　　徹　本館研究部・教授
○山田　慎也　本館研究部・准教授　　◎関沢まゆみ　本館研究部・教授

（３）「東アジアの宗教をめぐる交流と変容」2012～2014年度
（研究代表者　松尾　恒一）

１．目　的

古代以来の長期にわたっての漢字の使用，仏教・儒教の大きな影響を受けた精神文化といった点で大きな共通性を有する東アジアの宗教をテーマとして，文献のみならず，埋蔵資料・伝承資料に基づいて，その歴史と，民衆文化として変容・定着をして現在に続く様相を考究する。日本のみならず，東アジアを専門とする研究者や，欧米からの国際的な関心にも注目した共同研究を行う。

欧米における，日本仏教は現在なお，“禅”に代表されるような，東洋の神秘思想としての側面のイメージが強く，研究においても思想（史）研究が主流となってきた。一方，日本においては，この20年ほどの寺院研究の成果はめざましく，権門寺院についての，朝廷や貴族，幕府と結びついた政治・経済的側面を，鎮護国家の祈願のための儀礼といった実践や，仏教行政や寺僧の組織との関係性にも注目しつつ，多くの実態が解明され，その意義が討議されてきた。また，こうした研究とともに，仏教の実践としての儀礼や，儀礼と深くかかわりをもって展開，形成された音楽・舞踊，絵画，口承等の諸文化や，あるいは修験道・陰陽道・

神道等，仏教と深くかかわった日本宗教についての研究も大きな進展を見ている。

仏教と関わった日本の民衆文化研究の大きな潮流としては，戦前からの民俗学による漂泊の芸能者による唱導の研究や，その流れをも汲む，日本文学における，中世の語りの起源を寺院における儀礼に探ろうとする研究等があるが，美術史における仏教絵画研究や，建築史学からの儀礼空間としての特質を追及する仏堂研究をも統合して新たな「唱導」概念を打ち立てたり，あるいは「法会文芸」なる枠組みを設定しようとしたりする動向が存する。

また，変容を遂げつつも，時代を超えて現在に継続する宗教的な諸現象を「宗教遺産」として認め，現代における価値や意義を見出そうとする文化研究も立ち現われている。

こうした，民俗的な宗教についての新たな研究動向とも連携しつつ，国際的な日本，及び東アジアの伝統宗教や信仰への関心にも応え得る共同研究を推進することを目標とする。

欧米や東アジアの研究者との，それぞれの視点からの共同研究を推進しつつ，宗教を含む精神文化や、その表象が，国や地域を超えて伝播，錯綜する，現代における信仰や神仏の問題を考える基盤の構築にもつなげてゆきたい。

２．今年度の研究経過

下記３回の共同研究会を中心とする共同研究を実施し，また，2007年度制作の民俗研究映像「薬師寺花会式」中国語版（簡体字版／繁体字版）の制作を広島大学敦煌学研究センターの協力を得て行った。

第１回　共同研究会　７月13～15日

共同研究会として，歴博国際研究集会「東アジアの仏教をめぐる交流と変容」を，京都府立大学において開催した。あわせて，修験や農耕祈願の芸能等，日本の民俗宗教としての特質が濃厚に見られる，熊野那智火祭り，及び熊野本宮・巡礼地として熊野古道の共同調査を行った。

研究集会の内容・成果については，別項国際研究集会「東アジアの仏教をめぐる交流と変容」(201頁)参照。

第２回　共同研究会　名古屋大学比較人文学先端研究との共催で，名古屋大学において研究集会「中世音楽・音声の世界像」を12月21日～23日に行った。共同研究メンバーの発表は下記の通り。

M・ジャメンツ「宗性書写『普賢講式』をめぐって」

松尾恒一「歴博民俗研究映像『比婆荒神神楽―地域と信仰―』上映と解説」

コメント：ブライアン・ルパート

第３回　共同研究会　敦煌学プロジェクト研究センターとの共催により明海大学において「東アジア宗教文献国際研究集会」を３月16日～17日に開催した。共同研究メンバーの発表は下記の通り。

松尾恒一「冥界をめぐる日本の祭儀と芸能―神楽の歴史と伝承を中心として―」

荒見泰史「敦煌本十齋日資料と十王經」

コメント：上島享

３．今年度の研究成果

本共同研究は，文献のみならず，埋蔵資料・伝承資料に基づいて，その歴史と，民衆文化として変容・定着をして現在に続く様相を考究する。伝承資料として，これまで蓄積・制作してきた研究映像の外国語版の

として，広島大学・敦煌学プロジェクト研究センター（2010～）の協力を得て「薬師寺花会式」中国語版（簡体字版／繁体字版）の制作，英語版は制作済み）の制作をも行って，国外の研究者との共有が難しい，音・声・身体所作等の伝承についての議論を進める基盤作りを実現した。これは，これまでの映像資料の収集・蓄積を土台として，国際的な枠組みでの共同研究へと発展させるための整備で，歴博の目指す博物館型研究統合の活動を推進するための成果としても特筆される。

さらに，科研「人類の思想的営みとしての宗教遺産の形成に関する総合的研究―宗教遺産学の構築へ―」（上島享京都府立大学准教授代表）や，中国・中山大学〈中国非物質文化遺産研究センター〉との連携による，現在への有形・無形の伝承を建築・美術や，民俗資料としてのみならず，宗教遺産としての面からの研究をも推進した。

本共同研究は，米国イリノイ大学との研究交流協定とかかわってイリノイ大学ほか，欧米の研究者も共同研究員として加わる。また，科研「中世宗教テクスト体系の綜合的研究―寺院経蔵聖教と儀礼図像の統合―」（代表：名古屋大学・阿部泰郎），「人類の思想的営みとしての宗教遺産の形成に関する総合的研究」や，ロンドン大学SOAS，広島大学敦煌学プロジェクト研究センター等との相互協力をおこなって，日本と東アジアの宗教研究者，及び，欧米の研究者とともに，仏教を中心とする日本の宗教文化を国際的な視点から研究を推進した。

特に第１回共同研究会は，イリノイ大学を中心とするアメリカ・イギリスの研究者とともに国際研究集会を開催したが，予稿集は，日英両国語の収載の冊子を作成し，欧米への研究者への発信にも寄与した。

第３回は共同研究会は，地獄・極楽思想をテーマとして，仏教研究の進んでいる台湾の研究者（鄭阿財（南華大學）・朱鳳玉（嘉義大學）・何劍平（四川大學）・楊明璋（國立政治大學）・周西波（嘉義大學）・劉惠萍（東華大學），他）とともに国際研究集会を実施したが，日本・台湾，及び韓国の研究者（尹光鳳広島大学名誉教授）の発表と活発な討議が行われ，仏教が，その起源となるインドを含め，アジアにおける伝播と地域的変容といった観点より，大きな意義があるテーマであることが再認識され，国際的な研究集会として大きな成果，研究の進展が実感できる研究集会であった。

なお，共同研究会開催のために，上記科研や研究機関からも出張費等、必要経費を支出し，歴博との相互協力のもとに本共同研究を推進した。

４．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

Ronald Toby	イリノイ大学東アジア言語文化学部・教授
Alexander Mayer	イリノイ大学東アジア言語文化学部・准教授
Brian Ruppert	イリノイ大学東アジア言語文化学部・教授
Elizabeth Oyler	イリノイ大学東アジア言語文化学部・教授
Hank Glassman	ハアヴァフォード大学東アジア研究学部・准教授
Lucia Dolce	ロンドン大学人文学部　SOAS日本宗教文化研究所・所長／准教授
康保成	中国中山大学中国語学科・教授／中国非物質文化遺産研究センター・主任
王宵氷	中国中山大学中国語学科・教授／中国非物質文化遺産研究センター
阿部泰郎	名古屋大学大学院文学研究科・教授
近本謙介	筑波大学大学院人文社会科学研究科・准教授

荒見泰史　　広島大学大学院総合科学研究科（敦煌学研究センター長）・教授
上島　享　　京都府立大学文学部・准教授
大東敬明　　國學院大學研究開発推進機構・助教
久野俊彦　　東洋大学文学部・非常勤講師
Michael E. Jamentz　京都大学・文学部　非常勤講師
村木二郎　　本館研究部・准教授
○小池淳一　　本館研究部・教授
◎松尾恒一　　本館研究部・教授

◇先端博物館構築研究

（１）「デジタル化された歴史研究情報の高度利用に関する研究」
2010～2012年度
（研究代表者　鈴木　卓治）

１．目　的

インターネット時代の到来とともに，近年歴史研究情報のデジタルデータ化が各所で精力的にすすめられている。国立歴史民俗博物館（歴博）はその設立時より他所に先駆けて日本歴史学のデータセンターとしての使命を担っており，データベースれきはくを始め，さまざまな種類の歴史研究情報をデジタル化し，研究・教育・展示への活用につとめているところである。ゆえに，単にデジタル化しただけでは有効な利用が難しい歴史研究情報の，よりよい活用の典型を示すことが，現代における歴博の重要な任務であるといってよい。

本研究は，日々蓄積されていくデジタル化された歴史研究情報をより高度に利用するための基礎となる具体的な研究課題を提示し，課題への解を見いだす過程に人文学的フィードバックをかけることによって，異分野の研究者が集う国立歴史民俗博物館の特色を生かした，意味論と技術論をかみあわせた研究を実施しようとするものである。

本研究では，具体的な研究課題として，「高度情報検索」，「大規模デジタル画像処理」，「デジタル展示」の３つの研究班を設定する。

高度情報検索班は，歴博で公開されているデータベースについて，専門知識に乏しい一般利用者あるいは初学者が所望の情報にたどりつくために必要な技術の開発を目的とする。館蔵資料データベースを具体例として，データに含まれる隠れた相互関係を抽出することにより，関連する概念を連想的にたどりながら利用者に提供することのできる利用者インターフェイスについて考える。

大規模デジタル画像管理班では，歴博のデータベースの中に存在する，数万枚～数十万枚の大量の画像データが付与されたデータベース，しかもデータ１件あたりに数百枚の画像が付与されている場合を含むような事例について，利用者が所望の画像を獲得することが極めて困難な状況が生ずることから，これを解決するための方法について検討を行う。

デジタル展示班では，高精度に計測された歴史資料のデジタルデータを永続的に保存し活用しようとするデジタルアーカイブの活動が近年盛んになってきていることをふまえ，数値として保存されるデジタルデー

タをどのように提示すれば利用者がより歴史資料への正しい理解を深めることができるかを検討し，必要な基礎技術の開発を行う。実際に試作を行って利用者の評価を受ける形で研究をすすめる。また，近年急速に技術開発が進んだ，タブレット端末や，ゲームコンピュータのコントローラや簡易モーションキャプチャ装置について，博物館展示への応用の可能性を調査する。

なお，当初計画で予定していた「利用者分析班」は，大規模デジタル画像管理班に組込み，管理手法の妥当性の検証の研究として実施することとした。

2012年度における研究班の構成は以下の通りである。ただし，これは固定的なものではなく，研究の進捗やディスカッション等を経て，プロジェクト内で活発に相互交流を行う。

高度情報検索班：小町，山田，仁藤，安達；大規模デジタル画像管理班：徳永，津田，青山，安達，鈴木；デジタル展示班：田中，村田，北村，大久保，鈴木。

２．今年度の研究計画

高度情報検索班については，館蔵資料データベースの記述をデータとして，関連語の抽出ならびにその適合性について評価する研究を行なっているが，考古，民俗のデータに加えて，歴史のデータについても対象に加えて研究をすすめる。

大規模デジタル画像管理班については，石井實フォトライブラリー閲覧システムの利用記録の分析結果をもとに，大規模画像管理提供方法についての考察をすすめ，成果をまとめる。

デジタル展示班については，これまでの研究成果を踏まえて，今年度夏に開催される企画展示「楽器は語る」ならびに秋に開催される企画展示「行列にみる近世」における来館者向け情報コンテンツを制作し利用に供する。とくにスマートフォンを利用した来館者向け情報コンテンツの提供を試みる。

３．今年度の研究経過

全体

・全体研究会を２回開催した（12月27日，３月13日）。

高度情報検索班

・分科会を６回実施した（４月27日，７月19日，11月15日，１月9日，２月６日，３月23日）。
・画像電子学会第40回年次大会にて研究発表1件を行った（６月23日）。
・画像電子学会第10回画像ミュージアム研究会にて研究発表１件を行った（３月１日）。

大規模デジタル画像管理班

・分科会を１回実施した（７月24日）。
・情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会第95回研究発表会にて研究発表１件を行った（８月４日）。
・情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウム 「じんもんこん2012」にて研究発表１件を行った（11月17日）。
・画像電子学会第10回画像ミュージアム研究会にて研究発表２件を行った（３月１日）。

デジタル展示班

・３月24日～４月８日までデジタル展示試験公開を実施した（開館14日間）。
・日本色彩学会視覚情報基礎研究会第12回研究発表会において研究発表１件を行った（６月23日）。

・企画展示「楽器は語る」（７月10日～９月３日）にて，４種類の情報コンテンツを制作して来館者に供するとともに，スマートフォンを用いた展示案内の実験を実施した。
・企画展示「行列にみる近世」（10月16日～12月９日）にて，スマートフォンを用いた展示案内の実験を実施した。
・画像電子学会第10回画像ミュージアム研究会にて研究発表１件を行った（３月１日）。

４．今年度の研究成果

今年度は，これまでの研究成果を学会の研究会等で計８件発表することができた。

高度情報検索班にあっては，本年度は，研究分野の異なる語を混在させたときの，関連語検索に与える影響と効果についての評価を中心に行った。相互の到達を目的としないのであれば，混在させない方がよいが，混在させても到達容易性への影響は低いことが明らかとなった。この成果を学会の研究会（６月，３月）で発表した。

大規模デジタル画像管理班にあっては，本年度は，石井實フォトライブラリー閲覧システムの利用記録の分析を進めた。その結果，フィルム選択画面の表示しうる代表画像数が多い方が，写真選択までの平均操作数が少なくなることから，全体としての写真の閲覧の比率が高くなること，フィルムおよび写真の選択画面では，左上の画像の選択率が最も高く，右方向の並びに沿って低くなり，次の行に移るとさらに低くなるように閲覧されることが明らかになった。また，時間と場所では，場所を手掛かりに写真を探す利用が多いことが判明した。この成果を学会の研究会（３月）で発表した。

大規模デジタル画像管理班に属する公募研究者の津田光弘（イパレット）は，画像資料へのマーカ（電子付箋，アノテーション）を従来の概念から拡張した２種類の研究を実施し，今年度は３件の研究発表（８月，11月，３月）を行った。（５．を参照。）

デジタル展示班にあっては，昨年度末から今年度当初にかけて実施したデジタル展示試験公開について，学会の研究会（６月）で発表した。また，企画展示「楽器は語る」および「行列にみる近世」において，情報コンテンツの制作と提供，ならびにスマートフォンを用いた展示案内の実験を実施し，その成果を学会の研究会（３月）で発表した。なお，年度末に第１試作の試験公開の結果をふまえた第２試作の試験公開を実施する予定であったが，都合により実施できなかった。また，2011年度に開発した大型タッチパネル装置を用いて，それぞれのコンテンツにふさわしいタッチパネルの設置方法について，企画展示での利用を検討したが，達成できなかった。

デジタル画像班に属する公募研究者の北村啓子（国文学研究資料館）は，国文学研究資料館の資料展示に供するデジタルコンテンツの制作に取り組み，今年度は３件のデジタルコンテンツを制作した。（５．を参照。）

５．３年間を通じての成果

全体

2011年３月11日に発生した東日本大震災の影響で，３月17日に計画していた研究会の中止を余儀なくされるなど，共同研究の進行に少なからず影響が出たことは否めないが，各研究班はそれぞれ努力を重ね，計画以上の研究成果を挙げることができたと考える。とくに，本基盤研究の期間中に計20件の研究発表を行うことができたことは誇れる成果である。（６．を参照。）

2011年度末には，各研究班の研究成果の中間報告を行う場としての公開研究会を，画像電子学会画像ミュージアム研究会（主査：小町裕史）との共同開催の形で実施することができた。公開研究会では９件の研究発表（うち本基盤研究に関連する発表は５件であった）が行われ，本共同研究にとっても，共同開催を行った画像ミュージアム研究会にとっても実りある研究集会となった。

また，本研究の成果物が直接企画展示に利用されたことも特筆される。2011年度には，大規模デジタル画像管理班が制作した石井實フォトライブラリー閲覧システムが，本館企画展示「風景の記録」（2011年11月８日～2012年１月15日）に出展された。また，2012年度には，デジタル展示班が制作した情報コンテンツが本館企画展示「楽器は語る」（2012年７月10日～９月２日）に出展され，さらに「楽器は語る」ならびに本館企画展示「行列にみる近世」（2012年10月16日～12月９日）にて，スマートフォンを用いた来館者向け情報提供を（実験の形で）実施した。

なお，本研究の成果は，国立歴史民俗博物館研究報告の特集号にまとめる計画である。

高度情報検索班

歴史民俗資料の名称は専門的な用語が付与されていることが多い。このため，資料情報がデータベース化され公開されていても，研究者が関連分野の資料を検索したり，一般の利用者が検索しようとしても，ほとんど辿り着けない資料が存在し得ることになる。そこで，比較的平易な語から出発して，専門的な資料名称に到達できる高度な検索手段について検討を進めた。

歴博の館蔵資料がコレクション単位で管理されていること，そしてコレクションの中が階層的にグループ化されたツリー状の構造を有していることに着目した。同一のコレクションあるいはグループに属する語は関連性があると見なして，文章中の語の共起における関連度の算出法に倣い，資料名称間の関連度を求めた。但し，資料名称そのものではなく，資料名称より抽出した主要語を対象とした。

関連語検索として次の方法を想定する。ある語の関連語を関連度の高い順に提示する。その中のある語を選ぶと，その語の関連語を提示する。この方法により，平易な語から専門的な語に到達することができる。このとき，コレクション中のツリー構造は利用せずコレクションに含まれる語の共起関係だけを利用する方法，逆に，ツリーの末端のグループでの共起だけを利用する方法，および，これらの中間のツリー構造を利用する方法について，平易な語から到達して欲しい専門語への到達容易性について評価を行った。ツリー構造を利用する方法が到達容易性が高い結果を得た。さらに，研究分野の異なる語を混在させたときの，関連語検索に与える影響と効果についての評価を中心に行ったところ，相互の到達を目的としないのであれば，混在させない方がよいが，混在させても到達容易性への影響は低いことが明らかとなった。

大規模デジタル画像管理班

博物館で所蔵する資料の中には，千あるいは万の単位の資料から構成される資料群がある。このような資料群の大量の画像を展示あるいはネットワークを介して公開するには，分かりやすい提示方法を確立する必要がある。本共同研究では，地理学者であった石井實が戦後全国各地の風景を撮りためた30万枚を超えるフォトライブラリーのうち，デジタル化された34,000枚の写真を対象として，画像提示システムを構成した。これを歴博の企画展示「風景の記録―写真資料を考える―」（2011年11月～2012年１月）で公開し，その際に収集した利用記録を分析することにより，画像提示法の評価を行った。

石井實フォトライブラリーの各写真には，撮影日時と撮影地の記録が残されている。そこで，時間と場所の情報を基に写真を探し出すシステムを構成した。写真の数が大量であることに加え，時間と場所に関して

石井實フォトライブラリー閲覧システムの画面

均一でないことが提示上の課題となる。探索した結果として，フィルムをその代表画像を基に選択し，その中から写真を選択して閲覧する。探索は，時間であれば年，月，場所は地方，都道府県，市区町村，地区と絞り込むことができる。フィルムの代表画像を表示し得る数になったときに，フィルム選択画面を表示する。この数が多いと，代表画像が小さくなるが，探索の操作が平均的に少なくて済む。フィルムの代表画像を画面上にどの程度多く提示できるかが課題となる。また，提示位置が選択される率に影響するかを明らかにする必要がある。提示法の比較ができるよう企画展示の前半と後半で方法を変えて利用記録を収集した。この利用記録を分析したところ，フィルム選択画面の表示しうる代表画像数が多い方が，写真選択までの平均操作数が少なくなることから，全体としての写真の閲覧の比率が高くなること，フィルムおよび写真の選択画面では，左上の画像の選択率が最も高く，右方向の並びに沿って低くなり，次の行に移るとさらに低くなるように閲覧されることが明らかになった。また，時間と場所では，場所を手掛かりに写真を探す利用が多いことが判明した。

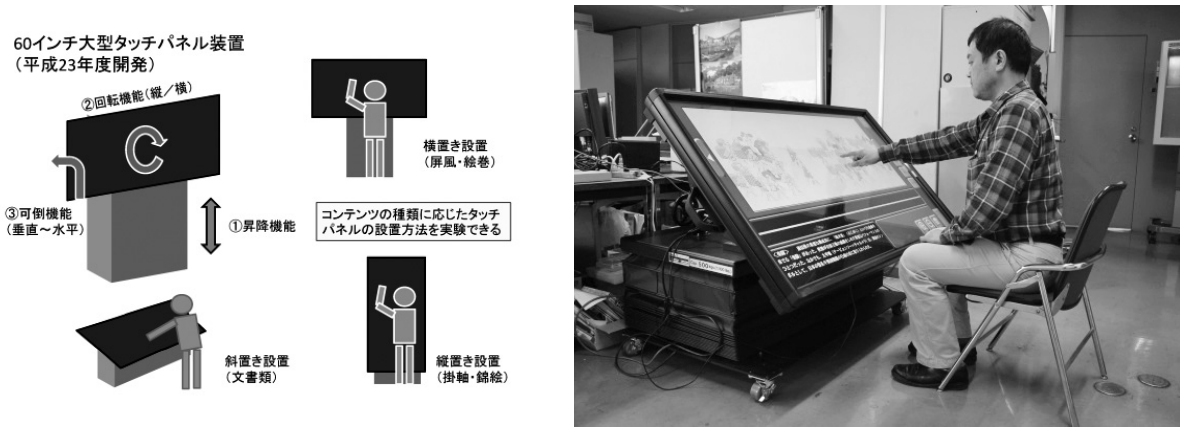
津田光弘（公募研究者，大規模デジタル画像管理班）

画像資料へのマーカ（電子付箋，アノテーション）を従来の概念から拡張した２種類の研究を行った。

ひとつは，古文書や版本等の古典画像資料の背後に，文字の流れに沿った透明なマーカを付けて，PCやタブレット等で画像のまま文字箇所の選択が行える仕組みである。この仮想的な文字の流れの概念を「テキスト動線」と新しく定義し，そのデータ構造とユーザインタフェース「Vein（ベイン，静脈の意味）」も設計した。これらの理論をHTML5技術で実装して，実際の資料で可能性検証を行った。

もうひとつは，写真アルバムや切り貼り帖などの集合的な画像資料に潜む階層構造を分離・再編集する目的で，マーカを用いた仮想表示環境を開発した。四角形とポリゴンで囲んだ箇所を資料から切り取り別の資料のように扱うことができる。分割画像を用いた非常に大きな画像についても対応でき，分離箇所の組み合わせのシミュレーションもこれらの仮想画像によって実現できることを検証した。

以上はいずれも画像資料の詳細な研究や，展示・公開，教育等の目的に応用できるものであり，また，タブレット等のタッチ操作機器やHTML5といった今後の技術動向に沿ったものである。



60インチ大型タッチパネル付ディスプレイ実験装置

デジタル展示班

a. 大型タッチパネルつきディスプレイ実験装置の開発

2011年度に，60インチ大型タッチパネル付ディスプレイ実験装置を開発した。この装置は，画面の昇降，回転（縦／横），および傾き（垂直～水平）を自由に変えることができる。たとえば，文章や絵巻のような横に長いコンテンツでは，画面を斜めに設置することで，利用者が座って資料を閲覧することができる。実際の企画展示に応用するには，ディスプレイの機械的強度や設置方法などの課題が残るが，より「人間側に寄り添った」デジタル展示を考えるきっかけのひとつとしたい。

b. デジタルアーカイブ資料の展示に関する公開実験

人類共通の財産としての文化財資料は，長く後世に受け継いでいくための保存と，資料の価値を保つための積極的な活用とを両立させなければならない。本基盤研究では，デジタル技術で記録された資料の情報（デジタルアーカイブ資料）を，屋内・屋外等のさまざまな環境下で，色彩のみならず陰影や光沢まで含めて正確に3DCG画像として再現する研究（田中法博による）をベースに，長野県埴科郡（はにしなぐん）坂城町（さかきまち）の刀匠が制作した小刀（脇差）のデジタル計測データを用い，この資料をどのようなシチュエーションのもとで閲覧するのがふさわしいかについて，博物館の視点から検討を行った。2012年２月23，24日の２日間にわたって，東京国立博物館の庭園（２か所），転合庵（茶室）の前庭，および応挙館（書院）内部の計４か所について，魚眼レンズとデジタルカメラによる全方位画像撮影・照明環境計測を行った。さらに，利用者が背景となる環境を切り替えながら自由な角度から資料を閲覧できるデジタル展示システムを試作した。やさしい操作方法の開発をめざして，ゲーム機のコントローラとして知られているMicrosoft社製のKinectを用い，ゼスチャーによって，利用者の視点，表示の拡大縮小，および背景環境の切り替えを指示するようにした。

2012年３月24日から４月８日までの16日間にわたり，歴博のエントランスホールにてデジタル展示試験公開を実施した。ゼスチャーによる操作は好評であった。ゲーム等で慣れている来館者は，こちらの説明がなくても，自分の動きとシステムの動きの関係を理解し，システムを操作することができた。また，Kinectを知らない来館者でも，他の来館者が操作しているようすを観察することで，自然に操作方法を理解できるようになった場合もあった。3DCG再現された画像については，まわりの風景の映り込みを瞬時に計算して出力

東京国立博物館応挙館（書院）における全方位画像撮影・照明環境計測のようす

デジタル展示試験公開のようす

していることが評価される一方,「なぜ刀が宙に浮いているのか」など，画面に再現された画像の“意味付け”にとまどう声が聞かれた。実世界の撮影画像と遜色のない品質の画像が再現されることによって，何をどのように示すべきか，という展示本来の目的を達成するためのハードルもまた高くなる，ということにあらためて気付かされた。

c．企画展示「楽器は語る」における音声コンテンツの開発

企画展示「楽器は語る」(2012年７月10日～９月２日）のために，一般来館者向けの情報コンテンツを制作した。現代人にとって雅楽などの伝統音楽は決して馴染み深いものとはいえない。また，伝世した楽器がかつて奏でた実際の音色を，現代のわれわれは聞くことができない。そこで，古の音楽についての理解を深め親しんでもらうことを目指して，雅楽の音をいかに来館者に伝えるかを課題として取り組んだ。コンテンツの内容は，企画展示の準備を行なう展示プロジェクトチームで検討し，下記の５つとなった。

・比べてみよう　音の高さが変わると雰囲気も変わる？
・歌われる楽譜「唱歌（しょうが)」
・笙のハーモニーを聴いてみよう
・雅楽のリズムパターン　打楽器の打ち方を見てみよう
・各パートの音量を自分で調整　セルフミックス《越殿楽（えてんらく）》

「楽器は語る」で提供された情報コンテンツの画面

このうち，「笙のハーモニーを聴いてみよう」は，日本の伝統楽器の中では和音を奏でる唯一の楽器である笙（しょう）について，17本ある管のうち，音の鳴る15本について，１音ずつ聴くことができるほか，11種類の「合竹」（５～６本の管を同時に鳴らして演奏する和音）を選んでその響きを聴くことができる。また，「セルフミックス《越殿楽(えてんらく)》」では，雅楽の中で比較的よく知られている越殿楽について，各楽器の音量を自由に調整して聴くことができる。それぞれの楽器の音色の違いや，メロディーを奏でる管楽器と周期的に演奏される絃(げん)楽器・打楽器がどのように構成されているかなどを知ることができる。

d. スマートフォンを用いた来館者向け情報提供実験

2010年度に，利用者が館内で利用する携帯型端末についての基礎的な検討を行い，iPad（iOS），nintendo DSi，ThinkPad Tablet（Android OS）等の使い勝手や，アプリケーション開発の可能性などについて調査を実施した。この成果を踏まえて，2012年度企画展示「楽器は語る」ならびに「行列にみる近世」において，来館者が持参したスマートフォン（iOS，Androidを想定）向けに，博物館の展示場で，無線LANとWWWを用いてデジタルコンテンツを配信する実験を実施した。

展示場で実施したアンケートでは，10代の女性からの回答がもっとも多かった。スマートフォンの利用に肯定的な意見がある一方，人間的な対応が失われることを懸念する意見もみられた。

今回の実験で，スマートフォンの利用自体は有用であることが確認できた。ただし今回のやり方では，設定作業が難しく，実用化のためには改良と検討が必要である。博物館型研究統合の観点から，（自己負担で）

スマートフォンによる来館者向け情報提供実験の画面

来館者に館内でのインターネット利用を開放することは，検討に値する課題である。展示新構築事業のなかで積極的に議論してよいのではないか。また，女性からの関心が高い，とまではいいきれないが，このような機械がらみの実験で女性の反応がよい，ということは，スマートフォンが社会にどのように受容されつつあるかを垣間見るようで興味深い。

北村啓子（公募研究者，デジタル展示班）

「国文学資料の電子的展示技法に関する研究」をテーマに研究をすすめた。これまで国文学研究資料館の展示で開発してきた約20点のデジタル展示成果物について考察し，歴史的な研究資料をデジタルで展示する場合の資料の形状・見せ方などから錦絵・巻子・書写本・検索のタイプに分類し，それぞれの共通する見せ方を分析して，汎用性の高いデジタル展示のソフトウェア開発を行なうことにより，毎回新たに開発することなく，展示物の撮影写真（・翻刻データ・調査研究データなど）を準備すればデジタル展示のコンテンツが制作できることを明らかにした。その成果を踏まえて，2012年度に以下の３つのデジタルコンテンツを制作した。

- 嵯峨本『方丈記』: 装飾料紙の模様と本紙原本画像から墨書きの文字情報を抜出し，地模様の雲英を強調して原本の模様を浮かび上がらせて装飾料紙を再現した。さらに，その上に墨書きを乗せていくことにより，筆書き（筆跡）のシミュレーションを行った。
- 『扇の草子屏風』: １台のタッチモニタに屏風全体像を表示し，これを入力デバイスとして，屏風に貼られた12枚の料紙を選択する。もう１台の高精細モニタで個々の料紙の高精細画像と描かれた和歌の翻刻も同じように散らし書きにして表示する。2台のモニタに，タッチ入力デバイスと高精細表示との機能を分担させることを実証した。
- 『東海道53駅鉢山図絵』: 展示作品の「東海道53駅鉢山図絵」と有名な歌川広重の「東海道五拾三次」（保永堂版その他）のデジタル画像を53の宿場町ごとに並べて，構図の比較対照をしながら，日本橋から京都までをスライドショウで見せる。軽装な機材Retina ipadに高解像度の画像を入れて，高精細モニタ（2560×1600）を活かした高品質の展示が可能であることを実証した。

６．本研究に関連する研究発表

高度情報検索班（５件）

「博物館情報探索における到達容易性向上のための資料群分割の効果」　山田篤（京都高度技術研究所），安達文夫(国立歴史民俗博物館),小町祐史(大阪工業大学),画像電子学会第９回画像ミュージアム研究会，2011年2月18日，於常翔学園大阪センター。

「博物館情報探索における資料群分割の到達容易性による評価」　山田篤，安達文夫，小町祐史，画像電子学会第39回年次大会，2011年６月25日，於島根県立産業交流会館。

「博物館関連語検索のための木構造を反映した資料群の構成法」　山田篤，安達文夫，小町祐史，画像電子学会第10回画像ミュージアム研究会，2012年３月２日，於国立歴史民俗博物館。(本基盤研究2011年度第２回研究会との共同開催。)

「博物館関連語検索のための資料群構成法の評価」」　山田篤，安達文夫，小町祐史，画像電子学会第40回年次大会，2012年６月23日，於早稲田大学。

「複数のジャンルを対象とした博物館関連語検索」　山田篤，安達文夫，小町祐史，画像電子学会第11回画

像ミュージアム研究会，2013年３月１日，於京都高度技術研究所。

大規模デジタル画像管理班（７件）

「歴史DBの検索インタフェース設計に向けた検索語の分析」　小野田賢人，徳永幸生（芝浦工業大学），杉山精（東京工芸大学），安達文夫（国立歴史民俗博物館），画像電子学会第９回画像ミュージアム研究会，2011年２月18日，於常翔学園大阪センター。

「資料の濃い構造化と活用のためのアノテーションモデル―より知るために，より深く，濃く」　津田光弘（イパレット），画像電子学会第10回画像ミュージアム研究会，2012年３月２日，於国立歴史民俗博物館。（本基盤研究2011年度第２回研究会との共同開催。）

「時間と場所の情報を有する大量の写真画像の提示方法の検討」　田中紀之（芝浦工業大学大学院），徳永幸生，杉山精，安達文夫，同上。

「無名付箋の画像資料への適用方法について」　津田光弘，情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会第95回研究発表会，2012年８月４日，於京都大学地域研究統合情報センター。

「画像文字選択のための『テキスト動線』編集・利用システム―Sijima」　津田光弘，情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2012」，2012年11月17日，於北海道大学。

「時間と場所の情報で配置した大量の写真画像提示における利用特性の分析」　田中紀之，徳永幸生，杉山精，安達文夫，画像電子学会第11回画像ミュージアム研究会，2013年３月１日，於京都高度技術研究所。

「画像資料の活用を目的とした隠れマーカの利用インタフェースと事例」　津田光弘，同上。

デジタル展示班（８件）

「GPUを用いたマルチプラットフォーム型の分光レンダリングシステム」　戸谷重幸，林一成（長野大学），望月宏祐（信州大学大学院），田中法博，禹在勇（長野大学），第４回色彩情報シンポジウムin長野2010，2010年11月６日，於長野大学。

「Wiiリモコンを用いたデジタルアーカイブのためのユーザインタフェイスの開発」　○林　一成，望月宏祐，田中法博，禹在勇，三浦幹彦，森川英明（信州大学大学院），同上。

「分光ベースレンダリングを用いた複合現実感技術」　○宮下朋也，権田一樹，鈴木雅也，斧尭弘（長野大学），田中法博，禹在勇，同上。

「PowerPointを用いた外部機器との連携をともなう展示用電子コンテンツの作成事例」　鈴木卓治（国立歴史民俗博物館），画像電子学会第９回画像ミュージアム研究会，2011年２月18日，於常翔学園大阪センター。

「国文学資料の電子的展示技法に関する研究―デジタル展示の開発効率向上のために―」　北村啓子（国文学研究資料館），画像電子学会第10回画像ミュージアム研究会，2012年３月２日，於国立歴史民俗博物館。（本基盤研究2011年度第２回研究会との共同開催。）

「デジタルアーカイブ用文化財展示システムの試作」　宮下朋也，田中法博，望月宏祐，村田良二（東京国立博物館），鈴木卓治，同上。

「有形文化財のデジタル展示システムの試作」　望月宏祐，田中法博，宮下朋也，村田良二，鈴木卓治，森川英明，日本色彩学会視覚情報基礎研究会第12回研究発表会，2012年６月23日，於東京塗料会館。

「博物館企画展示のための音声コンテンツの制作について」　鈴木卓治，画像電子学会第11回画像ミュージアム研究会，2013年３月１日，於京都高度技術研究所。

７．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

小町　祐史　大阪工業大学情報科学部	田中　法博　長野大学企業情報学部
徳永　幸生　芝浦工業大学工学部	村田　良二　東京国立博物館
山田　　篤　（財）京都高度技術研究所	北村　啓子　国文学研究資料館
津田　光弘　イパレット	青山　宏夫　本館研究部・教授
○安達　文夫　本館研究部・教授	大久保純一　本館研究部・教授
◎鈴木　卓治　本館研究部・准教授	仁藤　敦史　本館研究部・教授

（２）「民俗研究映像の制作と研究資源化に関する研究」2010～2012年度
（研究代表者　内田　順子）

１．目　的

歴博が民俗研究の一環として1988年より行なってきた民俗研究映像に関して，完成作品と素材映像の保存・活用を推進するとともに，新規で制作する映像の方法論について，館内外の研究者とともに検討するため，2004年度以降，共同研究の枠組みで取り組んできた。

第１期の共同研究「民俗研究映像の資料論的研究」（2004～2006年，代表：内田順子）では，制作から活用にいたるプロセスを検討し，権利処理等，活用に支障のないかたちで映像を資料として残すためのワークフローを構築し，第２期「民俗研究映像の制作と資料化に関する研究」（2007～2009年，代表：青木隆浩）ではそれに基づいて映像制作を行ってきた。その成果は，2006年度にはじまった歴博映像フォーラムの開催による民俗研究映像の一般公開や，2007年度から実施がスタートした，DVDでの館外への貸し出しなど，民俗研究映像の公開促進につながっている。また第２期では，過去の作品の素材のコピーを作成するなど，映像の保存対策も講じてきた。

しかしながら，多量に存在する撮影素材の保存と活用については，適切なメディア，フォーマット，データベースなど，技術的な問題を解決するという課題が残されている。そこで第３期では，大学における民族学や科学分野での映像の制作と資源化のとりくみおよび理論構築を参考にしつつ，新規で制作する３作品と，過去に制作された３作品を対象に，撮影素材の保存と活用のためのデータベース化まで含んだワークフローを構築することを目的とした共同研究を実施する。また，新規で制作する作品では，それぞれの作品のテーマに適したかたちで撮影地の人びとや研究者などと共同で制作してゆく。成果を共有しつつ発信することによって，日常生活や儀礼，信仰，生業の伝承という問題への関心を高めるとともに，立場の異なる人びとを結びつけ，あらたなネットワーク構築に貢献できる映像メディアのありかたの開発へとつなげてゆくためである。

２．今年度の研究目的

今年度のテーマ：石屋の技術・生活の記録と映像活用

瀬戸内島嶼部で古くから採石を行なってきた石屋の歴史，技術，良材を求めての移動，丁場での生活等を，戦後を中心に，愛媛県今治市の伯方島・大島，岡山県笠岡市白石島・北木島等の事例から取り上げる。生業技術は日々革新を続けている。したがって，戦後の技術変遷の記録は貴重な資料となる。また，現地の教育

委員会や博物館等と協力し，地域文化としての日常への関心を高める活動のあり方について検討する。その他，2011年度作品に関する研究会，映像の研究資源化およびデータベース化に関する研究会，2011年度作品の英語版の制作，過去の作品のデジタル化を行う。

３．今年度の研究経過

第７回研究会

日時：５月13日（日）　13:30～17:00

場所：歴博　第二会議室（集合・討論）＆講堂（上映）

内容：研究会の主旨説明（内田順子）（第二会議室）

「比婆荒神神楽―地域と信仰―」(2011年度民俗研究映像，監督・制作：松尾恒一，69分）の上映（講堂）

作品についての報告（松尾恒一）

全員討論

今後の予定

第８回研究会

日時：2012年12月８日（土）　13時30～17時

場所：歴博（第二会議室）

内容：研究会の主旨（内田）（第二会議室）

村尾静二氏による上映と報告

上映予定作品『老いの時空』（制作　村尾静二，30分，2008年）

全員討論

今後の予定

第９回研究会

日時：２月17日（日）13:30～17:00

場所：歴博（第２会議室）

内容：「盆行事の地域差（仮題）」の制作計画にについて（関沢まゆみ）

来年度以降の計画について（内田順子）

４．今年度の研究成果

【映像製作（新規）】「石を切る―花崗岩採石の技術と民俗―」（制作担当：松田睦彦）

愛媛県今治市の伯方島・大島，岡山県笠岡市白石島・北木島等の事例により，瀬戸内島嶼部で古くから採石を行なってきた石屋の歴史，技術，良材を求めての移動，丁場での生活等を，戦後を中心に取り上げる。本編１本，資料編２本，展示ダイジェスト版３本としてまとめた。

【映像製作（準備）】平成25年度に本製作し完成させる民俗研究映像「盆行事の地域差（仮題）」（制作担当：関沢まゆみ）について，盆という同じ季節に複数の地域の行事を撮影することから，今年度より製作協力業者による撮影を開始した。

【英語版の製作】平成23年度「比婆荒神神楽―地域と信仰―」の英語版を製作した。

【デジタル化】民俗研究映像「金物の町　三条民俗誌」（平成13年度製作）の完成版の保存媒体が脆弱である

ため,製作協力業者が保存しているD2版から新たに16㎜フィルムプリント版とデジタルβカム版を作成した。また，北海道在住の個人から提供された16㎜フィルム（昭和９年～18年）について，デジタル化して収集した。

【成果の公開】平成23年度製作映像の公開として，第７回歴博映像フォーラム「祭りと熱狂―信仰と造形―『長崎くんち』,『比婆荒神神楽』」を開催した（10月20日（土），場所：新宿明治安田生命ホール)。

【研究会】第７回研究会では，2011年度製作の「比婆荒神神楽―地域と信仰―」（監督・制作：松尾恒一，69分）を上映しそれらの内容について議論した。第8回研究会では，共同研究員である村尾静二氏による『老いの時空』(制作　村尾静二，30分，2008年）を上映し，参加者全員で討論を行った。個人をとりあげた映像で，生業，日々の生活，家族や周辺の人びととの関係，背景となる生活史などを，どのように作品の中に織り込んでいけるか，編集についての有用な討論となった。第９回研究会では，2013年度に製作を予定している「盆行事の地域差（仮題)」について，制作担当の関沢まゆみ氏から今年度の準備撮影状況と次年度の製作計画の報告があり，全体の構成，内容，撮影や編集の技術的な側面について，参加者全員で討論した。

５．期間全体の成果

【成果の概要】

民俗研究映像についての第１期の共同研究「民俗研究映像の資料論的研究」(2004～2006年，代表：内田順子）で構築した，活用まで見越した映像製作の方法に基づいた新規民俗研究映像の製作は，第２期「民俗研究映像の制作と資料化に関する研究」(2007～2009年，代表：青木隆浩）において定着し，第３期にあたる本共同研究でもそれに基づいた映像製作を実施した。本製作の前年度から準備（民俗調査，交渉，ロケハン，撮影等）し，本製作の年に仕上げ，翌年度，歴博映像フォーラムでの一般公開と英語版の製作をおこなうことも一連の流れとして定着してきた。また，過去の民俗研究映像のデジタル化による保存も順調に進めることができただけでなく，撮影素材のデータベース試作もおこなうことができた。さらに，新しい民俗展示室の構築に伴う調査の中で提供された古いフィルムのデジタル化を進め，その成果を新しい展示に反映することもできた。

以下，それぞれの成果について述べる。

【民俗研究映像の新規製作に関する共同研究会】

2010年度　「アイヌの伝統と現在」平取編，白老編（制作担当：内田順子）

2011年度　「比婆荒神神楽-地域と信仰」(制作担当：松尾恒一)

2012年度　「石を切る―花崗岩採石の技術と民俗―」(制作担当：松田睦彦)

2013年度へ向けた準備　「盆行事の地域差（仮題)」(制作担当：関沢まゆみ)

それぞれ，本製作の前年度に撮影準備をし，およそ２年かけて映像を製作した。準備期間に開催する共同研究会では，制作担当者から，それまでに撮影した映像や今後の制作計画が報告され，共同研究員全体でそれについて議論した。年３回開催する共同研究のうち，１回は前年度に完成した映像の上映と全体による討論，１回は映像制作や映像データベースについての最新の研究成果の報告，そしてもう１回は，次年度の制作計画を検討する研究会である。より完成度の高い映像をつくるための制作体制として，１年間の研究会もその中に組み入れる体制をつくってきた。完成作品は歴博映像フォーラムによって一般公開しているほか，「アイヌの伝統と現在」と「比婆荒神神楽―地域と信仰」は，新しい民俗展示室においても展示用に再編集

したものを上映公開しているほか,「石を切る―花崗岩採石の技術と民俗―」も，2013年度の企画展示「時代を作った技―中世の生産革命」で展示用に編集したものを公開予定であり，映像の活用の幅を広げることができた。

【英語版製作】

2010年度　「平成の酒造り　製造編」(2009年度，制作担当：青木隆浩)

「平成の酒造り　継承・革新編」(2009年度，制作担当：青木隆浩)

2011年度　「アイヌの伝統と現在」(2010年度，制作担当：内田順子)

2012年度　「比婆荒神神楽―地域と信仰」(2011年度，制作担当：松尾恒一)

本製作の翌年度に英語版の製作を実施する流れも定着し，上記の３作品について行なった。なお,「アイヌの伝統と現在」では，英語版用の翻訳まで進んでおり，2013年度中にDVDとして完成する予定である。新民俗展示室用の展示映像の英語版製作の過程で修正の必要が認められたためである。

【歴博映像フォーラム】

2010年度（第５回)「平成の酒造り」

日時：2010年2010年９月４日（土）11時00分～17時30分

場所：新宿明治安田生命ホール

2011年度（第６回)「アイヌ文化の伝承―記憶と人，人と人とをつなぐ映像」

日時：2012年２月４日（土）　10時～17時

場所：新宿明治安田生命ホール

2012年度（第７回)「祭りと熱狂―信仰と造形―『長崎くんち』,『比婆荒神神楽』」

日時：10月20日（土）　10時30分～17時

場所：新宿明治安田生命ホール

本製作の次年度に歴博映像フォーラムを実施して映像をひろく一般公開する流れもすっかり定着した。ある程度の長さのある映像を上映するため，映像フォーラムは全体で8時間ほどのプログラムとなる。来場者のアンケートでは，映像やフォーラムのプログラムの長さについてはあまり問題になっていないようだが，歴博の民俗研究映像は長編が多く，海外の民族学関連の映画祭でとりあげられる映像よりも長い場合が多い。映像の公開性を高めるためには，完成版の長さやフォーラムのプログラムの見直しが必要かもしれない。

【デジタル化】

2010年度：昭和30年代に屋久島で撮影されたホームムービーの８㎜フィルム44本の提供が現地調査により受けられることになり，内容的に，歴博の民俗研究の資料として重要であると認められたため，HDテレシネを行なった。この成果は新第4展示室「列島の民俗文化」の「世界遺産と地域変容」における屋久島のデジタルコンテンツにおいて，1960年代の屋久島の人びとの姿を紹介する動画コンテンツの製作につながった。

2011年度：過去の民俗研究映像の撮影素材のデジタル化として,「風の盆フィーリング」(1997年度製作),「大柳生民俗誌」(1998年度製作),「沖縄の焼物―伝統の現在」(1999年度製作),「金物の町・三条民俗誌」(2001年度製作),「物部の民俗といざなぎ流御祈祷」(2002年度製作）を行なった。

また，宮若市石炭記念館所蔵の炭鉱の記録映画フィルムについて，フィルムの所有者と協議した結果，内容が民俗研究の観点から貴重なものであること，また，劣化がかなり進んでしまったフィルムもあることから，現時点で他の媒体に収録できるものについては作業を進めてもよいことが確認され，HDテレシネでのデ

ジタル化を行なった。このフィルム調査の成果は，新第４展示室「列島の民俗文化」の「近代化を支えた産業の現在」に活かされた。

2012年度：過去の民俗研究映像のデジタル化として「金物の町　三条民俗誌」（平成13年度製作）の完成版の保存媒体が脆弱であるため，製作協力業者が保存しているD2版から新たに16㎜フィルムプリント版とデジタルβカム版を作成した。

また，北海道在住の個人から提供された16㎜フィルム（昭和９年～18年）について，デジタル化して収集した。このフィルム調査の成果は，新第４展示室「列島の民俗文化」の「アイヌ民族の伝統と現在」に活かすことができた。

【データベースの試作】

民俗研究映像の撮影素材を検索するためのデータベースプログラムを業者に発注し，試作をおこなった。素材映像についての記録の有無が検索の精度に大きく関わるので,映像情報の整理方法が今後の課題である。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表）

乾　　尚彦　学習院女子大学
梅野　光興　高知県立歴史民俗資料館
新谷　尚紀　國學院大學
分藤　大翼　信州大学全学教育機構
村尾　静二　総合研究大学院大学葉山高等研究センター
青木　隆浩　本館研究部・准教授
小池　淳一　本館研究部・教授
柴崎　茂光　本館研究部・准教授
関沢まゆみ　本館研究部・教授
常光　　徹　本館研究部・教授
松尾　恒一　本館研究部・教授
山田　慎也　本館研究部・准教授
上野　祥史　本館研究部・准教授
鈴木　卓治　本館研究部・准教授
○松田　睦彦　本館研究部・助教
◎内田　順子　本館研究部・准教授

（３）「古代における文字文化形成過程の総合的研究」2010～2012年度
（研究代表者　小倉　慈司）

１．目　的

国立歴史民俗博物館では20年以上にわたって正倉院文書の複製事業に取り組むとともに全国各地の木簡・漆紙文書・墨書土器・銅印など出土文字資料の調査研究およびその体系化を図ってきた。また近年では，早稲田大学朝鮮文化研究所と共同して韓国内の木簡・石碑の調査を実施し，多くの研究成果を挙げてきている。

本研究は，それらの研究蓄積を踏まえ，その総合化を図るとともに，これまで未着手であった文字資料の実物・画像データによる調査研究も実施し，広く東アジア世界を見通して，古代における文字文化の全体像を明らかにすることを目的とする。

具体的な課題としては，書写材料としての竹・木・紙・石・金属の使い分けの問題，古代中国・朝鮮・日本における文字資料の記載様式・内容の比較検討，文法・発音など字音表記の国語学的分析による古代朝鮮の複雑な実態とその影響を受けた古代日本の実態の解明，文字文化の伝播で大きな役割を果たした仏教・儒教・道教・呪術などの宗教的要素の解明などが挙げられる。

このような古代史学・考古学・国語国文学・民俗学などを踏まえた幅広い視点から日・中・韓の文字資料を比較検討し，東アジア全体の視点から見た新しい古代文字文化の実態を解明する。

２．今年度の研究目的・計画

海外調査として中国長沙走馬楼呉簡の調査を実施するとともに，これまでの研究の中間報告として国際シンポジウムを開催する。また昨年９月に銘文を持つ福岡市元岡古墳群G６号墳出土大刀の発見が公表されたが，同資料は本共同研究の課題と密接な関わりを持つものと考えられるため，元岡遺跡出土木簡等と共に調査を実施したい。

この他，前年度に引き続き，全国各地出土文字写真資料の画像データ化を進める。

３．今年度の研究経過

第１回研究会　2012年６月２日（土）　国立歴史民俗博物館

橋本　繁「高麗沈没船木簡・竹札について」

小倉慈司「藤貞幹と古代朝鮮研究」

武井紀子「兵庫県　吉田南遺跡出土木簡について」

第１回調査　2012年８月５日（日）～９日（木）　韓国昌原市，木浦市等

韓国加耶文化財研究所にて城山山城木簡を調査し，ついで城山山城発掘現場踏査を行う。

国立海洋文化財研究所にて高麗沈没船木簡・竹札を調査。

第２回研究会　2012年10月28日（日）　国立歴史民俗博物館

武井紀子「城山山城木簡　2012年８月調査について」

橋本　繁「高麗沈没船木簡・竹札の調査成果」

企画展示構成素案の検討

国際シンポジウムの打ち合わせ

国際シンポジウム「古代日本と古代朝鮮の文字文化交流」

2012年12月15日（土）～16日（日）　イイノホール　（朝日新聞社後援）

基調講演　金　英媛（韓国国立文化財研究所長）

「新安海底沈没船の陶磁器と木簡」

研究報告　林　敬熙（韓国国立海洋文化財研究所）

「高麗沈没船貨物票木簡」

市　大樹「都の中の文字文化」

三上喜孝「古代地方社会と文字文化」
梁　淑子（韓国国立扶余文化財研究所）
「咸安城山山城の発掘調査と出土木簡」
李　鎔賢（韓国国立春川博物館）
「近年発見された韓国古代文字資料の概要」
犬飼　隆「古代日朝における言語表記」
山口英男「正倉院文書に見える文字の世界」
李　成市「古代日朝文化交流」
全体シンポジウム　司会　平川　南
パネリスト　宋　義政（韓国国立中央博物館）
神野志隆光

第２回調査　2012年12月19日（水）～21日（金）　太宰府市，福岡市

太宰府市文化ふれあい館にて国分松本遺跡出土木簡を調査。

福岡市埋蔵文化財センターにて元岡遺跡出土木簡，元岡G６号墳出土大刀，鴻臚館出土木簡を調査。

第３回研究会　2013年２月11日（月）　国立歴史民俗博物館

田中　史生　第２回調査報告

歴博所蔵資料見学（木簡複製品，水木資料中の題籤軸等）

企画展示についての検討。

この他，写真資料の画像データ化を継続して行った。

４．今年度の研究成果

今年度は当初の予定では中国走馬楼呉簡の調査を本格的に開始することとなっていたが，諸事情により実施が困難となった。その一方で，韓国海洋文化財研究所にて調査を進めている高麗沈没船木簡の調査が幸いに可能となり，発掘が進んでいる城山山城の木簡とあわせて調査を実施し，韓国における最初期（６世紀半ば）の木簡と中世の木簡とを検討することが可能となった。

国内では元岡G６号墳出土大刀に続き，太宰府市国分松本遺跡の「戸籍」木簡が出土公表されたことにより，鴻臚館出土木簡等も含めて調査を実施することができた。

さらに今年度は共同研究の最終年度および連動する５年間の科研の３年目にあたることから，成果報告として12月に都内において２日間にわたる国際シンポジウムを開催し，延べ783人の参加者を得た。同シンポジウムでは韓国国立文化財研究所長および高麗沈没船木簡や城山山城の発掘調査担当者等を招聘して研究報告していただき，本共同研究の成果の一端を広く一般に紹介することができた。

写真資料の画像データ化については，共同研究と連動する科研が５年間であるため，共同研究終了後も加えた４年計画での作業を予定しているが，今年度までに全体の分量の約２／３まで終了した。

５．３年間を通じての成果

本研究はこれまで国立歴史民俗博物館において進めてきた古代文字文化研究を，近年の研究調査や学界を取り巻く環境の進展を踏まえ，広く東アジア世界を見通してその総合化を図ることを目的として開始したも

のである。

当初の課題を大きく分ければ，地域として中国・朝鮮半島・日本列島，社会として都・中央と地方社会，時期として受容期（日本列島では主として七世紀以前）と発展期（日本列島では主として八世紀以降）などがあり，具体的テーマとして書写材料や字音表記，宗教的要素などが挙げられるが，このうち，中国地域に関しては諸般の事情により３年の間には充分に研究を進めることができず，今後の課題として残された。しかしその一方で朝鮮半島については後述するように新資料の発見や調査の機会に恵まれたことにより，当初想定していた以上の成果を挙げることができた。また地方社会という点については東北地域の検討も予定していたが，東日本大震災により，九州地域の調査に力を注ぐこととした。これも結果として，福岡県にて新資料の出土発見が続いたため，それらの調査に充分な時間を割くことができた。その他の点についてはほぼ当初の予定通りに研究が進められたと考えている。以下，具体的に記述することにしたい。

１年目は２度の海外調査を含む４度にわたる資料調査と研究会（館内２回，館外２回）を４回実施した。第１回の海外調査では，韓国羅州文化財研究所および国立中央博物館にて羅州伏岩里遺跡出土百済木簡および南山新城碑碑文等の調査を実施した。羅州伏岩里遺跡出土百済木簡は韓国で初の地方官衙出土木簡であり，これを調査することによって，７世紀初頭の百済における地方文書行政のあり方を具体的に検討することができた。第２回の海外調査では，韓国国立中央博物館・国立慶州博物館・国立慶州文化財研究所にて所蔵・展示中文字資料の調査，また伝仁容寺址遺跡・月城垓子，風納土城等漢城期百済関連遺跡の現地調査を実施した。これによって，新羅においても龍王祭祀が各地で行われていたこと，雁鴨池出土の刻書土器に見える「辛審龍王」「龍王辛」等の記載は東宮官の官司の一つである「龍王典」に関するものであって，「審」は刻した工人が「番」を誤った可能性が考えられることなどが判明した。木簡に比し墨書土器や刻書土器は韓国ではまだ充分な研究対象となっておらず，今後，古代日本と比較しつつ検討を深めていくことが求められる。国内では，飛鳥資料館にて秋季特別展「木簡黎明―飛鳥に集ういにしえの文字たち」が開催され７世紀木簡をまとめて調査，釈文を再検討することができた。また渡来人が多く居住し文字文化が地域社会に早期に浸透していた近江国地域の出土文字資料について調査を行い，あわせて真偽について議論のある超明寺養老元年碑の検討もおこなった。

２年目は韓国国立中央博物館にて開催の特別展示「文字，それ以後―韓国古代文字展」に展示協力をおこない，同展示を利用して出陳文字資料の調査を実施，さらに同館にて開催のシンポジウムにて平川南，李成市，三上喜孝３氏が講演・報告をおこなった。また中国湖南省長沙簡牘博物館・湖南省博物館において長沙走馬楼簡牘の予備調査を実施した。国内では久留米市埋蔵文化財センター，九州歴史資料館，大野城市教育委員会，太宰府市文化ふれあい館において，筑後国府跡・ヘボノ木遺跡等出土墨書刻書土器，大宰府史跡・井上薬師堂遺跡等出土木簡，牛頸ハセムシ古窯群出土刻書土器，大野城市内出土木簡・墨書刻書土器，国分松本遺跡・大宰府条坊跡・宮ノ本遺跡等出土木簡・墨書刻書土器等の調査を実施した。

３年目については上記の通りである。

なお，これらの調査・研究においてはメンバー以外に出土資料所蔵機関関係者，遺跡発掘担当者，古代史研究者，補助業務従事の大学院生等も加わり，活発に意見交換をおこなった。また以上の調査・研究に加えて，これまで歴博にて収集してきた発掘直後の出土文字資料写真のデジタル化も進めている。これは本共同研究と連動している科研が５年間であるため，残り２年の間に完成終了する見込みである。

この３年間の共同研究により，字音表記や書式，信仰の類似性あるいは差異など，古代朝鮮半島と日本列

島の間の文字文化伝播や交流の過程についての諸問題がかなり明らかになったと考えるが，具体的には研究報告特集号および今後予定している企画展示において示すこととしたい。

以上，多少計画変更を迫られた点はあったとはいえ，全体としては当初の目標を上回る成果を挙げることができた。その成果の一端は国際シンポジウムにて披露したが，今後，研究報告特集号の2014年度刊行をめざすとともに，同年秋には人間文化研究機構連携研究「正倉院文書の高度情報化研究」とも協力して，韓国国立中央博物館・韓国国立文化財研究所共催による古代朝鮮と日本の文字文化交流をテーマとした企画展示を実施する予定である。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

安部聡一郎　金沢大学歴史言語文化学系
市　　大樹　大阪大学大学院文学研究科
犬飼　　隆　愛知県立大学文学部
大橋　信弥　学識経験者
神野志隆光　明治大学大学院
新川登亀男　早稲田大学文学学術院
関　　和彦　共立女子第二中学高等学校
關尾　史郎　新潟大学人文社会教育科学系
高橋　一樹　武蔵大学人文学部（2012年3月まで本館研究部・准教授）
田中　史生　関東学院大学経済学部
寺崎　保広　奈良大学文学部
中林　隆之　新潟大学人文社会教育科学系
三上　喜孝　山形大学文学部
森下　章司　大手前大学人文科学部
山口　英男　東京大学史料編纂所
吉岡　眞之　学識経験者
李　　成市　早稲田大学文学学術院
◎小倉　慈司　本館研究部・准教授
小池　淳一　本館研究部・教授
高田　貫太　本館研究部・准教授
永嶋　正春　本館研究部・教授
○仁藤　敦史　本館研究部・教授
平川　　南　本館・館長

［リサーチアシスタント］

2010～11年度：高木　　理　早稲田大学・大学院生
2012年度：大高　広和　東京大学・大学院生（６月まで）

（４）「民俗儀礼の変容に関する資料論的研究」2011～2013年度
（研究代表者　山田　慎也）

１．目　的

通過儀礼や年中行事など，地域で伝承されてきた諸儀礼や習俗等の民俗は，近代化の過程で大きく変容している。なかでも，現在実践されている儀礼は，さまざまな要因によって地域のコンテキストからはずれ，均質化する傾向が多くみられる。例えば，七五三は，地域によりさまざまな年齢別，男女別などの組み合わせによって従来行われてきたが，現在，女子の三，七歳，男子の三，五歳とされ，従来慣習のない地域でも行われるようになっている。これは商業化による宣伝と作法書の普及で全国に浸透したことによる。また墓制は，明治17年の墓地取締規則（のちの墓地埋葬法）により，多様な墓の習俗の有り様も次第に平準化しつつある。

こうした民俗儀礼を取り巻く環境については，法令の施行や行政の働きかけ，風俗改良運動や生活改善運動などの影響などを含む政治的要因，出産や終末期，死亡確認など生物医療の進展による医療的要因，またデパートや葬祭業など，儀礼の産業化による消費文化的要因，地域の過疎化，少子高齢化などによる社会的要因による変容などが考えられ，日本という国民国家の枠組みの中での均質化であり，一種の「国民儀礼」ということができよう。

しかしこうした点について，産育や年中行事などの一部で個別的には指摘されているが，それを総合化する研究はあまりなされてこなかった。むしろ民俗学では，地域が独自に実践している儀礼をおもに取り上げてきた。だが地域の儀礼が成立するのも，情報が容易に流動する現代において，全国的な平準化とのせめぎ合いの中で生じているものであり，全国的動向の理解は地域性を持つ儀礼を理解する上でも重要である。

なかでも地域博物館は，地域性を帯びた儀礼については積極的に調査を行い資料収集する一方，平準化していくものについてはあまり体系的に取り上げることはなく，とくにモノ資料も体系的にまた積極的に収集されてはない。

そこで本研究では，第一に通過儀礼，年中行事を中心に現代の民俗儀礼の様相と変容の要因について，政治的，医療的，経済的，社会的な観点など多様な視点から総合的に分析検討し，地域から乖離し国民儀礼化した民俗の傾向を検証する。第二にそれにともなう関連する資料，なかでもモノ資料の収集の方向性を確立する。以上の研究を行うことで現代の民俗儀礼の動態を明らかにすることを目的とする。

２．今年度の研究計画

民俗儀礼について変容の様相と均質化の諸要因について検討を行う。とくに人生儀礼の中でも婚姻儀礼や年祝い等の儀礼に焦点を当てる。また政治的要因や消費経済の浸透による儀礼分野の変容を引き続き検討する。さらに専門に応じて共同研究員が調査を行い，全国的動向とそれに対する地域の動向について明らかにする。

儀礼の作法書やマニュアル本などを収集分析し，全国的に取り上げられている儀礼等を，整理分析する。また歴博にある儀礼関連の資料データを整理する。

３．今年度の研究経過

第５回研究会　平成24年６月26日（土）　場所：歴博

八木透氏（仏教大学教授）

「民俗学における婚姻研究の回顧と展望―柳田國男から石井研士まで―」

石井研士氏（國學院大學教授）

「神前結婚式の創出と変容」

第６回研究会　平成24年11月10日（土）　場所：歴博

小山静子氏（京都大学大学院教授）

「生活改善運動からみた日常生活の近代化」

玉川貴子氏（名古屋学院大学准教授）

「ライフエンディング・ステージの創出と葬儀における消費～経済産業省の『ライフエンディング調査』から～」

第７回研究会およびフィールドワーク　平成25年２月９日（土）～11日（月）

場所：愛知県東浦町郷土資料館（うのはな館）

日高昇氏（前愛知県議会議員）・戸田宗明氏（元東浦町助役）・郷土資料館の方々

「緒川の厄歳行事」

愛知県東浦町緒川の厄歳行事について，中心的役割をはたす42歳の年齢集団である緒川子丑会の活動を中心に，入海神社の厄歳行事等，フィールドワークを行った。そのほか関連の博物館や宗教施設等の見学も行った。

４．今年度の研究成果

今年度は，まず婚姻儀礼について検討を行った。民俗学における婚姻研究史を検討し，家族観，夫婦観の変化によって研究の方向も変わってきており，今後，婚姻儀礼研究がより必要とされることが指摘された。神前結婚式の成立と変遷についても報告され，近年，急速に神前結婚式からチャペルウエディングに移行しているが，戦後の生活変化の中で，神前式の浸透は新たな儀礼が必要とされたことが要因であったことが指摘された。

さらに，民俗儀礼の変容の政治的要因として，生活改善運動の影響は大きかった。そこで生活改善運動の主要な対象と民俗との関係を検討した。また経済的な変容として，個性的な墓石建立の浸透と消費経済との関連が指摘され，私らしさの形成が企業側の働きかけが大きいことも判明した。

本共同研究では，問題意識を共有化するためにも，共通のフィールドで調査を行い，議論をすることで理解が深めることができるとして，今年度は愛知県東浦町緒川の厄歳行事の調査を行った。現在でも厄年を期に年齢集団が形成され，25歳，42歳の男性の集団から，同窓会組織へ移行し，還暦では男女の集団になって厄年行事を行っている。つまり学校教育と厄年という民俗儀礼とが接合されており，年齢集団が地域組織への寄付なども行い，現在でも地域活動にも大きく貢献していることが調査から判明し，地域ごとのあり方の検討も重要であることが明らかになった。

また歴博国際シンポジウム「現代における死の文化の変容―東アジア地域の葬送墓制を中心に―」にも参加し，近代化による葬送儀礼の変容が東アジアでも同時並行的に生じ，しかも相互に影響を与えていること

がわかった。さらに平成25年３月19日，第四室民俗展示「列島の民俗文化」がリニューアルオープンし，随所に共同研究の成果が反映している。たとえば永島婚礼会の移動式神前結婚式祭壇は，戦後，ホテルや結婚式場などの場で神前の挙式，披露宴の形態に大きな影響を与えたものであることから，今回展示されることとなった。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

前田俊一郎　文化庁伝統文化課・文化財調査官
土居　　浩　ものつくり大学建設技能工芸学科・准教授
板橋　春夫　國學院大學・講師
鈴木由利子　宮城学院女子大学・講師
浮ヶ谷幸代　相模女子大学人間心理学科・教授
岩本　通弥　東京大学大学院総合文化研究科・教授
門田　岳久　立教大学観光学部・助教
小国　喜弘　東京大学大学院教育学研究科・准教授
重信　幸彦　本館・客員教授
松田香代子　愛知大学・講師
加藤　紫識　千代田区日比谷図書文化館・文化財調査指導員
大本　敬久　愛媛県立歴史文化博物館・学芸員
俵木　　悟　成城大学文芸学部・准教授
立石　尚之　古河歴史博物館・学芸員
小山　隆秀　青森県教育庁文化財保護課・主査
小井川　理　神奈川県立歴史博物館・学芸員
青木　隆浩　本館研究部・准教授
原山　浩介　本館研究部・准教授
常光　　徹　本館研究部・教授
松尾　恒一　本館研究部・教授
○小池　淳一　本館研究部・教授
◎山田　慎也　本館研究部・准教授
〔リサーチ・アシスタント〕
坪内　俊行　慶應義塾大学・博士課程３年

◇展示型共同研究

（１）「中世の技術と職人に関する総合的研究」2010～2012年度
（研究代表者　村木　二郎）

１．目　的

職人技とも呼ばれる日本の伝統技術は，中世に大きく花開いた。海外へ輸出される貿易品目にも工芸品が名を連ね，青銅鏡のように中国や朝鮮半島で日本製品のコピーが作られるまでに至る。そういった技術を支えた職人たちの具体的な姿が，次第に明らかになりつつある。

新潟県新発田市北沢遺跡では，陶器窯と製鉄炉，炭焼窯，杣場遺構が一緒に見つかっている。茨城県東海村の村松白根遺跡は大規模な製塩遺跡であるが，遺物から骨細工や鋳物師の存在も知られ，複合的な生産状況が窺える。また，博多や京都，鎌倉などの都市部のほか，港や宿でも生産関連の遺跡や遺物が多数発見され，その蓄積は膨大なものである。さらに，大分市豊後府内遺跡や長崎の遺跡群からは，「キリシタン関連遺物」を中心に海外の技術が多数見受けられる。外来技術が果たしたインパクトとその受容の経過は，技術の転換をリアルに示してくれる。しかし，こういった事例は個別に検討されてきたものの，なかなか全体像を把握するまでには至っていない。そこで，いくつかのテーマにそって整理をし，研究を進めたい。

まず，「時代を作った技術」として，巨大石塔造立，鎌倉大仏鋳造，安土城築城など時代のモニュメントが示す技術の集約を考える。鉄炮のように最先端技術がすぐに反映される道具や，技術の粋を集めた美術工芸品，外来技術もその対象となる。これらは時代のエネルギーの結晶であり，それぞれから技術の到達点を明らかにしたい。

次に，「日常生活を変えた技術」として，焼物，漆器，木製品，石製品やそれらを加工する道具についての基礎的な研究をおこなう。古代以降の技術転換によって道具が普遍化し，中世の生活変化をもたらした。また日常生活道具ゆえに，それらの生産も消費者の動向を直接反映してさらに変化してゆく。陶器が一般消費者に浸透すると，いかに安くて大量に生産するか工夫を重ね，窯の構造が大きく革新した。同様のことは石臼にも言えそうで，河原の転石を利用して簡便に仕上げるものが登場する。その分，製品が粗悪化するため，道具の差別化も進んだと考えられる。時代性とも合わせ追究していきたい。

また，「技術を担った人々」として，町，村，海山の生産状況を具体的に検証し，技術者集団と権力の関係にまで踏み込んで考える。技術者の背後にある権力のあり方もまた，中世の特徴である。寺院から武家権力への権力交替，自立した職人の存在など，新たな遺跡の発見を踏まえて従来の文献史学との協業を具体的に大いに更新することも可能であろう。

以上のようにして，文献・考古・民俗・美術・分析科学などの多視点からの検討を重ね，新しい中世の技術史像を描きたい。そして，それらの成果を展示で公開したい。

２．今年度の研究目的・計画

今年度は最終年度の３年度目にあたる。展示型共同研究であるので，展示内容に反映できるよう，具体的な資料に基づいて議論を展開したい。

また，当共同研究は，科学研究費補助金（基盤研究Ｂ「「中世」を作った技術―生産からみる時代史」）と

も連動している。共同研究および科研メンバーによる「中世技術研究チーム」として，これまでの調査で実現できていなかった重要な課題である，中世の製鉄に関する調査（中国山地の製鉄遺跡）および，生産と流通に関する調査（中世阿波の生産・流通遺跡）を実施する。そのほか，個別課題に則して，特に，中世末～近世初頭の石丁場の調査，南蛮漆器の生産背景を探る鍵・真鍮・輸入漆の調査を重点的におこなう。

これらの調査を踏まえ，館内での研究会を実施し，展示に向けた具体的な議論を重ねたい。

ほかにも，展示等で活用できる資料の複製品製作として，中世東日本における重要な鋳造遺跡である埼玉県金井遺跡Ｂ区の鋳型資料を計画している。

３．今年度の研究経過

第１回研究会（４月21・22日　国立歴史民俗博物館）

松田睦彦・栗木崇「矢穴痕跡の解釈―考古学と民俗学の手法から―」

福島金治「神奈川県津久井市光明寺所蔵「善宝寺地絵図」と職人」

川口洋平「長崎の町屋と川原慶賀の絵画資料「諸職と道具」について」

館蔵資料熟覧

第２回研究会・調査（６月２～４日　広島・島根）

北広島町矢栗製鉄遺跡・同坤束製鉄遺跡見学

鉄の歴史博物館・菅谷たたら・和鋼博物館見学

島根県埋蔵文化財センターで出土資料見学

第３回研究会・調査（８月２～５日　徳島）

徳島県立博物館・徳島県埋蔵文化財センターで出土資料見学

徳島市川西遺跡見学

海陽町立博物館・鞆浦・椿泊見学

一宮城跡・万年山墓所・各所石塔見学

藍住町勝瑞遺跡・藍の館見学

第４回研究会（９月15～16日　国立歴史民俗博物館）

佐々木健策「石臼研究の現状と課題」

鈴木康之「草戸千軒に見る生活の諸相」

齋藤努「日本刀の刀身製作に使われる技術」

小野正敏「一乗谷コーナー」

大庭康時「博多遺跡群出土資料に見る中世のガラス技術」

村木二郎「美術工芸と八条院町」

第５回研究会（12月15～16日　国立歴史民俗博物館）

池谷初恵「中世を終わらせた城郭瓦―聚楽第・伏見城の金箔瓦を中心に―」

川口洋平「外来技術コーナー展示構成案「海を越えた技術・材料・意匠」」

関周一「鉄砲の製造技術の伝来」

福島金治「「寺社と職人」展示案」

日高薫「南蛮漆器コーナーについて」

住吉朋彦「渡来刻工の活動」

４．今年度の研究成果

中国山地の製鉄遺跡調査では，近世たたらの技術が中世段階で準備されていたことを明確に印象付けられた。これは中世の鉄生産技術の変革を捉える上で大変重要な成果であり，全体調査であったことからも，メンバー全体での共通認識となった。これにより，企画展示での構成要素としても製鉄コーナーは不可欠と位置付け，再構成を迫られた。

生産と流通に関する中世阿波の調査では，流通拠点としての川西遺跡の出土資料を調査することで，イメージが大きく膨らんだ。従来，仏具鋳型の出土から特殊な製品製作に目が行きがちであったが，今回，全体調査で多視点から観察することにより，材木の鼻繰部分が切断されて捨てられていたものを発見した。流通過程での生産，加工の様相が，より具体的に分かってきたと言えよう。

個別調査としては，石丁場における石割り技術が，特殊な職人技から大量切り出しのための一般的な技術へと変化しているのではという仮説のもとで，その証明方法を検討した。矢穴の痕跡の測定方法を工夫することで目処が立った。今後この手法をより簡便化することで，データ量も増やせそうである。

南蛮漆器の製作背景については，京都市内の近世初頭の真鍮工房遺跡から，輸入漆を入れたタイやベトナムの陶器が出土しており，大きなヒントを得た。また，西洋型の鍵が長崎，有田，杵築などで見つかっていたことがわかった。これらの外来技術，材料，意匠が中世の技術と融合することで製品が作られていった様子が見えてきた。

５．３年間の研究成果

本共同研究は，展示型共同研究であり，また，２年目以降は科研費と連動した科研型共同研究でもある。研究成果の発表の場を平成25年度企画展示「時代を作った技―中世の生産革命―」に位置付けており，全体を通じて展示にあわせたテーマ設定のもと，調査・研究を進めた。ただし，３年間の研究のなかで新たに現れたテーマももちろんあり，結果的に当初の構想と着地点との間にある程度のずれは生じている。

生産技術の中でも，中世の日常生活を変えた，あるいは支えた技術がある。漆器や鉄鍋の普及はその最たるもので，中世の前半に変革があったと考えられる。漆器に関しては，下地に柿渋を用い，上塗りは１回程度の薄いものとした簡便なタイプが12世紀代から見られる。この視点で各地の漆器を観察していった結果，必ずしも遺跡単位で極端な偏差が見られるわけではないが，高級漆器を使用する階層にも，普及タイプの漆器が相当数紛れ込んでいることがわかった。これは庶民層の生活にもかなり浸透していたことを予想させ，事実，中世の集落遺跡の代表である草戸千軒町遺跡からは普及タイプの漆器が大量に見つかっていることが確認できた。鉄鍋に関しては，さらに遺物として残りにくいためまだまだ実態はつかみがたいが，鋳造遺跡に残る鋳型を確認することで，12世紀代から生産量が確実に増えていることが判明した。これらは堺市日置荘遺跡や坂戸市金井遺跡Ｂ区，新潟県出雲崎町寺前遺跡など，長期間にわたって操業された鋳造遺跡で大量に見つかっている。いわゆる注文生産品を作る出吹きの遺跡と違い，既製品も作っていたと考えられる遺跡で発見されることは，鉄鍋が商品として流通していた実態を示してくれる。こういった鉄器生産を支えたのは，中世を通じて技術革新を遂げた製鉄技術の向上が大きく影響していよう。中国山地で次々と発見されている中世の製鉄遺跡は，近世から始まるたたら製鉄の前史として近年注目されつつある。時期を確定する材

料に乏しいが，今後の調査いかんで，さらに厳密な議論が期待される。

中世の後半に入ると，集落や都市遺跡での遺物量が大幅に増加する。特に陶器においてその現象は顕著である。これは15世紀後半代に瀬戸や越前の陶器窯の量産体制が整うことと連動する。いわゆる「大窯の時代」であるが，実は他の製品についても同様の志向が見られることがわかった。例えば，小田原城下の山角町遺跡・御組長屋遺跡で発見された五輪塔・宝篋印塔，石臼，石鉢などの未成品資料群は，近辺の川原で拾える河原石を加工した粗雑な工程の復元を可能にしてくれた。質を落として量を増やす大量生産のより大きな体制がさまざまな製品生産に及んだ時代を，15世紀というひとつの画期として見出すことができた。

中世の生産技術の蓄積は，海外技術を取り込んで新たな展開も見せる。鉄炮の伝来は，従来の刀鍛冶の技術を基礎に，新たな鉄素材を開発することで，爆発的な生産性を見せた。ヨーロッパ向け輸出漆器である「南蛮漆器」は，タイやベトナムから輸入した安価な漆の代用品であるチチオール，ラッコールを使用していることがわかってきた。それらを運搬した壺が長崎や大阪，京都で見つかっているが，平安京左京三条四坊十町跡からはそういったタイやベトナム産の壺と共に，真鍮生産工房が発見されている。17世紀半ばと考えられているが，陶磁器の組成からもう少し遡る可能性も考えられた。また，西洋型の鍵も17世紀の国内発見例がこの研究会を通じて積み重ねられており，海外からの技術，材料，意匠が中世の技術と融合して「南蛮漆器」として結晶した様が見えてきた。

技術は職人の研ぎ澄まされた専門的なものだけでなく，一度に大量に生産する際には人海戦術に応じた技術の一般化も必要となる。中世前半に中国から伝わった石を割る技術は，当初は大型石塔などの特殊なモニュメントの建造に用いられた。これが中世末～近世初頭の石垣に用いる石を割る技術にも使われるようになる。江戸城や大坂城の天下普請では，各地から専門外の人夫が石割り作業に従事させられたため，石の目を正確に見抜く高度な石割り技術を持っていなくても，石を割ることができる手法が編み出されたと考えられる。この視点で石を割るための矢穴痕跡を分析したところ，石割りに有効に機能していない矢穴が無駄に掘られている石をいくつも確認することができた。それにも関わらず石が割れているのは，少ないほど効率がよい矢穴を徹底的に掘ることで，石の割れ方を補正しているためである。労力としては何倍もかかるが，失敗する可能性は低いと思われる。大量の人夫を動員するためのこういった技術の一般化も，また技術史のひとコマと呼べよう。

さまざまな視点を持った多くの共同研究員が，同じ問題意識を持って調査，研究に臨んだことで，これまで判明していた事実からも多くの新たな発見があった。これらの成果は，平成25年度夏の企画展示「時代を作った技―中世の生産革命―」で公開する予定である。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

大澤　研一　大阪歴史博物館
川口　洋平　学識経験者
佐伯　弘次　九州大学大学院
鈴木　康之　広島県立歴史博物館
坪根　伸也　大分市教育委員会
福島　金治　愛知学院大学
齋藤　　努　本館研究部・教授
小野　正敏　人間文化研究機構本部
栗木　　崇　熱海市教育委員会
佐々木健策　小田原市文化財課
関　　周一　つくば国際大学
中島　圭一　慶應義塾大学
四柳　嘉章　石川県輪島漆芸美術館
仁藤　敦史　本館研究部・教授

日高　　薫　本館研究部・教授　　○松田　睦彦　本館研究部・助教
◎村木　二郎　本館研究部・准教授

◇公募型共同研究

（１）「元禄『堺大絵図』に示された堺の都市構造に関する総合的研究」
2010～2012年度
（研究代表者　藤田　裕嗣）

１．研究の目的

堺環濠都市（大阪府堺市堺区）は，戦国期から近世前期にかけて日明貿易や朱印船貿易の拠点となり，会合衆により自治的に運営されるなど，輝かしい歴史の舞台として知られている。本館所蔵，元禄『堺大絵図』に示されている堺の環濠内が「堺環濠都市遺跡」とされ，その発掘・試掘調査は1,000件を越した。地中に眠った戦国期までの都市像について，発掘事例が増えた近年では数少ない発掘成果を強引に結びつけることなく，発掘された遺構と遺物自体に素直に対峙する態度が重要となっている。その際，近世初期の状況を１筆レベルの詳細さで示す同絵図は，貴重である。写真複製版も刊行され，近世史学や建築史学など，様々な立場から研究が進められてきたとはいえ，1977年の出版と古いうえに，絵図自体が大型過ぎて，細部までは読みにくい難点があった。この難点は，画像処理技術の進歩により克服できると期待される。本研究は，まず，写真を撮影して，絵図に描かれた土地区画とそこに盛られた文字注記に関する基礎的なデータを確認・共有することから始める。本絵図のデジタル画像を用いれば，発掘データをそれとの位置関係で詳細に検討でき，考古学が，歴史地理学・文献史学・建築史学と協働できると期待される。同絵図に示されている堺の都市構造は，大坂夏の陣で全焼の被害を蒙った後，江戸幕府が堺に込めた総意の表現と考えられ，それを理解するためにも，その前提となる戦国期の復原が望まれる。さらに，17世紀になると大坂が，江戸幕府の肝いりで天下の台所として大規模土木工事も伴って整備された。その中で，兵庫と尼崎を含む大阪湾，引いては瀬戸内や日本列島全体との流通関係をも念頭に置きつつ，流通の拠点としての堺が描かれた同絵図に新しい光を当て，再評価を試みる。

２．今年度の研究目的

「堺大絵図」の修理が23年度中に完了する点を踏まえ，高精細画像の構築を目指して，デジタル撮影する。そして，そこに示された土地区画について，建築遺構のみならず，考古学的成果からも検証し，同絵図が作成された近世前期の状況を押さえる。さらに，戦国期まで遡りつつ，遺物から考古学的成果を検証して，戦国期の都市構造との比較を試みる。相互の位置関係を踏まえつつ，発掘データを詳細に再検討する基盤が与えられる展望の下に，条件が整えば，経緯度を与え，GISによる高精細画像の構築も視野に入れる。夏にチェコ・プラハで開催される国際歴史地理学会議では修理に関わる報告を予定しており，国際学界への発信も継続して行う。

流通については，兵庫と尼崎を含む大阪湾，引いては瀬戸内や日本列島全体との関係をも念頭に置きつつ，堺の位置づけを試みる。その成果の一部は，特集展示の形で披露したい。

３．今年度の研究経過

○第１回研究会

・日時：平成24年５月２日（水）

・場所：歴博会議室，など

・内容等：今後の方針について意見交換した。

○第２回研究会

・日時：平成24年６月８日（金）

・場所：歴博会議室など

・内容等：修理が施されて博物館に納品された絵図を確認し，熟覧した。さらに，特集展示「元禄の堺大絵図―巨大都市図を歩く―」（12/18～1/27）に向けて，今後の検討課題について議論した。

○第３回研究会

・日時：平成24年８月23～24日（木～金）

・場所：歴博会議室など

・内容等：特集展示「元禄の堺大絵図―巨大都市図を歩く―」に関する「開催要項」などについて打ち合わせた。

○第４回研究会

・テーマ：近世大坂に関する展示見学と第17回中国・四国地区城館調査検討会　山口大会

・日時：平成24年11月23～25日（月）

・場所：大阪城天守閣と堺市博物館，山口県政資料館

・内容等

１　23日は，今後の研究計画について具体的に検討した後，午後は大阪城天守閣と堺市博物館に赴いて，特別展「秀吉の城」と地域展「激動の時代『慶長』を掘る」を，解説付きで見学し，意見交換を行った。

２　24日からは，山口市で開催された第17回中国・四国地区城館調査検討会に合流した。「資料からみた中世城館跡」という統一テーマで，戦国期までに機能を停止した後，文献史料などにいかに記録されているか，が問題にされた。史料がなくとも遺物自体に語らせてきた考古学が，文献史学に対して共同研究を提案しているとも評価できよう。歴史地理学の立場から開催地の山口に即して言えば，近世に作成された「山口古図」の解釈が焦点となる。

○第５回研究会

・テーマ：特集展示「元禄の堺大絵図―巨大都市図を歩く―」の見学と堺に関する研究発表，など

・日時：平成25年１月26～27日（土～日）

・場所：歴博会議室など

・内容等：

１　26日（土）は，特集展示「元禄の堺大絵図―巨大都市図を歩く―」の見学と討論を行った後，ゲストスピーカーとして藤本誉博氏（今治城・今治市河野美術館）に「戦国期堺の『自治』をめぐって」と題した話題提供をお願いし，討論した。

２　27日（日）は，同じくゲストスピーカーの吉田　豊氏（堺市博物館）による「近世における堺港の変

遷」に関する話題提供を踏まえ，議論を積み重ねた。さらに，今後の打ち合わせも行った。

○第６回研究会

・テーマ：博多津の現地踏査

・日時：平成25年３月７日（木）

・場所：赤煉瓦文化館（福岡市文学館）など

・内容等：堺と同様，中世に海外に開かれた港町と言える博多を研究対象として取り上げ，福岡市教委の大庭康時氏にお願いし，発掘調査の最新状況について赤煉瓦文化館でご説明を受けた後，巡検で現地を訪れ，実地で確認した。

○第７回研究会

・日時：平成25年３月13～14日（水～木）

・場所：大津市歴史博物館；大阪歴史博物館・堺市立町家歴史館（清学院）など

・内容等

１　13日（水）は，大津町に関する大津市歴史博物館の展示に併せて企画した。大場修・京都府大教授による「近世大津町絵図」と題された研究発表とそれにまつわって，議論をした。さらに，展示担当の学芸員，高橋大樹氏による解説の下，熟覧した。

２　続いて14日は，午前中にメンバーの大澤氏による解説の下，大阪歴史博物館の特別展「天下の城下町大坂と江戸」を見学した。午後は堺市内に移動し，国の登録有形文化財である片桐棲龍堂を中心に踏査して，堺環濠都市内の清学院にも巡検は及んだ。

○第８回研究会

・テーマ：詳細で精密な絵図が作成された鳥取城下町に関する研究会と鳥取県立博物館所蔵の城下町絵図の熟覧。

・日時：平成25年３月20～21日（水～木）

・場所：鳥取県立博物館

・内容等：

１　20日は，ゲストスピーカーの塚本章宏氏より，ｉPad2のアプリを利用して，安政５（1859）年「鳥取城下全図」を古地図ぶらりに載せ，市民への啓蒙に生かした試みについて報告された。それに関連させ，国立歴史民俗博物館での特集展示でｉPad2を用いた展示補助システムについても，メンバーの高屋麻里子氏から説明を得た。市民の反応や今後の展開に関する可能性も含めて，議論した。

２　21日は，前日に紹介された「鳥取城下全図」に加え，「大切図」（正徳５年〈1715〉，享保11年〈1726〉，天保14年〈1843〉の３時点）など，鳥取県立博物館所蔵の城下町絵図を熟覧した。

○第９回研究会

・テーマ：現在地に17世紀中葉に移転し，幕末に開港された新潟を対象とした踏査と絵図の熟覧。

・日時：平成25年３月23～24日（土～日）

・場所：新潟市歴史博物館；小澤家住宅・新潟市文化財センター

・内容等

１　23日は，新潟の港町と日和山などを踏査しつつ，新潟市歴史博物館まで赴き，同館所蔵の絵図を熟覧しながら，議論した。

２　24日は，新潟市の文化財指定を受けている小澤家住宅について，丁寧な解説の下，見学した。午後は，新潟市文化財センターで遺物を見学しつつ，近世新潟町跡の発掘調査について説明を受け，討論した。

４．今年度の研究成果

「堺大絵図」の修理が完了し，デジタル撮影したデータを用いて，高精細画像構築という最終的な目標に向けた努力を重ねた。一方で，同絵図に示された土地区画について，建築遺構のみならず，考古学的成果からも検証し，同絵図が作成された元禄期の状況を押さえるための読みの作業も進めた。さらに，遺物や遺構から戦国期まで遡る検討を進めるため，考古学的成果によるデータの整理も行った。修理に特に関わらせた論点に絞って，夏にチェコ・プラハで開催された国際歴史地理学会議で報告を行い，国際学界にも発信し，反響を得た。

最終年度であるゆえ，その成果の一部は，特集展示の形で披露した。

環濠都市，堺の町は南北にやや長く，紀州街道が縦断している。それと直交する大小路が，摂津国と和泉国との境界線になっていた。摂津国堺北荘（大小路以北）と和泉国堺南荘の描かれ方は，互いに大枠では類似しながらも，そもそも別々に作成されたと考えられるが，特集展示では，共同研究の成果の一部として，デジタル上で一枚に接合させる形でプリントアウトし，床面に張った。作成された元禄時点でも南北は別の図と意識されていた筈で，今回の展示で史上初めて，南北を１枚の形で提示できたと言えるのである。

１枚に提示したからこそ見えてきた論点として，ここでは２点を掲げるに留める。

一つは，海岸線近くに朱線とともに，その海側の区画には茶色の四角い付箋が貼られているが，大小路の北側，すなわち摂津国側は，太い墨線に代わっており，四角い付箋の位置は，一部は，陸側にも付けられていると観察できた。これは，「町屋海ニ成る」の注記をも勘案すれば，元禄二年の作成以降に，後退した海岸線が注意深く書かれているのであり，元禄二年当時の区画が，そのままでは機能しておらず，付箋は，そのままの地代はとれない区画に付けられているという解釈は成り立つと思われる。その解釈が妥当なら，陸側でも，海側でも同様であると言え，付箋の位置に関する観察結果とも矛盾しない。今後の更なる検討が必要である。

２点目として，大小路より南側で，和泉国に属する宿院・念仏寺（開口神社）の区画とともに，その北側に位置する天神・奉行屋敷について，南北・東西の長さに関する注記に注目した。長さを相互に比較すると，奉行屋敷は，他の３区画の大きさを勘案して，計画的に設定された可能性がある，との発想を得た。それ以外の３区画は，その周りに入れ込むことで調整可能だったろうし，通りに対する対応関係は，東側に１区画分ずれたりしていて，一筋縄ではないが，何らかの計画性は感じ取れよう。

すなわち，南の念仏寺と北の天神の区画は，ほぼ同様の大きさであるのに対し，奉行屋敷は，宿院の大きさに類似しており，方角は90度曲げる形で入れ込まれた，との発想である。奉行屋敷の「表」がやや短いのは，東側に７間５尺２寸の「丑寅角屋敷」があるため，と考えられる。

特集展示が終わった後の方針としては，玉井副代表とも打ち合わせ，元禄２年「堺大絵図」を全国の近世都市ならびにそれが描かれた絵図に位置づけるために，各地で開催した。各々における検討結果は，上述した通りであり，ここでは，２側面について提示するに留める。

一つは，江戸時代前期に都市プランの改変を受けた点で，堺は，今回，踏査対象とした新潟や博多はもちろん，城が置かれて城下町化が試みられたであろう，近隣の兵庫とも共通する，という点である。城下町の

みならず，港町にとっても，近世前期は，大変革の時代だったのである。

二つ目は，土地区画までを描く大縮尺の絵図が，元禄期にこそ作成できたという可能性で，地図発達史に関する論点と言える。この２点を考える際に，大津町は重要なフィールドとなり，大津城の復原が検討課題である。

５．全期間の研究成果

国立歴史民俗博物館で開催した特集展示では，今年度の成果の一部を披露しようと試みたが，展示の機会は，研究成果をまとめるに当たっても，契機としてやはり大きかった。最大の成果と言えようし，上述した通りである。

１点のみ補足する。今回の展示では，普及が著しいｉPad2を用いた展示補助システムを構想した。観覧者自身によって持ち込まれたｉPad2を用いたシステムは，様々な点で難しいと判り，会場に常設したｉPad2を活用する方針に変更したが，会期中におけるシステムのメンテナンスに課題が残る結果となった。また利用者側にとっては，利用できない時間帯が出たり，そもそも利用が，操作に慣れた一部の者に限られたり，などの課題が残った。とはいえ，元禄期の「堺大絵図」に示された土地区画が現代の堺にまで辿れることを理解してもらうには，やはり有効な手段だったと言えよう。判り易い展示のためには今後とも取り組むべき課題だと思われる。

「堺大絵図」の修理が完了して，付箋なども全てデジタル撮影してあり，検討の進展に従って，高精細画像に組み入れられるように配慮した。そして，そこに示された土地区画について，建築遺構のみならず，考古学的成果からも検証し，同絵図が作成された近世前期の状況を押さえられる基盤は整った。経緯度を与えることで，GISによる高精細画像の構築も視野に入れつつ，戦国期の復原について，戦国期の遺物・遺構まで遡って考古学的成果を検証して，戦国期の都市構造に迫ることも可能なシステム設計である。

国際学界への発信は，３年間とも努力した。

さらに，17世紀になると大坂が，江戸幕府の肝いりで天下の台所として大規模土木工事も伴って整備された。その中で，兵庫と尼崎を含む大阪湾，引いては瀬戸内や日本列島全体との流通関係をも念頭に置きつつ，堺の位置づけを試みた。流通の拠点としての堺が描かれた同絵図に新しい光を当てる試みは，達成されたと言えよう。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎藤田　裕嗣　神戸大学大学院人文学研究科・教授
　鳴海　邦匡　甲南大学文学部・准教授
　松尾　信裕　大阪城天守閣・館長
　大澤　研一　大阪歴史博物館・学芸員
　嶋谷　和彦　堺市文化観光局文化部文化財課・学芸員
　高屋麻里子　筑波大学システム情報系・研究員（非常勤）
　青山　宏夫　本館研究部・教授
　小島　道裕　本館研究部・教授
　岩淵　令治　本館研究部・准教授

○玉井　哲雄　本館研究部・教授

（２）「高松宮家伝来書籍等を中心とする漢籍読書の歴史とその本文に関する研究」2011～2013年度
（研究代表者　静永　健）

１．目的

本公募研究は，高松宮家伝来禁裏本等のコレクションの中から，特に漢籍に重点を置き，その読書歴史（何を，どのように読んだか）と，またその本文についての精密な調査を行い，それらの書籍が，何時，どのようにして我が国に伝来したのか，そして宮家所蔵となる過程にどのような事実があったかを究明するものである。

中でも『古文孝経』や『周易抄』,『論語集解』,『二十一史』,『白氏文集』については，宮内庁書陵部蔵本等との比較調査を通じて，日本における漢籍の受容とその展開のありかたを具体的に把握する。例えば高松宮本の中に室町前期尊円親王筆と伝わる「琵琶行」および「長恨歌」があるが，これら白楽天の漢詩は，現在一般に通行している本文と著しい異同がある。その本文系統の考察は本研究代表者静永および分担者の神鷹，陳などがこれまでにも他の伝来資料をもとに随時分析をすすめてきている。今回，歴博に所蔵される高松宮家伝来禁裏本に存するこれら白楽天の詩巻を中心に，日本の全国各地に伝来している白詩旧鈔本を整理し分析することで，我が国の平安中後期からおよそ室町期までに至る「知」の体系とその伝承過程を究明したい。

研究期間内には，これらの文献資料の公開（写真版等による出版）と分析を行い，内外の研究者の利用に便ならしめたい。また，年数回に分けて行う調査活動のうち１回は，テーマに応じて，中国・韓国等，海外の文献学研究者をも招き，これらの資料を「東アジア」の視点から眺めた意義について，共同調査と研究懇談会を開催し，その知見を更に深めてゆきたい。なお，この研究は，もちろん和書（和歌文献など）の研究促進にも役立つ。『和漢朗詠集』や中世の『和漢聯句』などの漢籍と交響する和歌文学についても，中国文学×日本文学の垣根を超えて，新たな知見が提示できるものと思う。

２．今年度の研究目的・計画

第二年目である本年度は，昨年度に引き続いて歴史民俗博物館の当該資料の本文についての調査を行う。特に昨年度の調査において，その研究の重要性が改めて確認された中世日本の禅僧万里集九（ばんり・しゅうく）の漢詩文集『梅花無尽蔵適要』や中国元時代の印刷本『陸放翁詩集』，また南宋・黄善夫刊本『史記』等に関しては，精密な調査を要する。また11月には歴博国際シンポジウムの一つとして漢籍に関する公開シンポジウムを開催し，内外の漢籍および中国学ならびに日本史学・日本文学の研究者を招き，日本に残る貴重な漢籍資料について総合的な意見交換を行う。これらの活動によって，歴博のみならず，日本各地に残る貴重な漢籍について，その意味を根底から再考することを目指すものである。

３．今年度の研究経過

第一回研究会　５月20日（日）　於歴博

報告①静永健「胆沢城出土漆紙文書『習書：文選巻第二』について」
報告②神鷹徳治「高松宮所蔵古活字本『白氏文集』について」
第二回研究会　９月23日（日）　於歴博
報告①土屋聡「六朝石刻の字体について」
報告②中尾健一郎「歴博蔵『梅花無尽蔵摘要』について」
打合せ①11月歴博国際シンポジウムの開催について
第三回研究会　平成25年２月23日（日）　於歴博
報告①水口幹記「蓬左文庫蔵『天文図像玩占』について」
総括①11月歴博国際シンポジウムの開催について
打合せ①平成25年度の活動計画
打合せ②『歴博研究報告』特集号について
歴博国際シンポジウム　11月２日（金）・３日（土）　於歴博講堂
「東アジアをむすぶ漢籍文化―敦煌から正倉院，そして金沢文庫へ―」
“HANJI漢籍”：Booksa Connection in the East Asia
共催：神奈川県立金沢文庫
後援：(財) 東方学会・中唐文学会・日本中国学会・和漢比較文学会
〔第一日目〕
館長挨拶：平川南
趣旨説明：静永健
基調報告『東アジアをむすぶ漢籍文化』司会：静永健
報告①神鷹徳治「敦煌と繋がる日本の漢籍―旧鈔本と唐鈔本」
報告②金卿東（韓国・成均館大学校教授）
「朝鮮文献に見える『白氏文集』―「何処難忘酒」詩をめぐって」
報告③王勇（中国・北京大学教授）「東アジア文脈における「漢籍」の誕生」
第一部『敦煌学一百年』司会：大渕貴之
報告④許建平（中国・浙江大学教授）「敦煌写本『詩経』研究の総括と展望」
報告⑤影山輝國（実践女子大学教授）「『論語義疏』の声点について」
コメンテーター：神鷹徳治
第二部『歴博所蔵の漢籍をめぐって』司会：井原今朝男
報告⑥中尾健一郎「二つの『梅花無尽蔵』抄本」
報告⑦汪春泓（香港嶺南大学教授）「劉向，劉 歆と『漢書』の関係について」
報告⑧陳翀「上杉本『史記』について」
報告⑨李慶（金沢大学教授）
「近代日本の『文選』研究―斯波六郎先生『文選索引』編集とその周辺」
コメンテーター：土屋　聡
〔第二日目〕
第三部『日本の〈ふみくら〉と旧鈔本の世界』司会：神鷹徳治

報告①大渕貴之「王羲之書「楽毅論」の「千載一遇」句について」
報告②陳尚君（中国・復旦大学教授）「『先秦漢魏晋南北朝詩』の増補修訂の主要成果」
報告③杜暁勤（中国・北京大学）
「日本所在の旧鈔本より論じた『白氏文集』前集の編集形式と文体分類」
報告④住吉朋彦「『白氏文集』巻十六の本文について」
コメンテーター：静永　健
第四部『東アジアの文選学』司会：土屋聡
報告⑤佐竹保子（東北大学教授）「九条家本『文選』について」
報告⑥游志誠（台湾彰化師範大学教授）「日本旧鈔本『集注文選』研究」
報告⑦傅剛（中国・北京大学）
「日本の旧鈔本から見た版本以前の『文選』及び鈔本と版本の関係について」
コメンテーター：陳　翀
第五部『聖教と漢籍―中世の知の実像に迫る』司会：高橋一樹（武蔵大学教授）
報告⑧盧盛江（中国・南開大学教授）「空海『文鏡秘府論』の対属論について」
報告⑨堀川貴司「五山僧の別集に見る偈頌と詩」
報告⑩西岡芳文「称名寺聖教類について」
報告⑪福島金治「北条実時本『斉民要術』をめぐる京・鎌倉のひとびと」
コメンテーター：井原今朝男

第一回資料調査　４月21日（土）～22日（日）奥州市埋蔵文化財調査センター
調査者：静永健，土屋聡。
第二回資料調査　５月19日（土）『梅花無尽蔵摘要』等の調査　於歴博
調査者：静永健，神鷹徳治，中尾健一郎。
第三回資料調査　６月11日（月）～13日（水）神宮文庫
調査者：土屋聡。
第四回資料調査　９月24日（月）元版『陸放翁詩集』等の調査　於歴博
調査者：静永健，陳翀，大渕貴之。
第五回資料調査　11月４日（日）神奈川県金沢文庫
調査者：静永健，井原今朝男，福島金治，陳翀。
第六回資料調査　11月９日（水）～11日（金）名古屋市蓬左文庫
調査者：水口幹記。
第七回資料調査　平成25年２月22日（金）東京国立博物館
調査者：静永健，陳翀。
第八回資料調査　平成25年２月25日（月）～28日（金）大東急記念文庫等
調査者：中尾健一郎。

海外学会での研究発表および国際シンポジウム開催のための打合せ（招聘講師との事前交渉）
８月24日（金）～28日（火）第10回中国文選学会参加　於中国河南省開封市（河南大学）
静永　健「日本八至九世紀考古文献所見《文選》断簡考」

陳　　狆「《文選集注》李善表巻之復原及作者問題再考―以慶應義塾大学図書館蔵旧鈔本《文選表注》為中心」

中尾健一郎「《陶淵明集》与《文選》」

４．今年度の研究成果

本年度は，昨年度からの研究の積み重ねの上に，いよいよ充実した研究成果の公開と，それに伴うさまざまな活動が展開された。その中核となる部分は，この共同研究に参画している各研究分担者の積極的な研究活動に負うものであるが，特にその具体的なものを挙げるとすれば，以下の通り，三つのトピックに分類して紹介できる。

①個々の研究の深化：研究分担者の一人梅光学院大学准教授の中尾健一郎氏は，本年10月，これまでの氏の独自の研究をまとめた単著『古都洛陽と唐宋文人』（汲古書院）を出版された。中尾氏個人の研究課題である中国唐宋時代の文人詩歌は，我が国においては中世の五山文化の模範となったものである。そこで中尾氏に調査を依頼したのが室町時代の禅僧万里集九の漢詩文集『梅花無尽蔵摘要』であるが，この書物は，これまで十分な書誌調査が行われていなかったものである。今回，歴博所蔵本（田中穣氏旧蔵コレクション）を核として，中尾氏によって全国各地に所蔵される諸本が詳細に比較検討され，その系統が明らかになった。また本年11月『“文集”閑談：白氏文集は〈もんじゅう〉か〈ぶんしゅう〉か』（游学社）を出版された明治大学教授の神鷹徳治氏には，歴博所蔵の江戸初期刊本『白氏文集』（那波道円刊本，高松宮家伝来禁裏本コレクション）の調査をお願いしたが，この書籍には，巻三・巻四（「新楽府」詩巻部分）をはじめ，多くの箇所に重要な書き入れが発見され，宮内庁書陵部所蔵の同刊本や，同じく宮内庁書陵部に所蔵される藤原時賢元亨四年（1324）写本との関連性も明らかとなった。また研究代表者である静永についても本年10月単著『唐詩推敲：唐詩研究のための四つの視点』（研文出版）を刊行したが，本書には歴博所蔵の『千載佳句』（中山忠敬旧蔵，鎌倉写本）や，正倉院（宮内庁），東京国立博物館，九州国立博物館，そして五島美術館等に所蔵される貴重な写本や文物の図版を豊富に取り入れることができた。本共同研究のお蔭であると思い，深く感謝しているところである。中国古典の最先端の研究が，我が国所蔵の各資料によっても十分展開可能であることを示したものである。また静永が主編者となって『東アジアの短詩形文学：俳句・時調・漢詩』（本年５月，勉誠出版）も刊行されたが，この共著書には静永をはじめ，陳狆・中尾健一郎・土屋聡・大渕貴之・高田宗平の当共同研究分担者が執筆に参画し，本研究の成果に基づく，それぞれの新しい知見が示された。以上のように本年度の特筆すべき成果の一つに，各分担者の研究の深化とともに，またそれらの個々の成果がさまざまな著書によって直ちに公開されていることが挙げられよう。

②漢籍研究を通じての内外の研究者間の協力・連携：我が国における漢籍文化の調査研究は，海外，特に中国や台湾，韓国等の研究者からも近年大いに注目されているところである。また，これら漢籍資料の調査と分析は日本国内だけの視点では，その価値を十全には捉え難く，必ずや海外の研究者との連携が必要である。このことに関しては，特に研究分担者のうち広島大学准教授の陳狆氏，また九州大学専門研究員の大渕貴之氏のまことに献身的な尽力によって，歴博国際シンポジウム「東アジアをむすぶ漢籍文化―敦煌から正倉院，そして金沢文庫へ―」の開催が実現した。日本・中国・韓国各国からの研究者20数名による報告とディスカッションは，来場者からも予想外の好評を得た。折しもこの2012年は，東アジア各国の政治・外交関係において，領土問題等にわかには解決することの困難な問題が表面化し，一部にはこのようなアジア諸国

の研究者が集う研究会の開催が出来ないのではないかとの声も聞かれた。しかし，このような時こそ各国研究者同士による学術交流には大きな意義があり，同様の意見は，このシンポジウムに参加された海外の研究者，また来場された多くの方々のアンケートの中からも見出された。なお，このシンポジウム終了後，北京大学中文系中国古文献研究センターからは，この歴博国際シンポを第一回としてカウントし，第二回の国際シンポジウムを開きたい旨の申し出があり，目下平成25年度中の開催が計画されているところである。

③日本史研究と中国古典研究との協力・連携：我々の共同研究の最大の特色は，副代表である井原今朝男教授をはじめとする「日本史研究」と，代表である静永を含む「中国古典研究」とのコラボレーションである。この二つの研究は，近世における「国学」と「漢学」の乖離，また明治以降の学制の新たな枠組みによる分離（社会と国語），さらに近代科学の細分化傾向の下，これまで明確な協力・連携体勢が無かった。しかし本来，日本の伝統的学知の枠組みにおいて，中国古典の学問と日本の思想史とは不即不離の関係にあり，また細分化するよりは融合化の傾向にあったと言える。日本の中世（鎌倉・室町期）の社会と思想を考えるにあたって，その時代に読まれていた中国古典についての考察は，大変重要な意義を持つものと思われる。このことの指摘は11月２日・３日に開催された歴博国際シンポジウムの最終第五部のディスカッション「聖教と漢籍―中世の知の実像に迫る」においても強調されたが，まさしくこの歴史学と中国古典文学研究との融合こそが，中世日本を解明してゆく上で，今後も重要視されてゆくであろう。特に北条実時をその実質的な始祖とする「金沢北条氏」とそこに集積された図書資料群「金沢文庫本」の研究の進展には，このような共同研究が有効であろうし，また分担研究者水口幹記氏によって調査・分析がすすめられている名古屋市蓬左文庫蔵『天文図象玩占』など，全国各地の所蔵古典籍（特に和書であるのか漢籍であるのかが明確でない資料）の考察も，今後大いに期待される分野である。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎静永　　健　九州大学・准教授
　神鷹　徳治　明治大学・教授
　陳　　狆　広島大学・准教授
　中尾健一郎　梅光学院大学・准教授
　福島　金治　愛知学院大学・教授
　水口　幹記　立教大学・助教
　小倉　慈司　本館研究部・准教授
　大渕　貴之　九州大学・専門研究員
　住吉　朋彦　慶應義塾大学附属研究所斯道文庫・准教授
　土屋　　聡　岡山大学・講師
　西岡　芳文　神奈川県立金沢文庫・学芸課長
　堀川　貴司　慶應義塾大学附属研究所斯道文庫・教授
○井原今朝男　本館研究部・教授
　高田　宗平　本館研究部・外来研究員

（３）「柳田國男収集考古資料の研究」2011～2013年度
（研究代表者　設楽博己）

１．目　的

国立歴史民俗博物館には，柳田國男が明治後期に収集した考古資料が収蔵されている。収集された遺物には，「ソロイヨフカ」という注記があることからサハリンで採集されたと推測される磨製石斧や，北海道の縄文時代や続縄文時代の土器，「長野県下伊那下川路」で採集された打製石斧などがあり，合計66点の資料からなっている。この資料は，柳田のご子息為正氏が成城の中原書店に寄贈したものを，歴博が収蔵したもので

あり，素姓の正しいコレクションである。

本研究は，これらの資料の整理作業と分析を通じて，柳田考古資料の全体像を明らかにするとともに，それを基礎に柳田の考古学に対する考え方の遍歴をたどり，明治～昭和初期という，日本のあらゆる学問が科学的な様相を帯びてくる時期に，考古学と民俗学がお互いをどのように意識しながらそれぞれどのように個々の学問の体系を構築していったのか，人類学や民族学，文献史学など周辺の学問とのかかわりあいのなかで明らかにしていくことを目的とする。

柳田がサハリンにわたった明治後期は，日露戦争によってサハリン南部が日本領となった時期である。柳田の渡海の目的や考古遺物を収集した目的は何であったのか。おそらく日本人とは何かという問題の解明が，目的のひとつであったと推測されるが，それは日本の領土拡張政策と深くかかわる動きであった。当時の諸学界をあげての研究テーマであった日本民族起源論争のなかで柳田のサハリン渡航目的を理解することを手掛かりに，周辺学問のこの問題に対する動きの意義を探ることを目的とする。

個別の主要な目的は，以下のとおりである。

①柳田旧蔵考古資料の整理と分析

②民俗学と考古学の方法論確立過程における相互交渉の理解

③柳田の考古学に対する考え方の変化とその理由の解明

④近代史学史における考古学・民俗学の位置づけ

⑤柳田國男旧蔵考古資料の学問的意義の検討

２．今年度の研究目的

考古班は，昨年度に行った柳田考古資料の実測・写真撮影に引き続き，トレース・版下作成など，基礎的な整理作業をおこない，その年代や系統などの基本的性格をおさえることを目的とする。民俗班は，成城大学民俗学研究所に収蔵されている「柳田文庫」を手がかりとして，考古学関連書籍の調査を行い，柳田が民俗学を独立した学問として構築していった時期に，考古学に対してどのような関心を持っていたのかを検討する。また，共同研究員全員でサハリンを訪問して「樺太紀行」において柳田國男が訪れた遺跡群を調査し，考古学・民俗学双方の視点から，柳田が考古資料をどのような目的で収集したのか，樺太紀行が柳田のなかでどのような意義をもっているのかの検討を行う。

３．今年度の研究経過

2012年度は研究会を１回開催したほか，共同研究員全員でサハリンへの資料調査をおこない，柳田國男の『樺太紀行』に記載されている遺跡の巡検を行った。また，柳田國男収集考古資料の実測・トレース作業をおこなった。以下にその概要を記す。

【研究会】

第３回研究会　2012年７月６日～７日　於：成城大学民俗学研究所

＜７月６日（金）＞

松田睦彦「柳田文庫における考古学関連資料について」

柳田文庫の見学，柳田文庫の熟覧

＜７月７日（土）＞

甲元眞之「ヴィクトリア朝後期の人類学と柳田國男」

熊木俊朗「サハリンの考古学調査研究史　―幕末から1990年代まで―」

福田正宏「近年の研究動向からみたサハリンの先史文化」

設楽博己「９月のサハリンの予定，今後の計画など」

【資料調査】

サハリン調査　2012年９月21日（金）～26日（水）

＜概要＞

９月23日（日）

柳田國男の樺太紀行に記載がある，「さかいはま」「ドブキイ」の現地を確認するため，栄浜（スタロドゥフスコエ）周辺の遺跡群の調査を行った。訪れた遺跡はナイブチ遺跡，アイⅠ遺跡，アイⅡ遺跡，スタロドゥフスコエⅡ遺跡，スタロドゥフスコⅢ遺跡，栄浜チャシなどである。

９月24日（月）

柳田國男の樺太紀行に記載があり,柳田國男旧蔵考古資料の石器のラベルにも記載がある,「ソロイヨフカ」の現地を確認するため，ススヤ川河口の遺跡群の調査を行った。訪れた遺跡はソロイヨフカの集落に近い，鈴谷（ススヤⅠ）貝塚，鈴谷南貝塚，江ノ浦遺跡である。

９月25日（火）

サハリン州立郷土博物館において，サハリン出土の考古資料および民俗資料の調査を行った。また，サハリン国立総合大学考古学博物館において，ソロイヨフカ遺跡群から出土した資料をはじめ，関連遺跡の出土資料の調査を行った。また，サハリン国立総合大学との学術研究交流に関する協定書調印式を行った。日本の樺太統治時代に作られた，ユジノサハリンスク市内にある護国神社跡地についても訪問した。

４．今年度の研究成果

第１回研究会は，松田睦彦が初期の柳田の蔵書のなかから，考古学関係の文献にあたり，赤線や付箋の有無を調査した。その結果，東大の『古墳横穴及同時代遺物発見地名表』には横穴墓に関して付箋・押紙をかなりの量貼り付けていること，雑誌『民俗』では横穴墓についてかなりの記載をしていること，人類学雑誌にはかなり多く赤でのチェックとラインが引いてあること,『日本考古学』の書評に赤線があること，坪井正五郎の『カラフト石器時代遺跡発見の鳥骨管』にも赤線が引いてあることなどを確認した。その一方，鳥居龍蔵の本にはそのような形跡はなく，沼田頼輔『日本人種新論』には付箋も入っていないことなどもあきらかになった。今後，柳田の山人論における人類学，考古学の参照枠が何なのか，さらに調べる必要があることが課題として認識された。

ゲストスピーカーの甲元眞之は，19世紀後半の植民地主義，進歩主義，キリスト教義，ロマン主義，進化論など欧米における思潮の流れを踏まえて，タイラーやモルガン，ラボック，トムゼン，ゴンムなどの人類学者や考古学者あるいはそれらの相互の影響関係のたどった道を明らかにし，柳田が触れた人類学の潮流を整理された。それにもとづいて柳田が人類学の方法論をどのように咀嚼したのかについては，翻訳を推奨した洋書からそれがよくわかるとする。柳田の研究は，イギリス流からドイツ流へと転換したのが重要であることを指摘する。異民族とは何かを追及する19世紀的人類学から，1930年代に日本的な世界は何かへ，戦後は，稲作が出発点となってあらゆる日本的なものを説明する方向へと回帰していった歴史をジュネーブでの

経験などの背景を踏まえて見通す。

熊木俊朗は，サハリンの考古学史をふりかえり，柳田が訪問した遺跡の特徴を整理した。柳田が訪れた遺跡の調査歴や認知の状況など，今後の資料整理にいずれも役立つ情報であろう。日本国内のサハリン関係考古資料の所在を論じ，柳田のサハリンの足跡については，樺太日々新聞を調べてみる必要があるのではないかとした。

福田正宏は，サハリンの地域文化とその編年を論じた。近年のサハリンの考古学調査状況を整理し，これまで様相が不明確であった東部地域の文化的状況が明らかにされつつあることを指摘した。それらの文化的な内容について，豊富な資料を駆使しつつ整理され，サハリン現地調査の準備として有効であった。

現地調査で訪れた遺跡は，ナイブチ遺跡，アイⅠ遺跡，アイⅡ遺跡，栄浜Ⅱ（ストラドフスコエⅡ）遺跡，ストラドフスコエⅢ遺跡，ソロイヨフカ，鈴谷（ススヤⅠ）貝塚，鈴谷南貝塚，江ノ浦遺跡などである。柳田の足跡をたどり，考古学と民俗学の合同研究者で遺跡を訪れ，サハリン国立大学のワシレフスキー教授の懇切な解説をお聞ききして，サハリンの遺跡に対する認識を深めることができ，柳田がサハリンの遺跡で遺物を採集した目的や考え方などを理解するための大きな足掛かりを得ることができた。

また，今回の訪問はサハリン国立大学と歴博の間で協定を結ぶことを目的の一つとしたものであり，25日には無事調印式をおこなうことができた。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

熊木　俊朗　東京大学大学院人文社会系研究科・准教授
佐藤　健二　東京大学大学院人文社会系研究科・教授
高瀬　克範　北海道大学大学院文学研究科・准教授
福田　正宏　東京大学大学院新領域創成科学研究科・准教授
和田　　健　千葉大学国際教育センター・准教授
小池　淳一　本館研究部・准教授
松田　睦彦　本館研究部・助教
山田　康弘　本館研究部・准教授
◎設楽　博己　東京大学大学院人文社会系研究科・教授
○工藤雄一郎　本館研究部・助教

［リサーチ・アシスタント］

大澤　正吾　東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

［研究協力者］

甲元　眞之　熊本大学文学部附属永青文庫研究センター・センター長

［開発型共同研究］

「縄文時代における人と植物の関係史」2010～2012年度

（研究代表者　工藤　雄一郎）

１．目　的

1980年代以降，低湿地遺跡の発掘調査事例が増加したことから，通常の遺跡では残りにくい植物遺体の検出例やその研究が蓄積されてきている。その結果，この20年で縄文時代の植物利用に関する研究が著しく進展し，植物利用の実態が解明されてきた。特に，縄文時代早期の段階でウルシやアサ・ヒョウタンといった外来植物が存在していたことや，縄文時代前期以降の東日本では，定住的な集落遺跡周辺にクリなどの人為的な生態系が維持され，野生植物を利用するだけでなく，植物の生育環境にも積極的に働きかけた植物利用が行われていたことなどが明らかになってきた。この中には，食料資源として利用したものだけではなく，建築・土木用材，塗料，繊維など，様々な形で利用されていた植物が含まれている。

縄文時代の人々が高度な植物利用技術を有していたことは一般的に理解されつつあるが，それぞれの種の利用が「いつ」，「どのように」始まったのか，また，縄文時代以降の環境変動史とどのように関係していたのか，またどの程度，縄文時代の人々が生態系を改変し，人為的な環境が作られていたのか，これらの諸点が正確には把握されていない。

本研究の目的は，縄文時代の人と植物利用の関係史を生態学的に明らかにすることである。そのため，縄文時代の植物利用の実態について，現在明らかになっている遺跡出土資料を再検討し，人が積極的に働きかけたと思われる種の時空間的分布傾向を整理する。検討の主な対象とする植物は，縄文時代の人々と関わりが特に深い，クリ，ウルシ，トチノキ，アサ，ヒョウタン，ササゲ属やダイズ属などのマメ類，ヒエなどである。単に出土資料からその利用方法を検討するだけでなく，現在の植物利用との比較や，それぞれの種の生態的特徴や分布などを検討し，年代測定，木材化石分析，花粉分析，種実遺体の分析，デンプン分析，DNA分析などの最近の研究成果を融合して，縄文時代の植物利用の在り方を体系的に示すことを目的とする。

２．今年度の研究目的

24年度は３回の研究会開催を予定しているほか，東京都下宅部遺跡の漆関連製品や植物遺体の研究を継続して進める。また，これと並行し，茨城県大子町のウルシ栽培地の花粉飛散調査などを行い，縄文時代の植物利用を検討するための比較資料を収集する。また，24年度は最終年度にあたるため，３年間の研究成果を総括し，成果を広く還元するための一環として，第86回歴博フォーラム「ここまでわかった！縄文人の植物利用」を開催する。

３．今年度の研究調査

・第６回研究会：2012年６月２日（土）・３日（日）　於：東村山市八国山たいけんの里

１．圧痕法からみた九州縄文時代前半期の植物利用（真邉彩・小畑弘己）

２．朝鮮半島櫛文土器の栽培植物と植物利用―韓国栽培起源再考―（小畑弘己・真邉彩）

３．下宅部遺跡の土器と石器の残存デンプン粒（渋谷綾子）
４．王子山遺跡から出土した縄文時代草創期の炭化植物遺体の年代と同位体分析（工藤雄一郎）
５．王子山遺跡から出土した縄文時代草創期の炭化鱗茎の同定（米田恭子・佐々木由香）
６．研究報告執筆内容報告（全員）

・第７回研究会　2012年10月20日（土）・21日（日）　於：宮崎県椎葉村
椎葉村の焼畑見学，椎葉民俗博物館見学
＜ミニ研究会（於：民宿焼畑）＞
・デンプンは語る（渋谷綾子）
・麻について（篠崎茂雄）
・縄文人は何を食べたのか？―遺跡の種実の分析から分かること（佐々木由香）
・遺跡から出土する雑穀と雑草（那須浩郎）
・年代を測ると歴史観が変わる！（工藤雄一郎）
・現代焼畑と縄文農耕（小畑弘己）
・巧みに木を利用した縄文人―木材の樹種同定から分かること（能城修一）
・火山灰に埋もれた植物遺体からの古環境の復元―指宿市橋牟礼川遺跡の例（百原新）

・第８回研究会　2012年12月16日（日）　於：歴博
１．下宅部遺跡の底部敷物圧痕分析―土器製作に用いられた編組製品について―（真邉彩）
２．韓国新石器時代圧痕調査追加報告（小畑弘己）
３．下宅部遺跡の繊維試料について―現生標本との比較―（小林和貴）
４．研究報告の執筆内容，期限などの確認，フォーラム記録集の刊行について（工藤雄一郎）

第86回歴博フォーラム「ここまでわかった！縄文人の植物利用」
2012年12月15日（土）10：00～16：30　於：歴博講堂，参加者269名
・共同研究「縄文時代の人と植物の関係史」趣旨説明（工藤雄一郎）
・ここまでわかった！縄文人の植物利用（佐々木由香）
・マメを育てた縄文人（小畑弘己）
・縄文人が漆に出会ったのはいつ？（鈴木三男）
・適材適所の縄文人―下宅部遺跡―（千葉敏朗）
・下宅部遺跡の漆（永嶋正春）
・縄文人と植物との関わり―花粉から分かったこと―（吉川昌伸）
・イネと出会った縄文人―縄文時代から弥生時代へ―（那須浩郎）
・縄文人は森をどのように利用したのか（能城修一）
・討論（司会：坂本稔・工藤雄一郎）

４．今年度の研究成果

2011年度に引き続き，茨城県奥久慈でウルシ花粉飛散調査を進めた（吉川昌伸）。下宅部遺跡の資料については，下宅部遺跡の土器底部圧痕についてレプリカ法によって分析を進めたほか（真邉彩），下宅部遺跡から出土したウルシ属果実の同定を進め（吉川純子），繊維製品の分析も行った（小林和貴・鈴木三男）。他に，

宮崎県王子山遺跡の炭化植物遺体と土器内面付着炭化物および鹿児島県三角山１遺跡の土器内面付着炭化物の分析を進め，縄文時代草創期の植物利用と土器との関係について検討を進めた（工藤雄一郎）。

また，縄文時代との比較の目的で，島根県西川津遺跡から出土した弥生時代前期の漆液容器と傷跡のあるウルシ材，矢野遺跡から出土した弥生時代前期の漆パレットなど，漆関連遺物の14C年代測定を実施した（工藤雄一郎・坂本稔・永嶋正春）。

2012年度は合計３回の研究会を開催した。内容は2010年・2011年に行った研究・分析の報告が中心となった。また，研究会のうち１回は宮崎県椎葉村で開催し，椎葉勝氏の焼畑を見学し，焼畑での雑穀栽培や山間部での野生植物利用について議論を深めるとともに，ミニ研究会を開催し，調査に同行した学生向けの研究紹介も行った。2012年８月に中央大学で開催された，第13回国際花粉学会議（IPC-XIII）・第９回国際古植物学会議（IOPC-IX）合同大会の国際学会において，本共同研究の一部についても研究発表を行った。

このほか，昨年度に引き続き大型植物遺体の分析例のデータベース化のための文献集成を進め，歴博に所蔵されている報告書からの集成作業を完了した（百原新・小林弘和・工藤雄一郎）。

下宅部遺跡から出土した傷跡のあるウルシ杭を題材にして，石器でウルシに傷を付ける様子の復元画を製作した。また，ダイズ属のマメ利用について議論をより深めるため，ツルマメ利用とダイズ利用の２つのパターンの復元画を製作した。これらの復元画は以下で述べる，「第86回歴博フォーラム」においても活用し，本共同研究での研究成果を一般に伝えるにあたって効果を発揮した。

2012年12月15日（土）には歴博フォーラム「ここまでわかった！縄文人の植物利用」を開催した。これは，本共同研究の成果発表の一環として，縄文時代の植物利用研究の最前線をより一般向けにわかりやすく紹介することを目的とした講演会である。フォーラムでは工藤雄一郎が共同研究の趣旨説明をおこなった後，８本の報告と最後に討論をおこなった。まず，佐々木由香が最近20年の研究成果のトピックを，小畑弘己が土器圧痕研究から明らかになってきた縄文人によるマメの栽培化の問題を紹介した。鈴木三男は植物学の立場からウルシがいつ，どのように日本に入ってきたのかを紹介した。報告４～６（千葉敏朗・永嶋正春・吉川昌伸）は，共同研究での中心的な研究対象となった下宅部遺跡の研究成果に重点を置いたものである。そして，東アジアでの稲作の開始と縄文時代から弥生時代への移行期の稲作の問題を那須浩郎がまとめ，能城修一が遺跡出土木材の研究から，縄文人によるクリ・ウルシを中心とした森林資源の管理の様相を紹介した。

フォーラムの申込人数は12月初旬には定員を超え，当日の入場者数もきわめて多く会場は満席となるなど，一般にとっても身近な「植物」の利用の文化史に対する興味・関心の高さが改めて浮き彫りとなった。特に，縄文人によるクリやウルシの管理，マメの栽培化は学際的研究の最前線の成果であり，非常に好評だった。

なお，このフォーラムの記録集は，「ここまでわかった！縄文人の植物利用」として，2013年度に新泉社から刊行予定である。

５．３年間の研究の成果

本共同研究では，考古学・植物学・民俗学・年代学・地球化学などのそれぞれの異なる切り口から，「縄文時代の植物利用の解明」という共通のテーマについての活発な議論を行った。その結果，縄文時代の森林資源管理の問題や，遺跡周辺の人為生態系の広がり，ウルシやアサなどの栽培植物の利用の問題，マメの栽培化の問題など，お互いに問題点と現状での到達点を共有することができた。一方，民俗学の篠崎茂雄氏に共同研究員に加わっていただいたことで，アサの利用について議論を深めることができたほか，奥久慈のウル

シ畑での調査や椎葉村での焼畑の見学を通じて，現生の植物の観察を行うとともに，それらの利用の文化の現状を知ることができた点は，過去の植物利用を探る上でも極めて重要である。

３年間の共同研究で，進められた部分と進められなかった部分がある。下宅部遺跡の資料の分析は，今回の共同研究で最も多くの力を注いだ部分であり，2006年に下宅部遺跡の発掘調査報告書が刊行された時点では明らかになっていなかった植物利用や，古植生の変遷がより詳細なデータをもとに議論できるようになった。遺跡単位での徹底的な分析・研究と，その積み重ねが，縄文時代の植物利用を解明していく上で極めて重要であることを再認識できた。また，花粉飛散調査や，漆樹液採取実験などの基礎研究は，遺跡から得られたデータを解釈していく上で必要不可欠である。今回，ウルシとアサの飛散距離に関するデータが得られたこと，石器による漆の樹液採取について実験によって一定の見通しを得たことは，大きな成果である。

一方，当初，植物利用の全体像を縄文時代草創期から晩期まで，通時的に整理することを研究の目的の一つとしたが，３年間の研究期間内には網羅的なデータ収集には至らなかった。また，百原新と工藤雄一郎が中心となって進めてきた「遺跡出土大型植物遺体データベース」は，今後の基礎研究および文献探索において重要な資源となるものであるが，現状ではまだ報告書のコピーが終了した段階であり，データベース化して一般公開するには至っていない。今後，これらの課題についても積極的に取り組んでいき，縄文時代の植物利用の解明を進めていきたい。

６．共同研究員（◎は研究代表者，所属は2013年３月31日，共同研究終了時）

小畑　弘己　熊本大学文学部・教授
小林　和貴　東北大学学術資源研究公開センター植物園・教育研究支援者（2011年度～）
佐々木由香　（株）パレオ・ラボ・考古分析支援部統括部長
篠崎　茂雄　栃木県立博物館・主任研究員
鈴木　三男　東北大学・名誉教授
千葉　敏朗　東村山ふるさと歴史館・学芸員
辻　誠一郎　東京大学大学院新領域創成科学研究科・教授
那須　浩郎　総合研究大学院大学先導科学研究科・助教
能城　修一　森林総合研究所木材特性研究領域・樹種識別担当チーム長
百原　　新　千葉大学大学院園芸学研究科・准教授
吉川　昌伸　古代の森研究舎・代表
吉川　純子　古代の森研究舎・研究員
◎工藤雄一郎　本館・研究部・助教
坂本　　稔　本館研究部・准教授
渋谷　綾子　本館研究部・特任助教
永嶋　正春　本館研究部・教授
西本　豊弘　本館研究部・教授

［リサーチアシスタント］（所属は当時）

一木　絵理　東京大学大学院新領域創成科学研究科・博士後期課（2010・2011年度）
小林　弘和　千葉大学大学院園芸学研究科・博士後期課程（2012年度）

［研究協力者］（所属は当時）

石井　礼子　イラストレーター

真邉　　彩　鹿児島大学大学院人文社会科学研究科・博士後期課程

米田　恭子　（株）パレオ・ラボ分析調査研究部・研究員

「人の移動とその動態に関する民俗学的研究」2010～2012年度
（研究代表者　松田　睦彦）

１．目　的

戦後の日本の経済成長は都市部への大量の人口移動を引き起こした。戦後の人の移動の特徴は，出発地点，すなわち故郷との双方向的移動ではなく，故郷へ帰ることを前提としない一方向的移動であるとされる。つまり，一つの場からもう一つの場へと移動する場合，二つの場は断絶したものとされ，そこに生きる人間もどちらかの場に属した存在として，研究者の側からも，移動した人々自身の側からも語られるのである。その背景には，一定の場に軸足を置き，そこで生活を送る静的な存在としての人間認識が存在する。こういった認識は民俗学のみならず，これまで「出稼ぎ」や「移住」といった人の移動を研究対象としてきた社会学・経済史学・地理学等においても共通してみられるものである。しかしながら，このような視点は，実際には流動的で持続的な人々の移動を，固定的で一時的なものへと矮小化してしまう危険性を孕んでいる。移動を非日常的な状態として日常としての定住と対置することは，自らの置かれた状況に応じてさまざまな戦略・戦術を駆使する人々の生きる実態そのものをとりこぼすことにもつながりかねないのである。今日，Ｕ・Ｊ・Ｉターンのような団塊の世代の定年後の去就が注目を集めている。これは定年後の彼らの移動が都市への移動で完結したのではなく，現在でも持続していることを示している。つまり，人を静的な存在として捉え，人が一つの場のみとの関係性の中で生きることを前提とした研究では十分に分析することができない現実の存在が明らかになりつつあるのである。

本研究は，地方出身の都市生活者が常に移動の可能性を孕んだ動的な存在であるという前提に立つことで，人々の流動的な日常とその背景にある心意を捉え直すと同時に，都市や故郷という場の持つ意味を問い直すことを目的とする。すなわち，場によって人々を捉えるのではなく，人によって場の持つ意味を問い直すのである。本研究では，移動や場に関する従来の研究の方法論を再検討し，新たな理論的枠組みを設定した上で，人々の移動の実態に焦点を当てた実証的研究を行なう。その過程では，マイノリティとして特殊な状況を生きてきたアイヌや，独自の移動文化を育んできた沖縄の人々をも視野に入れる。また，隣接諸科学との協業による学際的研究を行なうことで多角的視野の獲得を目指すと同時に，人の移動とその実態に関する視点の重要性を共有したい。

以上のような作業は，人の生活を静的なものとし，人の移動を連続的・継続的に捉えない傾向にあったこれまでの都市論やふるさと論を相対化するものであると同時に，民俗学における場に頼った対象把握に再考を促すものである。

２．今年度の研究目的

今年度は共同研究最終年度のため，研究史の整理および新たな方法論の構築といった，前年度まで重点的

に検討を重ねてきた課題をふまえ，共同研究メンバー各自の分担課題についての進展を図る。研究会ではとくに，現代の人の移動を歴史的に位置づけるために，近世における移動の日常性について，また戦前の朝鮮半島への日本人の移動等について，ゲストスピーカーの協力を得て議論したい。

３．今年度の研究経過

今年度は４回の研究会を開催した。

【第１回研究会】

2012年７月６日・７日（於：国際ファッションセンター会議室）

［発表］

関口由彦氏（成城大学民俗学研究所・研究員）

「都市に生きる先住民族の移動性をめぐって―首都圏アイヌの文化伝承活動の事例から―」

関根康正氏（関西学院大学・教授・ゲストスピーカー）

「南アジア系移民の＜生活空間＞の構築にみるストリート・ウィズダム：ホノルルとロンドンの事例比較を通じて」

岩淵令治（本館研究部・准教授）

「江戸勤番武士の行動と表象」

森下徹氏（山口大学・教授・ゲストスピーカー）

「近世瀬戸内地域の新田開発と石工」

【第２回研究会】

2012年８月18日～20日（於：大韓民国蔚山広域市およびその周辺）

［発表］

呉昌炫氏（韓国国立民俗博物館・学芸研究士）

「植民地期漁業と漁民文化」

［調査］

方魚津・九龍浦（植民地期に日本人漁民が居留した漁村）

【第３回研究会】

2013年１月26日・27日（於：国立歴史民俗博物館）

加藤秀雄（本館研究部・機関研究員）

「移動の伝承，伝承の移動―フィールドのなかの『織田日記』」

呉屋淳子氏（国立民族学博物館・機関研究員）

「『八重山芸能』の誕生と人の移動」

田中藤司氏（成城大学民俗学研究所・研究員）

「供養経営史としての霊山登山―供養証文からの展望―」

門田岳久氏（立教大学・助教）

「移住者たちのローカリズム―南佐渡の地域開発と宮本系民俗学の関わり―」

佐山淳史（本館研究部・リサーチアシスタント）

「人物の顕彰活動から見る故郷観―鈴木三公を中心にして―」

車恩妊氏（一橋大学大学院社会学研究科・客員研究員）
「在朝日本人の『小学校時代』と『朝鮮』の経験―1930～40年代の京城を中心に―」
川村清志（本館研究部・准教授）
「故郷への眼差しと移動の記憶―七浦小学校同窓会誌『しつら』より」
【第４回研究会】
2013年３月21日・22日（於：国立歴史民俗博物館）
室井康成氏（東京大学東洋文化研究所・特任研究員）
「戦前期韓国蔚山・方魚津における日本人住民の動向」
関沢まゆみ（本館研究部・教授）
「『奈良県風俗志』にみる「移住・出稼」への視線」
山田慎也（本館研究部・准教授）
「近代における都市居住者の葬送儀礼とマニュアル」
岩本通弥氏（東京大学・教授）
「マスオさん現象から2.5世帯住宅へ」
村木二郎（本館研究部・准教授）
「遍歴する鋳物師とは―考古学的視点から―」

４．今年度の研究成果

第１回研究会においては文化人類学の視点および近世史の視点からの研究報告が行なわれた。前者においては，主流社会からの意味づけと生身の自己との間で〈移ろい動く〉生活世界の中を生きるアイヌについての分析（関口氏）と，ストリート（社会の縁辺にはじき出された人々が都市で生きるために集う場所）としてのヒンドゥー寺院建設活動の分析（関根氏）が報告され，議論が行なわれた。

また，後者においては，地方から江戸へと赴任してきた江戸勤番武士の行動実態と江戸・地元双方へのまなざしについての分析（岩淵），そして，新田開発を事例とした近世の石工の広域な行動実態の分析（森下氏）が行なわれた。

第２回研究会は韓国蔚山市およびその周辺地域で行なわれた。まず，呉昌炫氏の発表をもとに植民地期朝鮮半島への日本漁民の進出の実態とそれにともなう技術伝播の様相について議論を行ない，その後，方魚津・九龍浦といった日本人漁民が居留した漁村の見学・調査を行なった。

第３回研究会では，家の由緒書を資料としたイエの移動についての伝承の分析（加藤），人の移動にともなう郷土芸能への意識の変化の分析（呉屋氏），一つのイエに残された供養証文を資料とした信仰圏の分析（田中氏），移住者によって喚起される新たなローカリズムの分析（門田氏），人物顕彰の具体的様相を事例とした故郷観の分析（佐山），植民地期の在朝日本人の朝鮮での経験についての語りの分析（車氏），同窓会誌を資料とした故郷観の変遷についての分析（川村）といった事例が積み重ねられ，議論が行なわれた。

第４回研究会では，まず，３月19日にリニューアルオープンした第４展示室において，人の移動についての展示のポイントと手法についての議論を行なった。つぎに，植民地期朝鮮における日本人住民の居住実態についての報告と分析（室井氏），『奈良県風俗志』を資料とした移住や出稼ぎに対する考え方の地域的差異とその背景についての分析（関沢），都市の葬送の近代的変遷と葬送観念の変化についての分析（山田），都

市的同居家族のあり方についての分析（岩本氏），中世の鋳物師の移動に関する再分析（村木）といった発表が行なわれた。さらに，研究報告特集号の執筆に向けて，意見交換が行われた。

５．全期間の研究成果

本共同研究では延べ26人の共同研究員およびゲストスピーカーが研究報告を行ない，議論を重ねてきた。その目的は，上記のとおり，移動の日常性に注目して事例を積み上げることによって，民俗が成立する前提としての定住と，イレギュラーな現象としての移動という二項対立を相対化し，パラダイムの転換を図ることにあった。

研究会で行なわれた議論は以下のように大きく４つに分類することができる。

①研究史の整理と本研究の位置の確認

本研究はまず，民俗学および関連諸分野における学史の整理からはじめられた。そこでは，民俗学以外の各分野において移民研究やネットワーク研究，故郷論などの形で研究が進められてきたことが明らかになった一方で，それらの研究が定住と移動を対置させることで対象を切り取っていることも確認された。つまり，移動が特殊な状況として研究対象となっているのである。しかし，こうした状況に対して日常を日常として切り取ることを眼目とする民俗学が新たな視点と方法論を提示することができているかという点については大きな疑問が投げかけられた。現在の民俗学においても定住を常態とする考え方は一般的であり，それどころか定住を民俗の伝承の必要条件とする考え方すら根強い。

ただその一方で，都市民俗学のように当初はムラに対する視点をムラを離れた人びとによって構成された新たなムラとしての都市に適用しながらも，その後，家族や個人といった従来とは異なる対象を取りあげる意義を再確認する立場が主張されてきたことも確かである。こうした議論から，従来の民俗学から排除されてきた移動する人びとを，さらに，移動することの日常性を，本共同研究においてはより明確に，より意識的に対象化する必要があるという合意が形成されたことは意義深い。また，「文化的動物としての人間とその生活が形成され再生産される場」としての「後背地」というムラという枠組みをこえた概念が共通理解を得たことも，本共同研究を進めるにあたって重要な基礎となった。

②人の移動の歴史的普遍性

本研究を進めるにあたって，もう一つ重要な基礎となったのは，移動する日常の歴史性である。一般的に民俗学における移動の研究は，日本の近代化，とくに戦後の経済成長にともなう都市部への人口集中を前提としたものが多い。しかし，そうした前提は成立しうるのか。近代における人の移動とそれ以前の人の移動とではいかなる点が共通し，いかなる点が異なるのかといった検討が行なわれなければならない。

本共同研究において示された近世後期の瀬戸内地域の新田開発工事にかかわる人びとの移動の広域性や，江戸勤番武士の生活の様相，そして江戸や故郷に対するまなざしは，民俗学が対象としてきた現象を近代や現代のものとしてのみ切り取ることの危うさを指摘するものであった。また，その一方で，これまで広く全国的に移動していたとされてきた中世の鋳物師について，無条件に遍歴という移動形態を適用するのではなく，その移動のあり方をより具体的に検討する必要があるという近年の考古学的調査をもとにした指摘は，一つ一つの移動の事例を通説にとらわれずに検証することの必要性を再確認させられるものであった。

人の日常的な移動の普遍性を歴史学や考古学と共有することができたこと，そしてこうした視点の共有を契機として，各分野におけるこれまでの研究の再確認が行なわれたことは一つの成果である。

③新たな場の構築と郷土へのまなざし

人が移動し，住む場所を移すということは，それまでに一定の関係性が構築されている場合もあるとはいえ，多くは新たな場の出現を意味する。そこで人びとは物理的な生活環境を整えるだけでなく，人間関係や生活文化を再構築する必要に迫られる。それにともなう人びとの活動は移動にともなう社会変動として把握することができるが，もう一つ重要なことは，その過程において顕在化する新たな場や移動以前の場へのまなざしであり，そこに生きる人びとのアイデンティティのゆらぎである。この点については，アイヌの人びとが，マジョリティによる意味づけを与えられながら都市という場で生きることと，アイヌであることとは関係なく生身の自己として生きることの間で〈移ろい動く〉生活世界を構築しているという事例に象徴される。かならずしもその原因を移動のみに求めることはできないが，移動によって喚起される「自己との対峙」という課題を明快に提示する議論を行なうことができた。

こうした〈移ろい動く〉生活世界という考え方は，アイヌのようなマイノリティだけではなく，ひろくマジョリティの日常にも敷衍することができる。研究会で提示されたイエの由緒書を伝える事例や移住者による移住地に対するローカリズムについての事例などは，こうした生活世界を端的に示す事例である。さらに，同窓会誌をとおした内外からの故郷へのまなざしや郷土芸能の発見や復活といった事例は，こうしたまなざしが移動者だけでなく，移動しない人びとへも適用可能であることを示している。

④人の移動と文化の移動

人の移動はさまざまな要因によって引き起こされるが，その多くが経済活動にともなうものであることは確かであろう。経済活動はそれぞれの時代の社会状況を如実に反映する。戦前の植民地などへの人の大量移動はその最も顕著な例である。本共同研究では国内における人の移動の実態だけでなく，韓国人研究者の参加を得ることによって，戦前期の朝鮮半島への日本人の移動も把握することができた。具体的には公官庁や企業への勤務，自営業や漁業などに従事するための移動である。とくに漁業にともなう朝鮮半島への進出については，それが結果的に漁業技術の移転をともなったという点において興味深い。戦前期に朝鮮半島へと伝えられた網漁の技術は，現地で嗜好される魚種に合わせて大幅に改良され，現在に至っている。

一方，恒常的な移動をともなわなくとも可能な文化の移動についても議論が交わされた。現代社会においては物流やメディアの発達によって，人が移動することなく文化の移動が生じやすい状況となっている。移動をともなわずにあらゆる情報を獲得することができるという状況は，人の移動をどのように変化させるのか，また，自らの生きる場に対するまなざしをどのように変化させるのか，今後追求すべき興味深い課題である。

本共同研究は民俗学におけるパラダイムの転換と，それによって生じる新たな研究領域の開発を目指したものであり，必ずしもひとつの明快な結論へと収斂するものではない。しかしながら，人の移動の日常性を前提とする視点の確立と，その視点をとおした研究課題の整理と共有という作業は，今後の研究の新たなる方向性を示す成果であると考えている。

６．共同研究員（◎は研究代表者）

岩本　通弥　東京大学大学院総合文化研究科・教授

新谷　尚紀　国学院大学文学部・教授

福間　裕爾　福岡市博物館・学芸課長

金子　　淳　静岡大学生涯学習教育センター・准教授
田中　藤司　成城大学民俗学研究所・研究員
関口　由彦　成城大学文芸学部・非常勤講師
室井　康成　東京大学東洋文化研究所・特任研究員
門田　岳久　立教大学観光学部・助教
呉　　昌炫　韓国国立民俗博物館・学芸研究士
小池　淳一　本館研究部・教授
関沢まゆみ　本館研究部・教授
松尾　恒一　本館研究部・教授
岩淵　令治　本館研究部・准教授
原山　浩介　本館研究部・准教授
村木　二郎　本館研究部・准教授
山田　慎也　本館研究部・准教授
◎松田　睦彦　本館研究部・助教
［リサーチアシスタント］
佐山　淳史　成城大学大学院博士課程後期

［人間文化研究機構連携研究］

（１）「人間文化資源」の総合的研究
Ａ「正倉院文書の高度情報化研究」2010～2014年度
（研究代表者　仁藤　敦史）

１．目　的

歴博が創設以来，遂行してきた正倉院文書レプリカを基礎に，デジタル化したうえで表裏の接続状況を容易に観察できるシステムを整備する。そのうえで木簡・漆紙文書などとの比較により古代における帳簿・文書論の深化を目指し，さらには中世や近世文書との機能論的比較を行う。

約一万点に及ぶ正倉院文書は日本古代史研究の基本資料であり，文献史学だけなく多様な学問全般にわたる貴重な歴史情報資源の宝庫といえる。これまで豊富な内容を有する正倉院文書の情報は，保存の問題から十分には公開されてこなかった。これを原本保管機関である宮内庁正倉院事務所の協力を得て，デジタル情報として利用できる基盤を整備することは大きな意義を有する。

古代日本の歴史資源開発は，新たな古代史像を描くことを可能とし，まさに国立歴史民俗博物館が目指す「博物館型研究統合」（博物館という形態をもつ大学共同利用機関としての特徴を最大限に活かし，資料の収集・共同研究・展示を有機的に連鎖した研究）にふさわしい研究事業であるといえる。

正倉院文書に対する研究者の閲覧は極めて限られており，モノクロマイクロフィルムの焼き付けを使用することによって研究を進めるのが一般的である。そのため，朱やシミ色の相違などを区別することができず，

写経所文書の多くを占める帳簿の復元的な分析を行う場合に大きな障害となってきた。デジタル化によりその障害を克服し，正倉院文書の分析を飛躍的に容易化しようとする試みである。

資料目録を継続的に出版し，奈良時代フルテキストデータベースを作成している東京大学史料編纂所および原本保管機関である宮内庁正倉院事務所との連携が可能である。さらに正倉院文書研究の中心の一つである大阪市立大学の栄原永遠男研究室が中心となった科研データベースとのコラボレーションも可能である。

２．今年度の研究計画

五年間の研究計画はおおよそ以下のように予定しているが，重点的年次進行を示すもので内容は重複していく。

第一年目　レプリカ撮影およびデジタル的接続　三年目まで継続

第二年目　自在閲覧方式の改良（表示位置反転・微細連動表示・画面切り替えなど）

第三年目　写経所帳簿群の分析，下総・美濃国戸籍等の現地調査，中間総括シンポ

第四年目　中世・近世文書との比較検討，韓国文字史料との比較

第五年目　復元複製の作成，従来の釈文訂正，総括国際シンポ

第三年目の計画としては，自在閲覧方式の改良（表示位置反転・微細連動表示・画面切り替えなど）を中心に，公文情報をこれに入れ込み，高度情報化のツールとしての機能を検証する。ひきつづき，文献目録の充実と，個別断簡ごとの文書情報整理を継続する。宝庫外流失文書の調査および中間総括のシンポジウムを公開で実施する。

３．研究経過

第一回研究会

１．日時：2012年６月11日（月）　13:00～17:00

２．場所：国立歴史民俗博物館 第２会議室

３．内容

13:00　開会

今年度の研究計画の説明（仁藤敦史）

13:10～　富田正弘報告

「古代文書（公式様文書を中心に）の様式の中世への展開」

14:30～　富田報告討論

15:05～　休憩

15:15～　脇正宏研究報告

「正倉院文書のおける再構成支援システムに関する研究報告」

15:40～　脇報告討論

16:15～　鈴木卓治報告

「正倉院文書と画像閲覧システム―23年度の到達点と今後の課題―」

16:35～　鈴木報告討論

16:45　散会

第二回研究会・文書調査

■第一日目

日時：2012年７月６日（金）午前

文書調査

天理大学附属天理図書館にて正倉院宝庫外流出文書の調査

河内国大税負死亡人帳（五号）

奉写一切経所食口案（二十号）

柏原大嶋手実（二十三号）

錦部君麻呂手実（二十五号）

桑原村主安万呂試字（三十三号）

天平余光（五六−六一号）

研究会

１．日時：2012年７月６日（金） 14:00〜17:00

２．場所：宮内庁正倉院事務所

３．内容

■第一日目

14:00　宮内庁正倉院事務所入口集合／開会／事務連絡

14:05〜　佐々田悠報告

「正倉院事務所における古文書調査のあゆみ」

15:20〜　質疑

15:40〜　討論

16:20〜　今後の研究計画（仁藤敦史）

16:40　散会

■第二日目

１．日時：2012年７月７日（土）9:30〜

２．場所：東大寺ミュージアム，東大寺図書館，宮内庁正倉院事務所，奈良国立博物館

３．内容

東大寺図書館にて大方広仏華厳経自巻第12至巻第20を熟覧

東大寺ミュージアムの見学

※東大寺ミュージアム開館記念特別展「奈良時代の東大寺」

宮内庁正倉院事務所の見学

奈良国立博物館「名品展　珠玉の仏教美術」見学

豊前国仲津郡丁里戸籍断簡（正倉院文書拾遺２，奈良博蔵），造仏所作物帳断簡（正倉院文書拾遺７，奈良博蔵），写一切経所解案（正倉院文書拾遺10ウ，奈良博蔵），造東大寺司請経牒（正倉院文書拾遺17，奈良博蔵），万昆嶋主解（奈良博蔵 ※新収），越中国砺波郡石粟村官施入田図〔東大寺開田図〕（奈良博蔵），越中国射水郡鳴戸村墾田図案〔東大寺開田図〕（奈良博蔵），越中国射水郡鹿田村墾田図案〔東大寺開田図〕（奈良博蔵），大和国添下郡京北班田図（西大寺蔵）など

第三回研究会

１．日時：2012年10月20日（土）12:00～16:30

２．場所：国立歴史民俗博物館　第２会議室

３．内容

12:00　　開会

12:05～　山下有美報告

「写経所文書研究の展開と課題」

13:30～　山下報告討論

14:10～　休憩

14:20～　正倉院文書表裏同時表示システムに関する意見交換（安達文夫）

14:50～　高橋一樹報告

「中世の「書状」フォーマットと機能―古代文書との対話をもとめて―」

15:40～　高橋報告討論

16:15～　今後の研究計画について（仁藤敦史）

16:25　　散会

第四回研究会

１．日時：2013年１月26日（土）10:00～16:00

２．場所：東大寺総合文化センター　金鐘会館　会議室A（奈良市水門町100）

３．内容：

人間文化研究機構連携研究「正倉院文書の高度情報化研究」中間成果報告シンポジウム

参加者40名

４．プログラム

報告　栄原永遠男（大阪市立大学大学院）

「大阪市立大学栄原ゼミにおける写経所文書研究」

山口　英男（東京大学史料編纂所）

「史料編纂所と正倉院文書調査」

佐々田　悠（宮内庁正倉院事務所）

「正倉院事務所における古文書調査のあゆみ」

仁藤　敦史（国立歴史民俗博物館）

「正倉院文書研究と歴博複製事業の役割」

山下　有美（人間文化研究機構）

「写経所文書研究の課題」

飯田　剛彦（宮内庁正倉院事務所）

「三つの山辺諸公手実をめぐって」

小倉　慈司（国立歴史民俗博物館）

「『正倉院文書拾遺』後の正倉院流出文書」

高田　智和（国立国語研究所）

「ヲコト点の座標表現」

後藤　真（花園大学）

「正倉院文書の情報化の意義と課題―SOMODA その改善データベース作成経過に即して」

安達　文夫（国立歴史民俗博物館）

鈴木　卓治（国立歴史民俗博物館）

「超高精細画像自在閲覧方式を適用した正倉院文書研究支援用閲覧システム」

稲葉　蓉子（早稲田大学大学院）

「正倉院文書データベースの作成と課題」

紙上報告

今津　勝紀（岡山大学）

「古代家族の復原シミュレーションに関する覚書」

倉本　一宏（国際日本文化研究センター）

「摂関期古記録データベースをめぐって」

高橋　一樹（武蔵大学）

「古代と中世の文書論をつなぐ「書状」研究の必要性」

富田　正弘（富山大学名誉教授）

「古代文書様式の中世への展開①―早川庄八『宣旨試論』の検討―」

４．研究成果

本年度は，研究会だけでなく，宝庫外流出の正倉院文書の調査，総括シンポを実施した。研究会においては，正倉院文書の画像閲覧システム（正倉院文書の現状ならびに以前の状態に仮想的に並べ替えた表裏の画像を対応させて比較表示し，表示部分の文書のテキスト情報を提示する）の改善方向性および，正倉院宝庫外流出文書の最新情報収集，およびデジタル写真を駆使した歴博所蔵「山辺諸公手実」の接続関係や真偽判定の方法などを高度情報化の一環として議論した。一方，実務としては，表裏自在閲覧システムの改良および正集・続修を中心とした公文複製写真のデジタル化を完成させ，昨年に引き続き，正倉院文書にかかわる断簡ごとのデータベース作成を進め，次年度の連結的運用に道筋をつけた。

成果物

『正倉院文書の高度情報化研究シンポジウム予稿集』2012年，75頁

『正倉院文書の高度情報化研究シンポジウム予稿集　追補』2012年，64頁

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

栄原永遠男　大阪市立大学大学院・特任教授

飯田　剛彦　宮内庁正倉院事務所・調査室長

佐々田　悠　宮内庁正倉院事務所・整理室員

後藤　　真　花園大学文学部・専任講師

山下　有美　学識経験者

高田　智和　国立国語研究所・准教授

富田　正弘　富山大学名誉教授
高橋　一樹　武蔵大学人文学部・教授
今津　勝紀　岡山大学大学院社会文化科学研究科・教授
倉本　一宏　国際日本文化研究センター・教授
山口　英男　東京大学史料編纂所・教授
◎仁藤　敦史　本館研究部・教授
○小倉　慈司　本館研究部・准教授
安達　文夫　本館研究部・教授
鈴木　卓治　本館研究部・准教授
［リサーチ・アシスタント］
稲葉　蓉子　早稲田大学大学院博士課程

B「近現代の生活と産業変化に関する資料論的研究」2010～2014年度
（研究代表者　青木　隆浩）

１．目　的

近年，伝統産業の衰退や大量生産・大量廃棄の進行，材料・素材の変化などにより，明治時代から高度経済成長期にかけての生活資料が急速に失われつつある。それに伴い，モノを生産してきた技術や道具の使い方なども，徐々に忘れさられてきている。博物館は本来，そのような生活資料を収集し，それに関する技術や知識を記録保存する使命を担っているが，例えば渋沢敬三のアチック・ミュージアムが工業製品を民具と見なさず，収集の対象から除外したことを典型として，民俗学や歴史学の博物館が近代化・工業化以降の生活資料を積極的に収集したとは言い難い状況にある。

また，近現代の生活資料はガラスや金属，樹脂など長期的な保存に向かないものが多く，全国の博物館でその扱いに苦慮している。だからといって，それらを記録・保存していかなければ，近現代の生活活動に関する博物館展示の手法が制限されてしまう。とくに歴博では第６室の現代展示がオープンし，さらに第４室の民俗展示の新構築を進めていることもあり，モノの状態や民俗学，近現代史学の研究蓄積に合わせた，生活資料の収集方針や整理・保存の方法をあらためて検討する必要に迫られている。

２．研究の意義

近現代の生活資料の収集・整理，保存は，まだ全国的にノウハウが蓄積されていない。それは主に素材の面から修復，保存が困難なためであるが，近現代の研究・展示を進展させていくためには，その可能性と限界をどこかで示す必要がある。そこで本研究は，近現代資料の状態調査を通じて，それらの収集から保存に至るまでの提案をいくつか示していきたい。

その際，本研究ではモノ資料を，産業史との関わりに重点をおくことに特徴をもつ。近代化・工場化，大量生産の進展といった産業の歴史は，新商品の開発や素材・材料，部品の転換など，いわばモノの歴史でもある。大量生産・大量流通された近現代のモノ資料には，時代を遡るほど産地や製造年の不明なものが多いが，産業史と関連させることで，それを使用した地域や時代的背景を合わせて調査することができる。また，

商品開発や素材・材料・部品の歴史が整理されれば，地域の生活史をモノの面からより具体的に復元し，かつそれらの情報をモノ資料の収集方針や保存計画にも有効活用できると思われる。

３．研究計画

まず，種類や材質が多様な館蔵の「金沢地方近代生活資料」（Ｈ－686）や「石川県白山麓山村生活用具」（Ｆ－12），「飛騨路の民具」（大塚集古資料館旧蔵コレクション，Ｆ－169），「婚礼衣裳・婚礼用具及び生活用具」（Ｆ－148）などを対象として，生活資料の分類・整理の方法を検討しつつ，素材分析を行う。

次に，分類・整理した生活資料を商品開発の歴史や素材の変化などと照らし合わせ，産業史・技術史の中に位置づけるため，商品カタログや取扱説明書，社史などを収集し，それらを用いて「商品・部品データベース」を作成する。商品カタログや取扱説明書などで明らかにできなかった主要な生活資料については，該当する業界団体や個別の企業への訪問によって情報をいただく。

以上の研究成果は，歴博の他，元興寺文化財研究所での研究会で報告し，情報を共有化する。

今年度の研究計画

研究会３回（うち歴博での研究会を１，２回）

連携研究版状態調査票とマニュアルの作成に向けた状態調査の試行

展示室の状態調査票とマニュアルの作成に向けた状態調査の試行

商品・部品データベースの作成

素材（とくに金属）の分析

資料の文字情報に関する調査

４．今年度の研究経過

第６回研究会

日時：平成24年５月26日（土）13時～

場所：国立民族学博物館　４階　第２演習室

内容：笹原亮二「持ち物全品収集　民博所蔵大村しげコレクションを巡って」

「大村しげコレクション」の見学と解説（笹原亮二）

特別展「今和次郎の採集講義―考現学の今」の見学

青木隆浩「歴博常設展示の状態調査について」

第７回研究会

日時：平成24年10月５日（金）13時30分～

場所：国立歴史民俗博物館　第２会議室

内容：松村敏「近代金沢の商工業者名簿について」

本康宏史「民具の現代史―金沢の戦後社会と古物商―」

青木隆浩「金沢地方近代生活資料の文字情報について　モノ資料版」

第８回研究会

日時：平成25年２月９日（土）13時30分～・10日（日）10時

場所：元興寺文化財研究所・天理大学附属天理参考館

内容：金山正子「企業資料の状態調査と保存処理―戦略のための状態調査―」
山田卓司「セルロイド製品の特徴と分析―セルロイド劣化事例から―」
中尾徳仁「博物館の近現代資料取り扱いについて」
天理参考館の見学と解説（中尾徳仁）

展示室資料の状態調査

目的

①震災による資料の破損やカビの発生といった様々な事故に対し，それ以前の状態を常に把握しておけば，資料修復や今後の対策を練るうえで役に立つ。

②状態調査の過程で，長期間にわたる展示によって負荷がかかっている資料を早期に発見できるうえ，資料に負担のかからない演示の方法を検討するためのデータを収集することが期待できる。

③工業製品が生活様式の変化に大きな影響を与えるようになってからすでに久しいが，それだけに展示や研究で企業の協力が必要になってきている。だが，展示資料の劣化を企業イメージの面から不安視する企業もあるため，常に資料の状態を把握し，報告できるように準備しておくことで，信用を得る効果が期待できる。

なお，平成24年度は歴博の第６展示室と第５展示室の状態調査をおこなった。

モノ資料の文字情報調査

来歴のわからない資料から，会社名や商品名，住所，ラベル，メモ書きといった文字情報を収集し，商店や工場，商品カタログのデータベース，電話帳などと突き合わせて，コレクションの構成を把握する。今年度は，金沢地方近代生活資料約4，000点について，すべての資料から文字情報を取得した。

金属分析

近現代，とくに第二次世界大戦中になると，金属素材が複雑化する。それは，モノの形態や保存性にも大きく関わるので，資料の種類や時代ごとの傾向がみられるよう分析と整理を進めている。

商品・部品データベース

ナショナルやキャノン，ソニー，コロンビア，サンヨー，三菱電機，東芝，日立，花王石鹸，サトウパーツなどの商品カタログをデータベース化している（未公開）。さらに現在，オリンパスやシンガーミシン，松本家具，日本足袋などのデータベースを作成中である。

５．今年度の研究成果

まずは，本研究会のおもな調査対象資料が金沢地方近代生活資料であることから，その来歴や金沢市の古物市場，商工業者との関わりなどについて調査を進めている。また，金沢の資料を含め，生活資料全般の収集・整理と保存の方法を検討するため，研究会で様々な事例を報告し，質疑応答をおこなっている。その結果，生活資料のコレクションについては，その来歴が資料の方向性を決定づけることがわかってきた。

商品・部品データベースについては，これまでカタログ24冊分のデータを入力し終えた。家電製品や精密機械は情報量が多く，入力に時間がかかる。このため，ある程度分野を絞って，作業の効率化を図る必要性が出てきた。

状態調査は，歴博第５，第６展示室を対象としておこなった。これは，近現代資料という新しい素材の資料を使った長期的な展示方法を考えていくための基礎データを収集するために実施した。その結果，暫定的

ではあるが，調査票と調査方法をある程度固めることができた。

６．研究組織（◎は研究代表者）

	松村	敏	神奈川大学経済学部	本康 宏史	石川県立歴史博物館
	金山	正子	元興寺文化財研究所	角南聡一郎	元興寺文化財研究所
	笹原	亮二	国立民族学博物館	日高 真吾	国立民族学博物館
◎	青木	隆浩	本館研究部・准教授	齋藤 努	本館研究部・教授
	永嶋	正春	本館研究部・教授	小池 淳一	本館研究部・教授
	山田	慎也	本館研究部・准教授	原山 浩介	本館研究部・准教授

C「歴史研究資料としての映画の保存と活用に関する基盤的研究」
2010～2014年
（研究代表者　内田　順子）

１．目　的

映画のオリジナルフィルムには，撮影，編集，現像など，その作品の制作に関わる情報が豊かに備わっている。そのため，映画を歴史研究の資料として活かしていくためには，写っている内容についてだけではなく，フィルムという形ある物それ自体についての資料批判的な研究を同時に行うことが必要不可欠である。本研究では，歴博がコピーを所蔵している昭和初期の記録映画（ニール・ゴードン・マンローによるアイヌの記録映画および宮本馨太郎による民俗学的な記録映画。以下「マンローフィルム」「宮本フィルム」とする）を対象に，オリジナルフィルムを所蔵する機関と連携してオリジナルフィルムの資料批判的研究と内容調査を実施し，得られたプロファイル情報を映像と連動させることを通して，映画を歴史・民俗などの文化研究の資料として保存・活用するために必要な手続きを構築する。

２．今年度の研究目的

①パーフォレーション込みのHDテレシネが済んでいない宮本フィルム14本について，その作業を最優先で行なう（フィルムの劣化が進行しているため)。

②23年度にHDテレシネを行なった宮本フィルム20本について，パソコンで扱えるフォーマットに変換し，動画データベースの素材とする。

③宮本フィルムの内容分析についての研究会を開催し,動画データベースに入れる情報の検討を行なうほか,平成25年度に開催予定の上映を含む研究集会のテーマをつめていく。

④マンローフィルムについての成果公開についての打ち合わせを行なう（北海道・イギリス　時期については調整中)。

３．今年度の研究経過

①パーフォレーション込みのHDテレシネが済んでいない宮本フィルム14本について,HDテレシネを行なった。

②23年度および今年度HDテレシネを行なった宮本フィルム34本について，パソコンで扱えるフォーマットに

変換し，動画データベース作成の準備をした。

③宮本フィルムの内容分析についての研究打ち合わせを開催し，平成25年度に開催予定の上映を含む研究集会のテーマについて，実際の映像を見ながら検討した。

④マンローフィルムについて，動画とショットリストとを連動させるしくみづくりを検討し，試作品を作成した。

⑤マンローフィルムの今後の成果公開を検討するため，北海道およびイギリスにおいて打ち合わせを行う計画であったが，次年度以降に実施することに変更した。

４．今年度の研究成果

①テレシネ可能な状態の宮本フィルムについて，パーフォレーション部分を含まないHDテレシネと，パーフォレーションを含むHDテレシネの双方を作成することができた。過去の複製フィルムでは見ることができなかった細部までクリアに見ることができるようになり，たとえば，写真を映画で撮影しているショットが映画の中に用いられていることなどがわかった。また，映像のショットリストと映像を連動させる仕組みを試作したことによって，映像を見ながらショットリストを記入する作業がより円滑となる見通しが開けた。

②研究会

７月23日　13:30～17:00　パイワンの映像について（宮本記念財団にて）

10月８日　14:00～18:00　花祭りの映像について（宮本記念財団にて）

１月27日　11:00～17:30　生業・行事の映像について（宮本記念財団にて）

③成果の公開

報告「民俗誌映画のアーカイブ化　マテリアルとしての映画情報の取得と保存活用」(内田順子，2012年９月９日（日)，日本民俗学会談話会，成城大学にて)

５．共同研究員（◎は研究代表者）

板倉　史明　東京国立近代美術館フィルムセンター

加藤　　克　北海道大学植物園・博物館

原田　健一　新潟大学

宮本　瑞夫　宮本記念財団

小瀬戸恵美　本館研究部・准教授

鈴木　卓治　本館研究部・准教授

丸山　泰明　本館研究部・機関研究員

◎内田　順子　本館研究部・准教授

（２）活動提案

◇カテゴリーⅠ

「中近世の都市を描く絵画と地誌に関する研究―京都と江戸―」
2010～2012年度
（研究代表者　小島　道裕）

１．目　的

中世～近世の都市社会を知る上で，具体的な都市を題材に描かれ記述された絵画や地誌はきわめて重要な素材である。しかし，その利用はまだ十分な形では行われておらず，機構に所蔵されている資源を中心に，そこに何が描かれているのかを明らかにし，共有化する作業を行いたい。そして，それを活用し，特に連携展示の形で公開することを目的とする。

対象とする都市は，資料が豊富な京都と江戸を中心とし，洛中洛外図屏風をはじめとする絵画類と，「名所図会」などの地誌類，および相互の連関を扱う。

２．今年度の研究計画

①連携展示「都市を描く―京都と江戸―」（2012年３月27日～５月６日）を両館で開催する。
②展示期間中に，展示に基づく連続シンポジウムを両館で開催する。
③資料の講読を継続し，定期的に研究会を開催する。
④両館館蔵資料の翻刻およびデジタルデータ化を引き続き進める。

３．今年度の研究経過

①目標であった連携展示を歴博・国文研両館で開催した。
②両館における連続シンポジウムも予定通り開催した。
③研究会は，両館の館蔵資料や展示で扱った鍬形蕙斎「職人尽絵巻」などの資料研究および研究発表を中心とする研究会を計８回開催し，外部からの参加者も得ることができた。
④職人画像についてのデータ蓄積を行い，今後の研究とデータベース化への展望を開くことができた。

４．今年度の研究成果

①シンポジウム「描かれた都市の風俗と名所―江戸を中心に―」於　国文学研究資料館（４月14日）
「本展示のE-learning化」中村康夫（国文学研究資料館）
「浮世絵に見る江戸名所の変遷」大久保純一（国立歴史民俗博物館授）
「描かれなかった都市」岩淵令治（国立歴史民俗博物館）
「十九世紀江戸の職人尽絵」大高洋司（国文学研究資料館）
「まとめ」井田太郎（近畿大学文芸学部）
②歴博フォーラム「描かれた都市の風俗と名所―京都を中心に―」於：国立歴史民俗博物館（４月21日）

「趣旨説明と展示概要の紹介」小島道裕（国立歴史民俗博物館）
「洛中洛外図屏風と風俗画に見る舞いと踊り―中世から近世へ―」松尾恒一（国立歴史民俗博物館）
「洛中洛外図と近世初期風俗画」岩崎均史（たばこと塩の博物館）
「江戸と京を比較する―海のない京／山のない江戸―」井田太郎（近畿大学文芸学部）
「職人絵と洛中洛外図屏風」大高洋司（国文学研究資料館）

シンポジウム全体の刊行は予定していないが，内容の一部については，シンポジウムに先立つ形で刊行された，人間文化研究機構監修『HUMAN』vol.２（2012年３月）特集「京都・江戸はどう描かれたか―洛中洛外図，江戸名所図と風俗画」に収録されている。

５．研究組織（◎は研究代表者）

大高　洋司　　国文学研究資料館・教授
中村　康夫　　国文学研究資料館・教授
井田　太郎　　近畿大学文芸学部・准教授（元国文学研究資料館）
岩崎　均史　　たばこと塩の博物館・主席学芸員
◎小島　道裕　　本館研究部・教授
大久保純一　　本館研究部・教授
岩淵　令治　　本館研究部・准教授

◇カテゴリーⅢ

「大規模災害と広域博物館連携に関する総合的研究」2012年度～2014年度
（研究代表者　小池　淳一）

１．目　的

本研究は，東日本大震災における東北地方の博物館を通して，大規模かつ広域の災害に際して地域の博物館をはじめとする人間文化に関する施設がどのような機能と連携関係を有するべきかを総合的かつ多角的に調査，研究しようとするものである。本研究は人間文化研究機構および国立歴史民俗博物館が，東日本大震災発生以後，繰り広げてきた文化財レスキュー活動を基盤とし，それを研究面において高度化し，さらに展示体制を模索することを目的としている。

２．研究計画

国立歴史民俗博物館が，東日本大震災の発生直後に開始した被災地における文化財レスキュー活動を継続的に実施する。瓦礫の中から救出された歴史資料，生活用具・民具は，損傷が激しく劣化も進んでおり，その保全，整理には専門的な知識の蓄積と方法論の深化とが求められる。本連携研究の研究員を現地に派遣し，被災した資料の保全・整理活動をおこないながら，その記録化と課題の検証をすすめ，今後，予測される大規模災害発生時における効果的な文化財レスキュー活動の展開に資するような調査，研究活動を実施する。

また，東北地方と新潟県の県立博物館に所属する学芸員と機構内の専門家による情報の共有，および広域

の博物館連携をめぐる議論の進展を目的とした研究会を定期的に開催する。各県毎に実施された文化財レスキュー活動が有効に機能するためには，平時における学芸員，研究者間のネットワークの存在が不可欠な要素であったことが徐々に明らかとなっている。それぞれに異なる立場，状況で活躍した各地の専門家の経験に則して情報の共有をおこない，反省点も踏まえて，博物館同士の連携を念頭に置いた体制作りに関する議論をおこなっていく。

これと関連して，過去に大規模災害の被害を被った地域の調査，研究も実施する。特に地域住民，行政の取り組みについて，災害の記録，記憶という観点から博物館，資料館の展示などを対象に調査し，文化財の保護，減災をめぐる情報発信の場としての博物館のありかたを模索していく。特に本年度は以下の点に留意した。

・被災地における文化財レスキュー活動を継続して実施する。（平成24年４月～平成25年３月）
・被災地における文化財レスキュー活動の成果と課題に関する研究会を開催する。国立歴史民俗博物館，国立民族学博物館，東北歴史博物館，岩手県立博物館で研究会を開催する。（平成24年４月～平成25年３月）
・被災地において開催される文化財レスキュー活動に関連するシンポジウム，研究会等に参加し情報の収集・発信をおこなう。（平成24年４月～平成25年３月）
・過去に大規模災害の被害を被った地域の調査，研究をおこなう。（平成24年４月～平成25年３月）

３．今年度の研究経過

文化財レスキュー活動

2012年４月～2013年３月まで継続して実施した。（宮城県気仙沼市など）

〇研究会の開催

※内容については，後述。

第１回研究会（2012年８月４日，５日　於：国立歴史民俗博物館）

第２回研究会（2012年10月28日，29日　於：東北歴史博物館）

第３回研究会（2013年１月13日，14日　於：国立民族学博物館，阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター）

第４回研究会（2013年２月18日，19日　於：岩手県立博物館）

〇調査・シンポジウム等への参加

・シンポジウム「３．11以後の文化財・歴史資料保全の取り組み」への参加（10月31日　於：新潟大学）
・シンポジウム「震災から20ケ月―民俗学は今何ができるのか」への参加（11月23日　於：いわて県民情報交流センター）
・奄美豪雨被災地における歴史資料ネットワークの取り組みに関する調査（12月20日～12月22日　於：奄美市立博物館ほか）
・長崎県島原市雲仙岳噴火に関わる博物館，資料館の展示と地域の現状に関する調査（１月21日～1月23日　於：雲仙岳災害記念資料館ほか）

〇進捗状況

・文化財レスキュー活動を継続して実施したことにより，被災資料の収集，保全に関する作業状況が改善され，その整理も進んでいる。今後は安定化処理が終了した資料の詳細なデータと目録の作成をおこない，その活用に向けた調査，研究をおこなう。

・各地の文化財レスキュー活動に携わった専門家と定期的に研究会をおこなったことにより，それぞれの成果と課題に関する知識の共有化が進展している。また資料の保管，返却，活用といった，今後，予測される種々の課題についても議論がおこなわれている。
・新潟県長岡市，鹿児島県奄美大島市，長崎県島原市など，過去に大規模な災害の被害を受けた地域の博物館，資料館などで調査をおこなったことにより，災害の記録と記憶が，地域社会の中でどのように資源化され活用されているのかという点が，明らかになりつつある。

４．今年度の研究成果

１）研究成果の概要

宮城県気仙沼市小々汐地区と本吉地域大谷地区で救出された被災資料の写真データとリスト化の整理作業を進め，またこれらの資料を活用した人間文化研究機構連携展示「東日本大震災と気仙沼の生活文化」の開催と，その図録・報告書の作成をおこなった。

２）著作物名

人間文化研究機構・国立歴史民俗博物館編，展示図録＋報告書『東日本大震災と気仙沼の生活文化』（2013年３月）

３）論文名

前掲２）の刊行物に４本の論考を掲載した。

小池淳一「震災を経験した気仙沼の生活文化―国立歴史民俗博物館の資料レスキュー活動から―」

葉山　茂「モノの救出から物語の救出への展開―気仙沼小々汐・尾形家住宅における活動を事例に―」

川村清志「警鐘と鎮魂―「記念碑」に込められた「知恵」の所在―」

加藤秀雄「三浦家のモノにみる本吉地域の生活文化―津波のあとに興された家―」

４）研究会

・第１回研究会（2012年８月４日，５日　於：国立歴史民俗博物館）
　発表：小池淳一「本研究の目的と課題」
　　加藤秀雄「災害時における文化財保護と博物館，研究機関，市民の役割」
・第２回研究会（2012年10月28日，29日　於：東北歴史博物館）
　発表：佐藤憲幸「震災時における東北歴史博物館の被災状況と県立博物館としての活動」
・第３回研究会（2013年１月13日，14日　於：国立民族学博物館，阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター）
　発表：日高真吾氏「東日本大震災における文化財レスキューと連携展示」
　　前川さおり氏「文化財レスキューと被災を伝える展示」
　　（※国立歴史民俗博物館・共同研究「東日本大震災被災地域における生活文化研究の復興と博物館型研究統合」との合同研究会として開催。）
・第４回研究会（2013年２月18日，19日　於：岩手県立博物館）
　発表：大石雅之氏（ゲストスピーカー）
　　「大災害と博物館～自然史科学からみた博物館救援と連携に関連する諸事情」
　　赤沼英男氏「被災文化財救援活動経過と課題」

５．研究組織（◎は研究代表者）

◎小池　淳一　　本館研究部・教授
赤沼　英男　　岩手県立博物館学芸第二課・課長
内山　大介　　福島県立博物館学芸課・副主任学芸員
梅津　一史　　秋田県立博物館・学芸主事
加藤　秀雄　　本館研究部・機関研究員
川島　秀一　　神奈川大学外国語学部・特任教授
川村　清志　　本館研究部・准教授
古川　　実　　青森県立郷土館学芸課・副課長
齋藤　　努　　本館研究部・教授
笹原　亮二　　国立民族学博物館研究部・教授
佐藤　憲幸　　東北歴史博物館・主任研究員
柴崎　茂光　　本館研究部・准教授
田邉　　幹　　新潟県立歴史博物館学芸課・主任研究員
西村慎太郎　　国文学研究資料館研究部・准教授
葉山　　茂　　本館研究部・機関研究員
日髙　真吾　　国立民族学博物館研究部・准教授
山口　博之　　山形県立博物館学芸課・学芸専門員

◇カテゴリーⅣ

国際シンポジウム
「ICOM-CECAアジア太平洋地区研究集会　博物館教育の可能性」

開催場所：国立歴史民俗博物館講堂，ガイダンスルーム
開催日程：2012年11月30日～12月２日
共　　催：国立民族学博物館，ICOM-CECA
後　　援：ICOM日本委員会，財団法人日本博物館協会

１．目　的

歴博も加盟している唯一の博物館の国際組織ICOM（国際博物館会議）は，実質的には専門部会（国際委員会）単位で活動しており，それぞれが地域別の組織を持っている。最大の委員会の一つであるCECA（Committee for Education and Cultural Action 教育と文化活動委員会）には，日本にも多くの会員がいるが，アジア太平洋地区ではこれまでまとまった活動がなかったため，この地区で初めての研究集会を開催することで，博物館分野での国際連携を促進すると共に，国内における水準の向上を図る。現在CECAアジア太平洋地区の幹事は歴博の太田歩専門職員が務めており，国立の機関であり，また広く連携を図るべき立場にある大学共同利用機関として，歴博・民博が事務局を構成し，機構の支援を受けた国際シンポジウムとして開催する。

２．内　容

◇第１日　11月30日（金）

館長挨拶　　平川　南（国立歴史民俗博物館長）

挨　　拶　　半田昌之（ICOM日本委員会副委員長）

趣旨説明　　太田　歩（国立歴史民俗博物館）

基調講演

「日本の博物館における教育学習活動の位置づけ」

布谷知夫（三重県立博物館長）

「韓国における博物館教育：現在の展開と将来のビジョン」

ペ・ギドン（ICOM韓国委員会長・韓国博物館教育協会長）

「歴史解釈と歴史教育：国立台湾歴史博物館の事例から」

呂　理政（台湾歴史博物館長）・羅　欣怡（台湾歴史博物館公衆サービス部）

「シンガポール美術館における教育：取り組みと実践」

チェン・ジェラルディーン（シンガポール美術館教育マネジャー）

「博物館教育：オーストラリアの取り組み」

アンジェラ・ケイシー（オーストラリア国立博物館教育マネジャー）

◇第２日　12月１日（土）

個別発表

テーマ１：博物館体験と教育活動

「大学美術館のアウトリーチ活動は市民そして大学生を育てる」

緒方　泉（九州産業大学美術館）

「バックグラウンド・ミュージックが来館者に与える影響―頼和記念館における事例研究」

陳　佳利（国立台北芸術大学）・蔡　振家（国立台湾大学）

「持続可能な博物館にむけて：美術館の言語教育プログラムという観点から」

木下　綾（東海大学）

「家族の写真にタグをつけよう―大学生のための博物館教育」

城　菁汝・賴　瑛瑛（国立台湾芸術大学）

「博物館教育を通した経済観念の強化」

ムハンマド・ニザム・ムハンマド（ネガラ銀行マレーシア博物館美術館）

「博物館におけるコミュニケーションプログラムのデザイン

―コンセプトメイキングとデザイン要素について―」

佐藤優香（東京大学大学院）

「展示施設における教育の可能性としてのヴィジュアルリテラシー

―名古屋大学プロジェクトギャラリー『class』の試み」

茂登山清文（名古屋大学大学院）

テーマ２：博物館における人材の育成

「博物館教育における職員の教育的環境」

染川香澄（ハンズ・オン　プランニング）

「博物館ガイド員の最良の実践のための基準とチェックリストの開発」

アン・クァンスン（韓国博物館教育協会）

「博物館活動に必要な保存修復専門家を育成するための教育プログラムの開発と実践」

神庭信幸（東京国立博物館）

テーマ３：社会とのつながり

「社会変革のための博物館教育」

黒岩啓子（ラーニング　イノベーション　ネットワーク）

「持続可能な社会のための教育と博物館」

林　浩二（千葉県立中央博物館）

「地域・施設連携で街を楽しむ事業～『鳴く虫と郷街』」

坂本　昇・中脇健児・角正美雪・田中良尚（伊丹市昆虫館）

「博学連携ネットワークの構築～教員のための博物館の日を通じて～」

久保晃一・渡邊千秋・岩崎誠司・小川義和・永山俊介（国立科学博物館）

田中邦典（埼玉県立蕨高等学校）

〈このほか，12件のポスター発表が行われた〉

◇12月２日（日）

エクスカーション：千葉県立房総のむら，成田山新勝寺，川村記念美術館

３．成果の概要

ICOM（国際博物館会議）を構成する国際委員会の一つCECA（教育と文化活動委員会）の，アジア太平洋地区における初めての集会であり，地域内五ヶ国（日本，韓国，台湾，シンガポール，オーストラリア）からの各国の状況についての基調講演と，公募による個別報告（口頭発表とポスター）および討論によって，国内外の多くの事例について貴重な情報を交換することができた。口頭発表のテーマは，１．博物館体験と教育活動　２．博物館における人材の育成　３．社会とのつながり，の三つで，計14件。ポスター発表は計12件であった。テーマもよく噛み合い，全体として水準の高い集会となった。日本とこの地域での，博物館教育に関する研究と実践，およびネットワーク形成に，大きな意義を持つ集会となった。

刊行物としては，予稿集を作成して当日および希望者に配布した他，基調講演と個別発表については，加筆修正して出版する（予定書名『博物館教育の可能性』）。また，当館ホームページにおいても，内容を公表する予定である。

なお，下記の紹介記事がすで掲載されている。

太田歩「ICOMレポート『ICOM-CECA アジア太平洋地区研究集会』からの報告」（『博物館研究』2013年３月号）

「国際シンポジウムICOM-CECAアジア太平洋地区研究集会をふりかえる」（『ミュゼ』2013年３月号）

４．事業組織（◎は代表者）

◎小島　道裕　　本館研究部・教授

久留島　浩　　本館研究部・教授
小林　繁樹　　国立民族学博物館
上羽　陽子　　国立民族学博物館

（３）日本関連在外資料調査研究　2010～2015年度

１．【研究目的】

欧米における日本文化研究の比重が低下するなか，欧米・アジア諸国に現存する日本関連人間文化研究資料に関しては，専門研究者の不在・不足や個人所蔵であるなどの理由から，資料所在情報が把握できていないところも多く，また詳細調査が実施されていないためその全体像や資料的価値が確定していないものも多数存在する。これらについて，文化人類学，民俗学，歴史学，国文学，美術史学など人間文化研究の諸分野の専門的研究者の派遣・招請を行うことによって，国際共同研究に基づく調査・研究を実施し，放置・劣化・散逸から資料群をまもって資料の保存・活用に道を開くとととともに，資料の詳細な情報をはじめとする調査成果・研究成果に関わる情報を広く提供することで，国内外の日本文化研究の発展・深化に貢献することを目的とする。

２．【研究対象】

日本関連在外資料は，世界各所に点在しているが，資料が作成された時代背景や海外に持ち出された事情等も様々であるため，本事業では，比較的所在のはっきりしている次の資料群を調査研究対象とする。

１）シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された在外資料（A）

２）近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料（B）

３．【研究方法】

人間文化研究機構（以下「機構」という）に帰属する大学共同利用機関及び大学附置研究所などで個別に行われてきた在外資料に関する情報蒐集・調査・研究について，機構として計画的・組織的に研究体制を構築し，21世紀にふさわしい新たな国際共同研究を実施する。

さらに国際的な研究連携を密にした長期展望のもとで，さまざまな学術分野の国内外日本研究者による「在外資料」の総合的な共同研究を展開し，広義の日本文化研究と高度な教育に資する文化資源学的研究領域の創生を試み，海外における日本資料を体系的に文化資源化することでその情報を公開・発信し，国内外の研究者等が有効活用できるようにする。

また，海外の貴重な在外資料等の整理・保管等が充分になされていない問題を解消するため，派遣・招聘を含めた国際研究ネットワークの構築を図り在外資料の保存についても検討する。

４．【研究成果の公開】

日本関連在外資料調査研究の研究活動の結果として，以下のような全体的成果のとりまとめを行い展示も含んでさまざまな形で研究成果を公開する。

１．目録及びデータベースを作成しホームページ等での公開

２．国際シンポジウムによる調査研究成果の公開
３．書籍，論文集等の刊行による公開
４．巡回展示（海外での展示を含む）による公開

５．【研究組織・研究計画】

日本関連在外資料調査研究は，機構が設置する日本関連在外資料調査研究委員会が，企画・調整等を行い事業の総合的推進を図る。

調査研究は，Ａ・Ｂ２つの研究対象について総括機関（国立歴史民俗博物館及び国際日本文化研究センター）を中心として，実施機関及び連携実施機関が協力して次の調査研究を実施する。

なお，２つの研究対象について各々専門部会（各研究課題の代表者で組織する）Ａ及びＢを設け個別具体的な調査研究の実施計画等を審議する。また，２つの専門部会の調整組織として，各研究課題の総括責任者を中心として総括部会を設置し，日本関連在外資料調査研究の全体調整を図る。

本館では，Ａの研究総括および５つのチームを，Ｂではチームの一つを担当する。

A「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」2010～2015年度

（研究代表者　久留島　浩）

１．研究概要

本調査研究は，19世紀に収集されたことが確実な日本関連資料のうち，まとまりがあり同時代の日本文化や歴史を表象することのできるコレクションを，可能な限り総合的に調査研究する。その際，少なくとも資料に関する詳細なデータを，できる限り多く共有することで，同時期の「規準」となる「もの資料」を明確にする。19世紀のコレクションのうち，下記に示すようにいくつかのモデルケースを設定し，国内外の研究者コミュニティが，詳細な「記録」というかたちであれ，「実物」のままであれ，未来にわたって「共有」するために，長期にわたって継続でき，かつ成果を広く共有しうる調査方法と実現できる調査計画と公開方法を立案，実行する。同時に，すでに目録が整備されているもののうち，相互利用に関する合意ができる場合は，協定など利用規程を定めたうえで「共用」化を進める。さらに，資料群の現状（状態）を把握することで，今後の長期的保存・修復計画を策定することも目指したい。

具体的な調査研究は，以下のとおり。

（ａ）シーボルト（父子）関係資料の復元的調査研究（詳細調査）

１）ブロンホフ・フィッセル・シーボルト（父の一回目の来日時のもの）コレクションの総合的調査研究
＝19世紀前半の日本関連在外資料の「規準」資料たりうる

２）シーボルト（父）の二回目の来日時の収集資料および，子どもたち（アレクサンダー・ハインリッヒ）に関わるコレクションの総合的調査研究（詳細調査）
＝19世紀後半の日本関連在外資料の「規準」資料たりうる

（ｂ）海外に所在する（シーボルト父子関係史料以外の）日本関連資料の「共有資源」化に関する調査研究
（概要調査が中心だが，一部拠点を決めて詳細調査を行う）

1）ライデンを中心とする，具体的な資料（書籍・地図・絵画など）にそくした詳細調査・目録化とそれをふまえた研究

2）北米・ヨーロッパにおける日本関連資料の概要調査とその目録化（いくつかの拠点を設定して詳細調査を実施し，その目録も作成する）

調査研究は以下の７つのジャンルで，８チームに分かれて実施する。各チームの成果のとりまとめおよび毎年の具体的な調査計画の策定については，以下のとおり総括チームを設ける。この総括チームから，代表と副代表が機構の「日本関連在外資料調査研究委員会」のもとに置かれる「専門会議」に出席する。

【総括チーム】　久留島　浩と各チームの代表９名および事務局

以上の研究を実施するために，次のような研究チームをたてることにした。

（ａ）①**【ブロンホフ・フィッセルチーム】　代表：松井洋子（東京大学史料編纂所教授）**

シーボルト父子コレクションの復元のための前提作業として，ブロンホフ・フィッセルのコレクションについての詳細目録（日本語版，できれば英語版も）を作成する（ライデン国立民族学博物館などと機構との間で協定を結ぶ必要がある）。【平成22～24年度】

②**【ミュンヘンチーム】　代表：日高　薫（国立歴史民俗博物館教授）**

ミュンヘン国立民族学博物館と共同で画像つき詳細目録を作成することを課題とする。この目録を作成するとともに，シーボルトの最後の「日本展示」を復元することで，あらためてシーボルト・コレクションの性格およびそれが表現しようとした「日本」とはどのようなものだったのかについて，できれば「復元展示」（シーボルトが構想した日本展示）を実施したうえで，議論する機会を持ちたい（同館と機構との間で協定を結ぶ必要がある）。【調査目録作成は平成22～26年度，展示は終了後を予定】

③**【アレクサンダー・ハインリッヒチーム】　代表：宮坂正英（長崎純心大学教授）**

ドイツ・シュルヒテルンのブランデンシュタイン家に収蔵されているシーボルトファミリーアーカイヴズについて，とくにアレクサンダーおよびハインリッヒ関係資料のうち未撮影のものについてデジタル撮影し，詳細目録を作成する。そのうえで，シーボルト（父）関係の未撮影資料があれば撮影する（協定が必要である）。なお，ボーフム大学にもシーボルト関係資料が収蔵されており，ブランデンシュタイン家文書と関連づけることができれば，両者の資料的価値も高まり，研究資源の共有化が進むことになる。この点では，この資料をデジタル撮影した宮崎克則氏および同大学との協力も不可欠である。（所蔵者・所蔵機関との十分な協議が不可欠である）【ブランデンシュタイン家の調査は平成22～25年度，ボーフム大学は平成24，25年度】

（ｂ）④**【ロシア・北欧チーム】　代表：近藤雅樹（国立民族学博物館教授）**

⑤**【ライデンＡ（書籍）チーム 】　代表：鈴木　淳（国文学研究資料館教授）**

【ライデンＢ（地図・絵画など）チーム】　代表：青山宏夫（国立歴史民俗博物館教授）

ライデン大学・ライデン国立民族学博物館などオランダにおける日本コレクションのうちのまとまった資料群について，画像つきの詳細な目録を作成する（日本関連書籍，地図，死絵などが具体的な候補としてあがっている（上記①のような協定を結ぶ必要がある）【平成22～25年度】。

⑥【イェールチーム】　代表：近藤成一（東京大学史料編纂所教授）

⑦【海外所在調査（概要調査）チーム】　代表：大久保純一（国立歴史民俗博物館教授）

現地の研究者・学芸員の助力を得ることができ，所蔵機関の了解が得られること（協定を結ぶこと）が前提ではあるが，北米・イギリス・フランス・スイス・ドイツにおける日本コレクションの基礎的所在情報を収集したうえで，何か所かの概要調査を実施し，概要目録を作成する。これについては，２年目に獲得目標を厳選する。

※北米では，モース・コレクションの現状調査を平成22～24年度に行い，今後の計画をたてるほか，アメリカではオークランド博物館【～平成27年度】，カナダでは文明博・ロイヤルオンタリオ博【～平成24年度】，イギリスではウェールズ国立博物館【～平成25年度】で博物館調査を始める。

⑧【異文化交流・情報共有化推進チーム】　代表：安達文夫（国立歴史民俗博物館教授）

調査地をとくに限定しないが，異文化間の交流という観点から在外日本関連資料の持つ意味を検討すること，および今回の研究の目玉でもある「情報共有方法」について検討することも不可欠なので，別途，チームを設ける。予算は，情報共有化のためのものを計上するが，メンバーが調査地を選択してそれぞれのチームの調査に参加するときの旅費は，それぞれのチームが負担することを原則とする。

※ロシア・北欧チーム，ライデンＡ（書籍）チーム，イェールチームについての記述は省略する

２．６年間の研究目的

（ａ）シーボルト（父子）関係資料の復元的調査研究

１）ブロンホフ・フィッセル・シーボルト（父の一回目の来日時のもの）コレクションの総合的調査研究

①現在の所在が分散しているブロンホフ・フィッセル・シーボルト（父の一回目の来日時のもの）コレクションに関する「総合的な目録」を作成すること。

②シーボルト･コレクションの自然史関係資料群と人文文化関係史料群との相互活用を進めること(調査・研究・公開のうえで，自然史系研究者と人文系研究者とが相互交流，共同すること)。

２）シーボルト（父）の二回目の来日時の収集資料および，子どもたち（アレクサンダー・ハインリッヒ）に関わるコレクションの総合的調査研究

①シーボルト（父）が二度目の来日（1859～1862）で収集したと考えられるコレクションの総合目録を作成すること

②シーボルトの二人の息子（アレクサンダーとハインリッヒ）自身が収集した日本関連資料，彼らが残した書簡・記録類，および彼らが収集に関わった日本関連コレクションについての所在とその概要を把握すること

（ｂ）海外に所在する（シーボルト父子関係史料以外の）日本関連資料の「共有資源」化に関する調査研究

この６年間は，おそらく「概要調査」にとどまるものと思われるが，第一に，いくつかの資料所蔵機関（博物館・大学）で，まとまった「もの資料」を中心に，いくつかのデジタル画像つき詳細目録を作成することで,「もの」資料にそくした具体的な研究を進めるとともに，今後の調査研究上の課題を明確にしたい。具体的には，ライデンに伝来するブロンホフ・フィッセル・シーボルト収集の書籍や地図などを中心にしながら，少なくとも，海外の収蔵機関でどのような調査を行い，どのように記録

し，目録化するかについてのモデルをつくることにしたい。同時に，資料収蔵機関・収蔵者および海外の日本研究者にとっても「共用」できるようにしたい。

３．今年度の研究目的（課題）（歴博チーム以外の研究テーマは省略した）

【総括チームおよび事務局（歴博に設置)】

・国際シンポジウムの開催

・国際協定の締結

・海外調査実現のための調整，新規海外調査事業実現のための準備

【国立歴史民俗博物館が統括する各チーム】

・ミュンヘン国立民族学博物館，ベルリン図書館等，シーボルト関連資料の海外調査実施

・シーボルトコレクションおよびそれに関連する各種史料の翻刻・翻訳・刊行化

・近代に収集されたその他の日本関連在外資料（シーボルト以外のコレクション）の調査

・日本関連在外資料の研究成果公開のためのDBおよびホームページの作成

４．今年度の研究経過（ロシア・北欧チーム，ライデンＡ（書籍）チーム，イェールチームの活動は省略）

【総括チームおよび事務局】

・海外資料調査関係

①新規の大規模海外資料調査のための施行準備

・３月10～15日　バチカン図書館（マリオ・マレガ神父収集豊後切支丹文書の予備調査及び交渉のため）

②国際的連携・協力の推進状況

「成果の共有および公開」を可能とするために，海外の日本コレクション所蔵機関・所蔵者と機構の間の調査・研究協力協定（覚書）を以下の機関と締結した。・・・ミュンヘン国立民族学博物館，ロシア・ピョートル大帝人類学民族学博物館（クンストカーメラ)，ブランデンシュタイン家（ドイツ)，ボーフム大学（ルール大学ボーフム・ドイツ)，ウェールズ国立博物館（イギリス）

・国内外の研究者の育成状況

①イギリス・ウェールズの日本関連資料調査に関連する人的交流

②ドイツで日本学を学ぶ大学生を対象とするワークショップ開催

ａ）ボーフム大学大学院生を対象とする講座と実習（2012年度）をした。

１）６月古文書解読講座「シーボルト関係文書のくずし字文書を読む」（久留島浩）

２）11月古文書解読講座「近世の寺子屋関係資料を読む」（宮崎克則）

３）同大学大学院生と共同で調査・撮影方法を行い，その技術を教える実習をした。

４）同大学大学院生にボーフム大学所蔵シーボルト文書目録（ドイツ語版）の翻訳を委託。

ｂ）ワークショップは，今後も他大学の院生や学芸員・司書を対象に開催する予定。

③チューリッヒ大学東洋日本美術史学科学生と共同でスイスの博物館が所蔵する日本美術資料の調査を実施。（調査機関：ジェネーブ美術・歴史博物館〈浮世絵数百点〉・ザンクトクトガレン染織博物館〈染織数百点〉・アリアナ美術館〈陶磁約700点〉・ザンクトクトガレン歴史民族博物館〈陶磁約50点〉）成果は同大学がチューリッヒ大学・日本大使館と共同開催する日本美術展で発表予定。

・国際シンポジウム

①「第６回シーボルト・コレクション国際会議」への参加。(於ライデン・10/18〜19コメント：日高　薫)

②人間文化研究機構・国立歴史民俗博物館・チューリッヒ大学の共催，日本美術に関する国際シンポジウム「Moving Art: East Asian Objects and their journeys」で口頭発表。(於チューリッヒ大学３/７〜９日，発表者：大久保純一，日高　薫，澤田和人，櫻庭美咲)

・国際研究集会

①「今後のスイスにおける日本関連コレクションの調査と研究をめぐって」を主催　(研究発表：「スイスのコレクションについて」チューリッヒ大学トムセン教授（ゲスト)・「ミュンヘン国立民族学博物館所蔵シーボルト・コレクションについて」櫻庭美咲，於歴博８/６　出席者９名)

②「国立ライデン民族学博物館所蔵日本関連資料調査と今後の展望について」を主催　(於歴博11/９　出席者10名)

・国内研究集会

①「ミュンヘン国立民族学博物館所蔵シーボルトコレクション民俗資料に関する研究会」を主催（研究発表：「シーボルトコレクション民俗資料調査全体の概要について」山田仁史，「同コレクション民俗資料原料・自然物の調査について」櫻庭美咲，於歴博３/30　出席者５名）

・成果物発信事業

①アレクサンダー・ハインリッヒチームおよびミュンヘン・チームのDBを作成した。

②ニューズレターからホームページに切替え，ホームページを完成させた。

③ミュンヘン民博所蔵シーボルト・コレクション目録翻訳終了・校正作業を実施

【ブロンホフ・フィッセルチーム】

・資料調査

①マティー・フォラー氏，邦子・フォラー氏は10月31日より11月18日まで静岡県・神奈川県における調査を行なった。

②ライデン国立民族学博物館の改修工事のため，ブロンホフ・フィッセル関連資料の現物確認は延期。

・成果発信事業

①ブロンホフ・フィッセル関係資料総合目録の翻訳を継続，両氏来日中に研究会を開き内容を検討。

②同目録出版のための仕様の検討を行ない，出版社との交渉を開始した。

・国際連携・協力の推進状況

①同目録出版のため所蔵者であるライデン国立民族学博物館の館長が2013年２月６日に歴博を訪問した際，目録や画像資料掲載や調査のための交渉を実施。

【ミュンヘンチーム】

・海外資料調査

ミュンヘン民博所蔵シーボルト・コレクション詳細調査

①第４回調査：５/28〜６/１　漆器，陶磁器，染織，仏像，古銭の調査および撮影

参加者：日高・澤田・櫻庭・勝田・佐々木（町田市立国際版画美術館）

②第５回調査：２/４〜２/15　民具，染織，漆器，陶磁器の調査および撮影

参加者：日高・澤田・櫻庭・勝田・山田（東北大学)・中戸（元興寺文化財研究所）

今年度の調査により漆器，絵画，地図，染織，仏像，陶磁，麦藁細工，民具，古銭，書籍，自然物，面から成る約4，200点（60％）の調査を完了（総数約７千点の内）

・国内研究会

①12/28歴博でシーボルト・コレクション目録の翻訳編集打合せ（櫻庭・山田）

②「ミュンヘン国立民族学博物館所蔵シーボルトコレクション民俗資料に関する研究会」を主催（於歴博　３/30　研究発表：「シーボルトコレクション民俗資料調査全体の概要について」山田仁史，「同コレクション民俗資料　原料・自然物の調査について」　櫻庭美咲

出席者：久留島浩，山田仁史，青木隆浩，角南総一郎，櫻庭美咲）

・国際シンポジウム

「第６回シーボルト・コレクション国際会議」参加（ライデン・10/18～19日高　薫）

・成果発信事業

①ミュンヘン民博所蔵シーボルト・コレクションのDB作成（調査済みデータ入力終了）

②ミュンヘン民博所蔵シーボルト・コレクション目録翻訳終了・校正作業（櫻庭・山田）

③江戸博が調査済みのミュンヘン民博の資料をDB化するための入力完了

・国際連携・協力の推進状況

①ミュンヘン民博の依頼により国会図書館（東京）が所有するシーボルト関連資料の複写を入手，同博へ寄贈した。(Yeddo ： nach Original-Skizzen / von Wilhelm Heine)

【アレクサンダー・ハインリッヒチーム】

・海外資料調査

①ブランデンシュタイン家のアレクサンダー並びにハインリッヒ・フォン・シーボルトの未調査資料の調査・撮影（６月２日～５日と９月11日～同月14日）

②ベルリン国立図書館のシーボルト関係資料の調査・撮影（９月17，18）約1,700カット撮影完了。

・成果発信事業（データベース，その他）

①ブランデンシュタイン家文書のDBは，資料約100点について作成。

②アレクサンダーおよびハインリッヒの書簡については新出撮影資料のうち約80通の簡易目録を作成。

③アレクサンダー関係書簡は全部で約550点，ハインリッヒ関係書簡は約200点。

④９月19～21日，ベルリン国立図書館で開催された第19回欧州日本資料専門家会議（EARJS）において，「シーボルト研究の現状と課題」と題し，本プロジェクトの成果を報告した（宮坂正英）。

【ライデンＢ（絵図・絵画など）チーム】

・海外資料調査

①ライデン国立民族学博物館所蔵地図・絵画〈＝死絵〉・漆器の調査は，同館の希望により調査が計画されていたが，同館の工事の都合により調査実施を来年度に延期した。

・成果発信事業

①同館から提供された「死絵」資料のデジタル画像に基づく棒目録を作成（山田慎也）。

・国際連携・協力の推進状況

①ライデン国立民族学博物館館長の歴博訪問に際し，上記調査の実現に向けた交渉実施（２月６日）。

【海外所在調査（概要調査）チーム】

・海外資料調査

①北米における日本関連資料調査（ピーボディー・エセックス博物館）7月

②イギリスにおける日本関連資料調査（ウエールズ国立博物館，ポウィス城，チャーク城等）８・１月

・国際シンポジウム

①第６回シーボルト・コレクション国際会議　（10月17日～19日，於ライデン国立民族学博物館）における口頭発表。演題：「1850年代の米国絵入り新聞に見られる日本イメージの形成について：川原慶賀の絵画を通して」（小林淳一）

【異文化交流・情報共有化推進チーム】

・成果発信事業

①ミュンヘン民博所蔵シーボルト・コレクションの所蔵目録データベースに掲載する，調査資料に関する情報の項目を検討し，性格の異なる資料（モノ・文字）間で共通に利用し，相互にデータをリンクして参照できるようなデータベースの構造を検討し，その試作版を完成させた。

②本プロジェクトの活動内容を公開するためのホームページを完成した。

５．共同研究員（◎は代表者，○は各研究チーム代表）

◎久留島　浩	本館研究部・教授	○日高　　薫	本館研究部・教授
○青山　宏夫	本館研究部・教授	○大久保純一	本館研究部・教授
○安達　文夫	本館研究部・教授	○松井　洋子	東京大学史料編纂所
○宮坂　正英	長崎純心大学人文学部	○鈴木　　淳	国文学研究資料館★
○近藤　成一	東京大学史料編纂所★	○近藤　雅樹	国立民族学博物館★
齋藤　　努	本館研究部・教授	澤田　和人	本館研究部・准教授
青木　隆浩	本館研究部・准教授	山田　慎也	本館研究部・准教授
保谷　　徹	東京大学史料編纂所	笹原　亮二	国立民族学博物館
宮崎　克則	西南学院大学国際文化学部	岩淵　令治	学習院女子大学
大場　秀章	東京大学総合研究博物館	田賀井篤平	東京大学総合研究博物館
山田　仁史	東北大学大学院文学研究科	角南聡一郎	元興寺文化財研究所
小林　淳一	江戸東京博物館	小山　周子	江戸東京博物館
原田　博二	長崎純心大学	海江田義弘	長崎県庁
原田　　泰	公立はこだて未来大学	勝田　　徹	本館管理部・専門員
三木　美裕	本館研究部・客員教授	櫻庭　美咲	本館研究部・機関研究員

ハンス・トムセン	チューリッヒ大学
マティ・フォラー	ライデン国立民族学博物館
レジーネ・マティアス	ボーフム大学
ブルーノ・リヒツフェルト	ミュンヘン国立民族学博物館
邦子・フォラー	シーボルトハウス
ヨーゼフ・クライナー	法政大学大学院人文科学研究科
マルクス・リュッターマン	国際日本文化研究センター

フレデリックス・クレインス　国際日本文化研究センター

※歴博メンバー以外（★チーム）の共同研究員は省略した

B　近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究
2010～2015年度

（研究代表者　鈴木　貞美）

「南北アメリカの移民関係資料ならびに移民社会に関する研究」
2010～2015年度

（研究代表者　原山　浩介）

１．目　的

本研究では，北米・ハワイ，ならびにスペイン語圏のラテンアメリカに存在する日系移民関係資料をめぐり，資料状況ならびに資料を保有する諸機関・コミュニティ・個人の現状を調査する。その際，単なる資料調査に終わらず，資料を支えている日系人コミュニティの現状等にも焦点を当て，地域調査との連動を図るものとする。

本調査は，資料調査と地域調査を連動させて実施することに特徴がある。これは，次の二つの理由による。

第一に，一般に近現代史資料の保存は，それらが映し出す歴史に対する人びとの関心に支えられる形で成立しており，関心の希薄化は資料の廃棄や散逸につながる。日系移民関係資料についても同様で，とりわけ移民第一世代の高齢化は，資料保存の危機を招来する。本研究では，資料状況とともに，資料の保存を支えるバックグラウンドの調査を並行して実施する。

第二に，移民関係資料に関わるバックデータは，もちろん博物館等で整理されているケースもあるが，多くの場合，資料を維持する個人や地域社会，日系人団体などで共有されている口頭伝承に依拠せざるを得ない。したがって，資料調査と地域調査を連動させることで，資料の持つ意味を十全に把握する必要があると考えられる。

以上の点から，本調査を，資料―地域の双方を視野に収める形で進めていき，資料とそれを取り巻く周辺状況をトータルに把握することを目指すこととする。

２．今年度の研究目的・計画

北米では，シアトル・ハワイ両地域における調査を継続するとともに，シアトルのウィングルーク・ミュージアム，ワシントン大学図書館，ならびにハワイのビショップミュージアムとの覚書の取り交わしを行う。

ハワイについては，ビショップミュージアムに軸足を置きつつ，ステートアーカイブ・JCCH・ハワイ大における調査を併行して行い，データベース作成に向けて作業を進める。さらに，朝日班（国立国語研究所）と連携を図ることとし，有機的な連関のあり方を相互に検討するとともに，必要に応じて合同調査を行う。

また，シアトルにおいては，昨年度までの作業を継続するとともに，成果物のデータベース化のための作業を継続する。

中米では，メキシコでの個人所蔵の資料調査を継続し，並行して地域調査を実施する。また，この進捗具

合を考慮しながら，可能であれば，スペイン語圏の他の地域の調査先に着手する。

３．今年度の研究経過

今年度，本グループは，未だ評価の定まっていない資料を発掘し，研究資源化することを主目的としつつ，調査を行った。

【中米】

メキシコにおいて，個人コレクションを中心とする調査を実施した。資料所蔵者が，自ら所有する資料を用いて執筆を行ってきたが，その完成に近づいており，その後の資料の扱いについて，所蔵者がどのように考えるのかについて，相互の信頼の下で相談を継続した。

また同時に，地域社会において資料がどのように所有・管理されているのかをめぐる全体像を明らかにするべく，聞き取り調査を行った。（８月～９月，３月）

【北米】

（１）ワシントン大学図書館，ウィングルーク・ミュージアム（いずれもシアトル）における資料のデジタル化作業を継続して行った。

（２）取り交わす覚書の内容を相互に検討した。

【ハワイ】

（１）ビッショップミュージアム所蔵の写真資料につき，webカタログ作成のための手順についての交渉を継続するとともに，写真資料の選定を行った。（９月・３月）

（２）ハワイにおける日系人史の展示表象に関する研究報告を行った。（３月）

４．今年度の研究成果

北米では，シアトルのウィングルーク・ミュージアム，ならびにワシントン大学図書館との間で，資料のデジタル化とデータベースの公開について合意しており，現在のところ，データベース製作のためのデジタル化作業を進めている。対象となるのは，両館が所有する日本人移民関係の写真群であり，それらのなかには日本語の情報が含まれているものもある。それらを日英それぞれの言語情報を付して公開するための協同作業を進めている。この作業は，今後，予算状況などに応じてその処理量や範囲を拡大させていくことになる。

ハワイについては，ビショップミュージアムとの間で，同館が所有する日本人移民関係の写真についてのウェブカタログの作成のための作業を行っている。なお，ビショップミュージアムは，必ずしも移民に特化した展示を行う機関ではないことから，この機に資料の公開性を高め，日本の研究者や博物館を含む，広範な利用を促すことで，歴史資料としての評価をさらに高めていく必要があると考えられる。

中米では，メキシコで個人コレクターとの間で，資料の収集の経緯やバックグラウンドについてやりとりを重ねつつ，信頼関係の醸成に努めている。どこで管理されるかはさておき，将来的に散逸しないための方法がどのようなものかを模索している。また，メキシコ大学院大学に，日系人関係の資料が多く収蔵されていることがわかっており，しかも日本語を理解できるスタッフがいないか，きわめて少ないとの情報がある。こちらについては，今後の検討課題である。

なお，本チームに対する中間評価として，調査の過程で作業がインテンシブになっていくこと，今後３年

間の研究計画を再検討して研究目的・対象を限定するか，研究組織を拡大することが必要である旨の指摘を受けた。予算等の制約を考慮すると，本チームでは，これまで進めてきている，ハワイ・シアトル・メキシコでの資料調査とそのとりまとめに作業を集中させること，また本研究の研究期間を超えて取り組まねばならない課題を抽出すること，さらには将来の調査・研究に資するネットワークを構築すること，の３点に分節化して，作業の整理・集中をはかっていくこととしたい。

このほか，日本の国立国会図書館政治資料課と，移民関係資料の今後をめぐって協議を行った。これまで，国内外の各機関が，相互に暗黙の「棲み分け」をする状態があったが，移民関係資料に関する取り組みが進むにつれ，機関をまたいだ資料の参照や検索，あるいはそもそも移民関係資料をどのようなパースペクティブの下で考え，扱っていくのかということに関するコンセンサスの欠如が，問題になっている。このことを踏まえ，本事業のなかで，国内外の関係機関，とりわけ北／中／南米をめぐる移民関係資料を扱う機関との合同シンポジウムなどを開催する必要があることが確認され，これは課題として残すことになった。

５．研究組織（◎は研究代表者）

中田　英樹　明治学院大学国際平和研究所・助手
崎山　政毅　立命館大学・教授
秋山かおり　松本市立博物館・学芸員
三木　美裕　カナダ文明博物館／本館研究部・客員教授
◎原山　浩介　本館研究部・准教授
山田　慎也　本館研究部・准教授
玉井　哲雄　本館研究部・教授